今号の特集
機械姦
キカイカン
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
cover illustration by ちょびぺろ
成年向け雑誌
連載&読み切り小説
新連載 大熊狸喜×しゅんぞう
斐芝嘉和×汰尾乃きのこ
山本沙姫×こうきくう
壱状什×牡丹
舞麗辞×草上明
新居佑×NO.ゴメス
上田ながの×宮越良月
ナるカく×Alber
酒井仁×ちょびぺろ
えっちマンガ&4コママンガ
新連載 からすま弐式
楠木りん／天海雪乃
ぱふぇ／儚枯悠天
嘉納あいら
立ち読み版
カラーピンナップ
うるし原智志
竜胆
阿部いのり
ちょびぺろ
小説：黒井弘騎
挿絵：竜胆
別冊付録
ミルフィーユ新作ゲーム
『粘獄のリーゼ』の
原作小説が
まるまる付いてくる！
表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス
vol.81
2015.04
DIGITAL EDITION
デジタル版

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

電詠戦姫ツカサ
DENEISENKI TSUKASA
小説／酒井仁
NOVEL
挿絵／ちょびぺろ
ILLUSTRATION
科学の発達した近未来、
悪と戦う正義のヒロインが無機質な機械の餌食に！

どれだけ文明が進もうとも、どれだけ人が進化しようとも、世に悪と犯罪の種が尽きることはない。
そしていつの世も、弱者を食い物にして甘い汁を吸おうとする不逞の輩が好むのは闇――清らかな光の届かぬ陰と相場は決まっている。
海路輸送の著しい発展と共にもう使われなくなって久しい港の廃倉庫に、複数の人間が声を潜めて怪しげなことをしていた。
一方は見るからにガラの悪そうなギャング風の男たち、そしてもう一方は一見ただの人間のように見えて、その顔は明らかに異形。青黒い巨体をマシーンに乗せた、ボスらしき生物が「げっげっ」と不気味な声を響かせると、翻訳された地球語が流れる。
『約束通り、超小型レイガン五〇丁にマイクロミサイル三〇基、非金属型時限爆弾二〇だ』
「ああ、たしかに。ではこちらが地球産稀少生物種のDNA八〇体分になる」
異星人の子分がコンテナを運び始め、ギャングボスと思しき男が青黒い肉塊に金属ケースを渡そうとした、そのとき――。
「そこまでよ。全員動かないで！」
「なにっ!? 公安か！」
「異星技術使用武器密輸、ならびに地球種遺伝子輸出法違反。現行犯で逮捕します」
『馬鹿な！ 警邏ポッドも連れずにだと……』
通常、組織犯罪を摘発する現場には、警邏ポッドが多数使用され、現場を取り囲むのがセオリー。
だが、対象犯罪者の危険レベルが高すぎる場合、可及的速やかに現場を制圧することのできる、特殊部隊員が単独で投入されることがある。
『まさか――電詠戦姫！』
「ご名答」
異星のギャングたちの前にしゅたっと降り立ったのは、惜しげもなくボディラインをさらけ出した少女。白とピンクを基調としたレオタードスーツに黄金のラインが走る。
しなやかな両脚を包むオーバーニータイツ、そして肘上まである長手袋。むっちりと重たげな巨乳を支えるようなメカ部分の下は、きゅっとウエストがくびれている。襟元の真紅のリボンの中央には、不思議な光をたたえた宝玉。
そして腰まで伸びた茶色の髪はしゃらりと音を奏でそうにさらさらで、頭の両脇で髪を括った赤い髪飾りがアクセントになっている。
その顔は、意外なほどあどけない。場所が場所でなければ、少女は何かのイベントに出演するアイドルかコンパニオンだと誰もが思っただろう。
こんな美少女が大勢の悪党を相手にたった一人で立ち向かうなど、まったくの無謀。
だが、少女は不敵な笑みを浮かべ、言った。
「『電詠戦姫隊』、ツカサ・ハヤミネよ。全員、おとなしく投降しなさい!!」

西暦二〇三七年、世界は一変した。
自分たちがこの広い宇宙の孤児ではないかという寂寥を抱きつつ、空を観測し続けてきた人類の前に、彼らは現れた。
すなわち、銀河連邦との接触である。
人類文明をはるかに凌駕する彼ら異星人との交流により、地球文明は飛躍的に向上した。
長らく人類を悩ませてきた諸問題……食料と水の問題、そしてエネルギー問題は一挙に解決し、飢えや紛争、資源を巡っての国家間の対立は目に見えて減少していった。
そして五年後……地球統一政府が設立され、人類は外宇宙よりの訪問者と出会うことで、初めて「地球人」という自覚を得るにいたったのである。
だがその一方、地球という新たなマーケットに邪な食指を伸ばす存在もいた。
まだ未成熟な地球人を相手に、異星のオーバーテクノロジーを使った兵器を売り込んだり、あるいは単純な暴力で脅し、奪い、騙し、法を犯して私腹を肥やす犯罪者や犯罪組織もまた、地球に流れ込んできたのである。
事態を重くみた地球統一政府は、銀河連邦に協力を要請、連邦よりの技術提供によって異星犯罪者、ならびに異星文明を使用した犯罪に対抗できる特殊部隊を設立した。
それが――「電詠戦姫隊」であった。
「がっ」「ぐあぁっ」「な、なんだっ？」
ギャングたちが悲鳴と共に次々と硬直する。その身体から一本の糸が伸びていることに、誰が気付いただろう。
糸の端は可憐なコスチュームをまとった少女、ツカサに繋がっていた。
これは少女のまとった特殊戦闘スーツを形作る究極繊維「パーフェティクス」。装着者に超人的能力を与える超科学の結晶。
よく見るとツカサの唇が微かに動き、「唄」を奏でていた。調べによって電子・電磁波を自在に操り、機械のみならず生体をも行動不能にできる、それが「電詠戦姫」たる所以なのだ。
『くそっ、ドロイドども、起動せよッ』
青黒い巨塊の命令と共に、そこかしこのコンテナが開き、戦闘機械「ドロイド」が現れる。
凄まじいパワーと運動性、そして両腕に装着された重機関砲で敵を殲滅する非情のマシーン。もちろん許可なく地球に持ち込むことは違法である。
「呆れた、そんなものまで持ち込んでいたの？」
ドロイドたちは無言で銃口を少女に向ける。外観こそ武骨だが、動きは生き物のようにしなやかだ。

著者近況 「ライ・トゥ・ミー」という海外ドラマにハマっています。主人公のライトマン博士の声を当てている声優・平田広明さんがめっちゃいい！ ワンピースのサンジや、タイバニの虎徹役でも有名な方です。

『あの小娘を殺せぇッ』
ばりばりばりばりばりばりばり。
美少女の肢体を追って、大口径の銃弾が雨あられと降り注ぐ。武器密輸組織のボスは自らの乗ったマシーンを倉庫の天井にまで避難させているので、お構いなしに撃ちまくる。
「ちょっ、自分の部下まで巻き込んでなんとも思わないわけ？　ったく、信じられない……！」
床で気絶しているギャングたちに銃弾が当たらないよう、戦闘スーツの少女は素晴らしい跳躍でコンテナの上を飛び回る。
だが、逃げているだけではない。
くるり踵を返すや、ツカサは追いすがってきたドロイドに閃光のような突きを繰り出した。
「スナイプ……ショットッ！」
愛らしい少女の拳が、ドロイドの左腕肩関節部に吸い込まれた。次の瞬間、バチィッと火花が飛んでドロイドの腕ががくりと下がる。
「続けてッ！　ビー・スティンガー!!」
しなやかな下肢が一閃し、反対側の関節部に爪先が突き刺さると、右腕も機能停止に陥る。
これも「パーフェティクス」による強化能力。一見、素肌に見える部分にも実は薄い繊維が張り巡らされていて、ただのコスプレアイドルにしか見えない少女に強靭さとパワーを与えているのだ。
しかもツカサは、攻撃と同時にドロイドのコンピュータにもハッキングを仕掛けている。人工知能はたちまち機能を停止する
ばきっ、がすっ、ばきぃいいっ。
少女は銃撃を軽々とかわし、ドロイドを破壊していく。そして一分と経たぬうちに、全ドロイドが機能停止していた。
『ば、馬鹿な……あんな小娘一人に……』
度重なる小娘呼ばわりに、ツカサはムッとした顔をボスに向ける。
銀河連邦は治安維持のために、地球統一政府にパーフェティクスを技術供与した。だが、なぜかパーフェティクスの適合者は、若い女性に限られていた。故に電詠戦姫隊には若い女性しかいないのだ。
「空間凍結！　プレス・フリーズ！」
『ヒッ？　ぎ、ぎゃぁあああ……』
ボスの乗ったマシーンが、青白い立方体に包まれる。浮遊していたそれがごとりと床に落下した時、青黒い肉塊は立方体の中で凍りついていた。
「ふうっ、あとは本部に連絡するだけ……ッ!?」
ごぅん、という重々しい音に少女は一瞬で振り返る。ドロイドたちが入っていたコンテナ群の中で、ひときわ巨大なコンテナが開こうとしていた。
まだ戦闘ドロイドが残っていたということか。
やれやれ、と嘆息するツカサの目の前で、通常の戦闘ドロイドとはいっぷう異なる、巨大なマシーンが姿を現した。
「やれやれ、お寝坊さんはもう一度ベッドにお戻りなさい」
そう言って、起動したばかりの巨大ドロイドにパーフェティクスを放つ。
超科学の結晶、究極繊維はたちまちドロイドの人工知能に接触、その機能を停止させるはずだった。
ばちぃいいいっ。
「えっ……」
パーフェティクスが送ってきたドロイドの情報に触れた瞬間、ツカサは見えない何かに弾き飛ばされたように後ずさりしていた。
（パーフェティクスが弾かれた、いえ……逆ハックされた！　それに、こいつのスペックと機能は……）
がしゃん。
がしゃん、がしゃん、がしゃん。
幾本もの足と幾本もの腕を蠢かせながら近づいてくるドロイドに、電詠戦姫は初めて脅威を覚えていた。パーフェティクスが教えてくれた情報――それは、このドロイドが「試作型・対戦姫用バトルドロイド」だということだった。
「対戦姫ドロイドですって……舐められたものね！」
予想外の敵の登場に一瞬気圧されたものの、ツカサは闘志も剥き出しに巨大マシーンに突進する。
（ハッキングできなくても、関節さえ破壊すれば）
最も脆い関節部めがけ、必殺のキックを叩きこんだ。いかにバトルドロイドとはいえ、パーフェティクスで強化された戦姫の一点集中攻撃に耐えられるはずが――。
「きゃあっ」
関節を破壊するはずのキックはまともに弾き返され、ツカサは倉庫の床にもんどり打った。慌てて跳ね起きるその顔に、驚愕の色が浮かぶ。
（パワーが……落ちてる？）
対戦姫バトルドロイド、そのスペックは単に高性能と言うだけではなかった。戦姫の力の源とも言うべきパーフェティクスを逆ハックして機能を凍結させる、それがこのドロイドの真の能力。
攻撃を続けるか、撤退すべきか。
これまで幾多の戦いに身を投じてきたツカサの心に、ほんの一瞬迷いが生じた。それは「苦戦」と言うもの自体を知らなかった少女の油断。それをドロイドは見逃しはしなかった。
「きゃ……！」
ひゅっと飛んできた機械腕が、少女の左足首を捕まえた。
「このっ……放しなさいッ」
機械腕を外そうとする少女の両手首、そして右足にも素早くアームが絡みついてくる。モーターの唸

著者近刊　『魔法少女W調教 フレイア＆クリスタ』『引きこもり勇者のために美少女パーティーが一肌脱ぐようです』『乙女騎士団が隊の存続のために枕営業するようです』『お兄ちゃんが大好きな妹は実は「プロの妹」だったようです』　好評発売中！

りと共に、ツカサは空中に持ち上げられてしまう。
「くっ……パ、パワーが、上がらない……！」
電詠戦姫隊最強と謳われる少女は、生まれて初めて死の恐怖を感じていた。機能を凍結されたとはいえ、パーフェティクスには多少の防弾性がある。
だが、顔面を狙われればいかに戦姫といえどただでは済まない。しかし、大型ドロイドは武装されていないのか、銃口を向ける気配もない。
（なんなのこいつ？　対戦姫用ドロイドって一体）
ういいいいん。ういいいいいん。
レーダーサイトがツカサに向けられると、サーチャーの赤い光が少女の肢体を照らしていく。
豊満な乳房、くびれた腰、むちむちした太腿、ありとあらゆる部分を機械兵はつぶさに観測しているようだが、その意図は不明だ。
『デンエイセンキ――個体名ツカサ・ハヤミネ。データ収集を開始。身長……体重……胸囲……』
「なっ⁉」
ドロイドの機械音声にツカサは目を丸くした。
『心拍数、体温共に上昇……データ収集を続行』
これが人間の操作するドロイドなら、そこには操縦者の悪意を感じるところだが、完全自立型のドロイドは、プログラムされた命令にただ従うのみ。
だが、それにしてもツカサの体重や胸囲を計測することになんの意味があるのか。
「なんのつもりか知らないけど、プライバシーの侵害も甚だしいわよ！」
『筋力測定……当機のパワーアームを上回る数値は測定できず。引き続き刺激による反応を観測する』
「あっ」
がしゃんがしゃんという金属音と共に、細めのアームが何本も伸びてきた。丸みを帯びた先端がツカサの胸に近づいてくるのを見て、ぞわりと背筋が冷たくなる。
「な……やめて、近づかないで！　見てなさい、パーフェティクスの機能が戻ったらあなたなんか」
少女の抵抗を封じ込めたまま、アームの先端が胸部の膨らみを確かめるようになぞっていく。時折、乳房の弾力を確かめるように「ぐい、ぐい」と先端を押し込んでくる。
何本ものアームが少女の胸に殺到し、左右の膨らみをこねくり回し続ける。と、一本のアームの先端が「ういいい」とクリップのように開いた。
「いっ」
コスチュームの上から微かに盛り上がった突起部分を探り当てると、アームの先が右のニップルをつまみ上げた。痛いというほどの力ではないが、ツカサは眉をひそめる。
『胸部突起物への刺激に反応――』
ぎゅうん……ぎゅうん……乳首をつまんだアームの先端が、ゆっくりと回転を始めた。パーフェティクスでできた布地が擦れ、その下で少女の敏感な突起がしこってゆく。
恥ずかしいと思っても、こればかりは刺激に対する反応なので、自分でどうすることもできない。懸命に身をよじって抵抗するものの、別のアームが左乳房にも伸びてきて、ニップルを弄り始めた。
（やだ……こんな機械に弄られて乳首が立っちゃうなんて！　こいつ、絶対に許さない！）
戦姫の力の源、パーフェティクスさえ再起動すれば……あるいはツカサからの定時報告がないことに気付いた戦姫隊本部が動いてくれれば……だが、いまはこの武骨な機械に弄ばれるしかない。
ドロイドのアームは、乳首を嬲るに留まらず、幾本もの金属腕が二の腕や腰、ヒップや太腿まで丹念に撫でさすってくる。
愛撫のつもり――の訳はない。
機械はデータ収集と言う目的のために、ツカサの肉体のあらゆるデータをとっているだけだ。そこにはツカサを辱めようとか、身体を汚してやろうといった悪意はない。
ないに決まっている……のに。
（くっ……なによこいつ、アームの力加減が強すぎず弱すぎず……あっ、そ、そんなところまで）
銀色のアームが二本、下肢の付け根にそってゆっくりと何度もなぞっていく。先端は丸みを帯びているので少女の肌が傷つくことはないが、乙女の大事な部分に非常に近いきわどい部分を、何度も触られるのは抵抗がある。
本当は股を閉じたいのに、両足首をしっかり掴んだ太いアームがモーター音を響かせると、無理矢理に大股開きをさせられてしまうのだ。
「あっ、ちょっ……そ、そこは駄目っ」
ういいい……ういいいい……三本目のアームが股間部の中央にひたりと先端を当ててきたのだ。
パーフェティクス越しとはいえ、極めて薄手のコスチュームの上から、先端をねじ込むようにぐいぐいと押し込んでくる。
アームの太さはちょうど大人の指くらいで、スーツの下でクリトリス――神経の密集した部分を刺激され、ツカサは思わず「あぁっ」と甘い声を漏らしてしまった。
（やだ、私ったらなに変な声を出してるの？　あぁ……それにおっぱいの先っぽがじんじんする）
左右のニップルにはクリップ状のアームがしっかり食らいつき、回転運動によって延々と刺激が与えられ続けている。
乙女の突起はもうはっきりとわかるほど硬くしこっていて、ひりひりとした痛みは徐々にくすぐったさを伴ってくる。
と、ここで胸を責めるアームの動きに変化が生じた。肉球をなぞるような動きをしていたアームの先

端が、「ばしゃっ」と大きく開いたのだ。
数か所の関節を持ったそれは、まるで指のように広がって、ツカサの乳房をぎゅうっと掴み上げた。乙女の柔肌に金属の指が食い込んだかと思うと、両乳房を左右に押し広げた。
「きゃぁあああっ？」
びりびりびりいいっ。
信じられない光景に、ツカサは総毛立つ。
異星の超技術の結晶、究極繊維パーフェティクスでできた戦闘スーツが、薄紙のように引き裂かれたのだ。
両の乳首は完全に露出し、ボリューミーな肉球がぷるんと重たげに揺れる。まさか、機能を凍結されたパーフェティクスがこんなに脆くなるだなんて、考えもしていなかった。
と同時に、ツカサはぞっとするような可能性に顔色を失った。下肢の付け根を執拗になぞり続けるアームの先端が、徐々にコスチュームを裂き始めていたのだ。
ういいいいい……ういいいいん……まさしく機械的な動きでアームはゆっくりと、だが着実に戦闘スーツを剥ぎ取りにかかっていた。
「うそ……なんでこんな……やめて！　これ以上私に触れたら承知しないわよ!!」
少女は美しい長髪を振り乱し、これ以上の辱めを停止するように訴える。だが、マシーンは透明なパーツを左右の乳首に吸い付かせてきたのだ。
（い、痛いッ！　お、おっぱいを吸引してるの？）
必死に身をよじり、もがいても四肢を掴んだアームの力は緩みもしない。もがくほどに乳房がゆさゆさと揺れるが、それを隠すことすらできない。
搾乳装置の内部が真空となって桃色の突起を吸い上げると、「きゅんっ」と刺すような快感がツカサの背中を走り抜けた。
「ひっ……お、おっぱいなんて出るわけ」
だが、硬くしこった乙女の突起物は、むず痒く疼き始める。ツカサ本人の意志とは無関係に、若い女体は刺激に対してあまりに無防備だった。
（そんな、あ、ありえないわ！　この私が、電詠戦姫たるツカサ・ハヤミネがドロイドにおっぱいを弄られて感じるなんて！）
ドロイドのアームは乳房や股間だけでなく、むっちりと脂の乗った安産型のヒップをも弄ぶ。数本の指に分割された機械腕が左右の尻肉を掴み上げ、「もみゅ、もみゅ」とリズミカルに揉み上げている。
かと思えば、両手にまとわりついた蛇のようなアームがまるでマッサージをするかのように少女の腕をさすり、そのしなやかで繊細な動きに、知らず乙女の肌は熱を帯び始めていた。
『刺激に対する反応、上昇中……対戦姫用プログラム、次段階に移行――』
再び赤いセンサーライトがツカサの全身を舐めまわし始める。「対戦姫用プログラム」とはいったいなんなのか、これ以上なにをされるのかと少女の顔には不安の色しか浮かばない。
（私を殺す気ならとっくにできるはずなのに、このドロイドは違う目的を持って作られてるんだわ。おっぱいやお尻を触ってくるのもそのため？）
戦姫隊本部はまだ自分のピンチに気付いていないのか。ツカサの苛立ちと裏腹に、ドロイドの動きに変化が生じる。
うぉん、うぉん……がしゃん！　がしゃっ！
ボディが大きく開き、そこから新たなアームが二本、姿を現す。まるで触手のような銀色のアームが何本も生えているのが不気味だ。
ドロイドは宙に吊り下げたツカサの身体を大の字にすると、その大型アームを少女の下半身に近づけてきた。
「ひ……っ？」
触手アームがぐるりと太腿に巻きついてくると、もはや身動き一つ取れなくなる。
これではまるで――まるで、磔にされたも同然だ。その状態で股間をまさぐっていたアームの群れが、「びびぃっ」とスーツを引き裂いた。
「あぁっ！　そ、そんな……」
予想はしていたが、あっけなく股間を丸出しにされ、ツカサは羞恥に顔を赤らめる。
ドロイドには悪意も、性欲だってありはしない。プログラム通りに動く冷たい機械の塊……そんなドロイドに、「ただの物」に弄ばれ、乙女の大事な部分をさらけ出されるこの屈辱。
これならまだ、ギャングや密輸組織の連中に陵辱され、嬲りものにされる方がまだましかもしれない。少なくともギャングたちは、性欲と言うまだ理解可能なものによってツカサを辱めるだろう。
ツカサは自分の惨めな状況に目頭が熱くなるのを感じる。
『プログラム正常稼働中――衛星中継システムとの回線を開く』
冷たい機械音声に、少女はハッと辺りを見回す。ドロイドが告げたその言葉の、恐ろしい意味に気付いたのだ。
（さっきからまったく動く気配のないアームが何本かある……あのアームの先端にあるのはレンズ？　まさか……そんな、まさか……！）
レンズの付いた機械腕、そして「衛星中継システム」という言葉の意味。無敵無敗の電詠戦姫が、深甚な恐怖に蒼白になる。
『これより、全チャンネルに向けて同時中継を開始する』
「いやぁあああああ！　なに言ってるの、同時中継ってどういうこと？　撮ってるの？　私のこの

姿を撮影して、流しているの？」
ちきっ、じ――……レンズの奥で微かな機械音が響き、少女の乳房、腰、ヒップ、そして……強制的に開かされた股間の奥まで、カメラアイが鮮明に捉えようとしている。
あられもない姿をさらけ出した乙女の痴態を余すところなく撮影し、それを、全世界、全チャンネルに向けて流出させるつもりなのだ。
それも、ただ犯罪組織のドロイドに嬲られているだけではない――搾乳装置によって乳牛のように吸引される少女の乳首からは、じわりと白い液体が滲み始める。
（私が……電詠戦姫がこんな醜態を晒すだなんて、戦姫隊の、いいえ地球統一政府の治安維持能力すら問われかねない。もしかして、このドロイドの開発目的はそれ……!?）
考えられなくはない。
若い女性だけで構成された特殊部隊、超戦闘スーツに身を包み、悪を摘発する無敵の戦姫は政府にとって強力なプロパガンダとなっている。
その戦姫が完膚なきまでに叩きのめされ、辱めを受ける姿を晒されるなんて、政府にとっては大打撃、そして犯罪者にとってはさぞ痛快なことだろう。
（けど、これはある意味チャンスだわ。こいつが私の映像を流したということは、本部もすぐに気付く。そうしたらここがどこなのか、すぐに特定できるに違いないわ）
それまで、せめて救援が来るまでもう少しだけ耐えなければならない。ツカサはきゅっと唇をかみしめ、機械腕の執拗な刺激をやり過ごそうとする。
だが、しかし――――。
「ひゃひぃっ？」
股間を延々と撫でていたアームの先端がぱしゃりと開く。そこから現れたのはクリップでもレンズでもなく、銀色に輝く鋭い針。それがクリトリスに近づいていくのを見て、うなじの毛が逆立った。
「い、いや、やめ……ッッ」
ちくり、と微かな痛みと共に、肉芽に針が突き立てられた。まさか媚薬か、それともっとおぞましい向精神薬か……と思っているうちに、少女の肉体に速やかに変化が生じた。
（か……かゆい……っ？）
じいんと痺れた感じがしたかと思った次の瞬間、乙女の敏感な肉芽を中心に、なんとも言えないむず痒さが広がっていったのだ。
少女は太腿に力を込めるが、大型アームにがっちりと捕らえられ、股が閉じられない。もちろん両手は塞がっている。その状況で股間のむず痒さは猛烈になっていった。
「くっ……んんっ、あぁぁっ！　なによこれ、なによ、いいからっ、手を放して、解放して！」
ぴく、ぴくと内腿が痙攣し、しなやかな筋肉の筋が浮き上がるが、それで痒みが軽減するわけもない。これは媚薬などより厄介だ。ツカサの顔に冷や汗の粒が浮き上がる。
（こんな、それもこれも全部、世界中のみんなに見られてる……あ、ありえないっ！）
この生中継を見ている人間にとって、ツカサが股間の痒みに悶えていることなど知る由もない。ただ半裸に剥かれた哀れな戦姫が、機械に拘束されて身悶えしているようにしか見えないだろう。
いや、事実――ツカサはとにかくなんでもいいから股間を掻き毟りたくてたまらなかった。そんな乙女の肉体の変化を、ドロイドは腹が立つほど冷静にサーチャーの光を当て、汗腺の開き具合の一つ一つまでをも観察、測定するのだ。
『刺激薬物ヒーブレル０．０３％の局所投与による反応は上々。発汗と血圧の上昇を確認。神経反応が著しく過敏になった部分の反応を観測』
ドロイドの機械音声と共に、大型アームの間からもう一本の機械腕が伸び始めた。太さは子どもの肘ほどもあろうか、丸みを帯びた先端には小さな突起物がいくつもある。
どう見ても邪悪な意図しか感じない先端部は輪切り状のパーツに分かれていて、やがてそれは互いに違いにゆっくりと回転を始める。
（あ、あれは……あれで、わ、私のアソコを刺激しようって言うの？）
まっすぐ真上に、すなわちツカサの股間めがけて徐々にせり上がってくるそれを見た少女の心に、安堵と嫌悪、そして屈辱が湧き上がる。
嫌悪と屈辱は囚われの現状に対するそのままの気持ちだが、その一方で、冷や汗をかくほどむず痒くてたまらない股間を擦ってもらえると思うと、アームが己の股ぐらに到達するのは待ち遠しい。
そして――そう思ってしまう自分が惨めで、情けなかった。
『脈拍さらに上昇、神経密集部へのアプローチを開始する』
ちきっ、じー……それはいまにも機械腕が触れようとする乙女の花びらの様子を撮影する高感度カメラ。あのレンズの向こう、全世界のモニターの向こうで、何百人、いや何万人の人間が自分が機械に陵辱される瞬間を見守っているのだろう。
おぞましいと同時に、アームがなかなか花弁に接触しないことに、ツカサは苛立ちを募らせる。
（ああ、近づいてくる、本当にアソコに触れちゃう、あのぐるぐる回転する先っぽが、私のアソコに押し付けられる……ッ！）
いやだ。恥ずかしい、気持ち悪い。
なのに股間の痒みはいっそう激しさを増し、早くあの回転パーツでごりごりと力いっぱい擦り立てら

高貴なる魔女
クラウゼア
淫堕の異端審問
第一話 暗黒の魔女クラウゼア
気高く美しき魔女を穢し尽くす
淫猥なる異端審問が始まる!!
小説 NOVEL 大熊狸喜（おおくまたぬき）
挿絵 ILLUSTRATION しゅんぞう

オリハルコン大陸の名を知らぬ者は、蛮族である。
世界最大の大陸オリハルコンは、四の大国と無数の小国が群生していた。
大陸東の海に面した小さな国カライルーズは現在、大陸中央に位置する軍事大国ドラケニアと、微妙な関係にある。
カライルーズは東方を海に、北方と西方をドラケニアに接しており、南方の国境を接している小国シニーナとも、歴史的な対立により友好的とは言えない。
大陸周辺に点在する様々な島国にも、良好な関係は結べていなかった。
元々からが小国であり、土地も痩せていて作物に乏しい。
かつては豊かだった海も、近年ドラケニア海軍の台頭により汚染と乱獲が進み、稚魚ですら殆ど壊滅状態である。
更にここ数年、悪天候による農作物の不作等が続き、国家経済は困窮の一途を辿っていた。
同盟関係にあるドラケニアが、大陸の覇権を掛けて周辺小国の統合に乗り出したのも、カライルーズに追い打ちを掛けている。
国境付近に展開するドラケニアの軍隊が、同盟保護を理由に越境行為を続けていて、しかし財政的な支援を受けているカライルーズは、それを正面から批難するに乏しい。
そんな国境の森で、今日も戦の火が上がっていた。
「第一中隊、前へっ――あああっ！」
カライルーズの第一中隊が、濃緑色のマントに身を包んだ武闘集団を攻撃。
少人数の部隊を包囲して叩く筈が、囮を見抜けず包囲されて、壊滅状態だ。
近くで戦う第二中隊は、辛くも善戦。
濃緑色の武装集団は、一気呵成に第一中隊の殲滅に掛かった。
カライルーズを侵略する、謎の武装集団。
この濃緑色の害虫こそ、山賊に身を窶したドラケニアの兵団である。
「て、撤退だっ――撤退いっ！」
貧しいカライルーズ軍は、王族などの一部を除いて、みな革鎧と鉄の武具。
対する武装集団は、末端の戦士ですら青銅の鎧で身を固めていて、手には鋼鉄の武具を構えていた。
しかも武装集団の先頭は、人間では無い魔法の使役生物、豚人間が務めている。
オークなどの怪異では無く、邪な魔法によって、豚の牡と人間の女性を後尾させて生ませた、魔法生物だ。
その姿は巨大な豚を直立させた姿で、しかし両掌は人間と同じく物が掴める。
「グフヒヒヒィ、からいるーずノぶたドモ、ミンナ、コロスヨオオォォッ！」
著しく知性が低くとも、体力と破壊力に長けた豚人間が、鋼鉄の武装を纏っている。
二メートルを超える巨体は鉄鋼鉄の鎧を纏っても鈍重では無く、鋼の斧をナイフの如く軽々と扱い、人間の与える打撃など蚊が刺したほどにも感じない。
革鎧の人間など、歯が立つ道理も無いのだ。
豚人間が楽しむ惨殺劇で、カライルーズの兵士たちが次々と命を奪われてゆく。
そんなおぞましい戦場に、闇のように暗く静かな影が降り立った。
「正義なき侵略者よ……その身に罪の重さを刻みなさい…！」
静かで涼しい声に、ドラケニア兵の人間だけが、ビクっと一瞬、身を固くする。
比して豚人間たちは、高貴さまで感じさせる美声を耳にして、股間の逸物を隆起。
「グフヒィッ、おんなノこえダアアッ！」
好色な邪眼をキョロキョロさせると、森の中の小高い岩の上に、美声の主をみとめた。
全身漆黒の闇色マントに包まれた女。頂点に向かって尖った鍔広の帽子は、魔女の証。
風に靡く極薄いマントが肢体に張り付いて、隠している筈の起伏に恵まれた女のラインを扇情的に魅せていた。
バサっ！
マントが捲れると、魔女の姿がハッキリと見て取れる。
闇色の装飾よりも美しい、烏の濡れ羽色をしたサラサラの長髪。
丸い小顔には、大きくて凛々しい、翡翠のように神秘的な瞳がキラリと輝く。
長い睫毛がシットリと揺れて、慈悲深さと裂帛の気合を含んでいる。
細い鼻筋と、小さくて朱いツヤツヤの唇。
極めて美しいバランスで整った美顔は、東洋的な秘めたる情熱も感じさせた。
細い首からなだらかなで細い肩。
タップリとした重さと丸みと弾力を魅せる二つの爆乳は、深い谷間をクッキリと刻み、戦場にいる男の眼差しを惹き付けて止まない。
双乳を支えるウェストは緩やかにキュっと括れ、更にムッチリと広い女腰へと繋がるカーブを描いていた。
ヒップも大きく後ろに突き出し、陽の光を受けて尻谷間へのグラデーションを、誘う様に見せ付けていた。
若さ溢れるスベスベの腿は、脂が乗ってシットリと艶めいている。
細いヒザから優しいカーブの脹ら脛、片手で掴めてしまいそうな細い足首へと繋がっていた。

漆黒の手袋とヒールブーツ、巨乳をギリギリで隠すビスチェタイプの装束は、大陸東端の絶海を更に越えた小さな島国、ヒノモトを連想させる。
闇の衣装に包まれる美体は透き通る様に白く、小さな傷も染みも、産毛すら見当たらなかった。
深い闇に身を包む、暗黒の魔女。
侵略者の人間たちが、初見の魔女の正体を悟り、震える。
「ク、クラウゼア！」
「暗黒の、クラウゼアか…っ！」
大陸の人間であれば、知らぬ者無し。
カライルーズの森を護る、闇の魔女クラウゼア。
戦場でその姿を見た者はいない。なぜなら皆、殲滅されているからだ。
魔女の出現に、カライルーズの兵士たちは歓喜して、侵略者たちは戦き動揺。
「ひっ、怯むなっ！　魔女を討ちてドラケニアの勇名を大陸に轟かすのだっ！」
「グフヒヒィッ、オンナやルウウッ！」
恐怖で浮き足だった数十人の侵略者たちと、性欲溢れる豚人間たちが、たった一人の女を目がけて、一斉に暴力を向けた。
女は右掌に携えた身の丈ほどもある杖を天上に捧げると、静かな声で詠唱を始める。
晒された白い腋の下が、陽光を艶々に跳ね返していた。
「戦を呼び込む愚かなる者たちよ。涙を貪る邪なる者たちよ。欲望に流される血を呑まされた大地の怒りと悲しみを、大いなる炎を以て、仕返さん…っ！　エン・トルーシ・ド・マルン・テンジ・オ――――ンっ！」
唱えると同時に、魔女の瞳が真っ赤に輝く。
次の瞬間、クラウゼアを中心に二百メートルの大地が円状に発光。
「な、何だっ⁉」
ドラケニアの兵士たちを呑み込むマジックサークルが眩く輝くと、一瞬で百メートルもの火柱が上がった。
――ッドゴ――――――――――ンっ‼
「ぎゃあぁっ――」
「グフヒィっ――」
マグマに匹敵する火柱が、一瞬の悲鳴と共に侵略者たちを包んで、消滅させる。
数秒もの魔法の噴火はしかし、森の木々たちには何のダメージも与えていなかった。
あまりにも呆気ない勝利に、助けられたカライルーズの兵士が一瞬遅れて、賞賛と賛美の歓声を上げる。
「た、助かったぞ！」
「クラウゼア様～っ！」
命を存えた第一中隊の兵士たちが、暗黒の魔女を尊敬と畏怖で見上げる。
そんな戦場に、敵を撤退させた第二中隊が駆けつけた。僅かな負傷兵だけで済んだ中隊長、ヤンは、複雑な表情を見せる。
「オレたちはまた、魔女に助けられたのか…我らはカライルーズの男っ、カライルーズの騎士なるぞ…それなのに…っ！」
剣士として、そしてリーダーとしての才に恵まれた男ヤン。
しかし、不幸なほどの強面と強烈な体臭は、町の娼婦たちですら嫌悪する。
剣士隊長としての信頼は絶大。
とはいえ命あっても、騎士としての誇りを傷付けられてしまったのも事実である。
ヤンが岩上を見上げたその瞬間には、魔女の姿は消えていた。
数十人の敵兵士の命を奪った魔女は、森の奥、木々に溶け込むように佇む小屋の裏庭にいた。
花を摘み、小さな墓石に備えて、哀悼を捧げる。
「戦を起こさなければ、穏やかに生きられた命でありますものを…」
敵兵士とはいえ、奪った命。
暗黒の魔女は、この墓の下で眠る数え切れない命たちに向かって、悲しみと慰めを、もう何年も捧げていた。
温かい木漏れ日が、輝く湖が、優しい風が、華の香りが、うら若き乙女の心を慰めてくれる。
「……私も、身に付いてしまった戦の匂いを落としましょう」
そして大好物な甘いクッキーでも焼こう。
気持ちを切り替えた魔女は、闇の衣を脱いで丁寧に畳むと、一糸纏わぬ肢体を森の空気に晒す。
清浄な湖に裸身を浸けて、戦いの匂いを浄化洗浄。
サラサラの黒髪が、清潔な水を含んでキラりと艶めく。
大きな丸い乳房が、清水を弾く。
白い乳肌の先端では、小さな乳首がツンと上を向いて朱く色付いていた。
弾けた水が、括れたウェストの曲線をなぞって、広いヒップをツルんと流れる。
丸い巨尻の谷間と、フックラと柔らかいツルツルの恥丘、未だ異性を知らない清楚な割れ目が、小さく波打つ湖面に見え隠れしていた。
「あぁ…サッパリしました」
湖から上がると、艶々の白い裸身を衣服で隠しながら、小屋の中へ。
濡れた肢体をタオルで拭っていると、フとテーブルの書簡に目が留まった。
「今日のうちに、お断りの返答をしませんと…」
昨日、カライルーズ城の使者から届けられた手紙

著者近況　二次元ドリームマガジン読者の皆様、お久しぶりです。美しき魔女クラウゼアへの激しい責め苦、どうか楽しんで戴けますように！

である。
内容は、読まずとも解っている。
今まで何度も届けられて、何度も使者に断っている、求愛の手紙だ。
差出人は、カライルーズの元王子。若き現国王のグルークだ。
一年ほど前に前国王のニューフオウが病死して、グルークが新国王となった、カライルーズ王国。
何でも王子の頃、町で一度だけクラウゼアを見た時から、グルークはクラウゼアに夢中だと言う。
しかしクラウゼアには、全く気が無かった。
背が高くてなかなか美形な王子である事は知っている。女性との様々な噂も、王族であれば当然だろう。
しかし全身から溢れる放蕩の気配や、クラウゼアを遊び相手の一人程度でしか見ていないと、自覚すら出来ていないその無神経さは、どうしたって受け入れられない。
それに、クラウゼアにはどうしても、グルークが「運命の殿方」には感じられないのだ。
魔女には、二種類いる。
大地や大気の精霊から力を得て魔力とするシャーマン系の魔女と、クラウゼアの様に自らの気を魔力とするソーサラー系の魔女。
シャーマン系の魔女は、森羅万象との交わりが力になるからか、異性との交わりに制限は無い。
しかしソーサラー系の魔女は自らの気を力とする為、異性と交わると、一時的とはいえ魔力を失う。
更に子を身籠もると、出産まで完全に魔法が使えなくなってしまうのだ。
だからこそ、ソーサラー系は身を捧げる相手を選び、運命の男性を感じ取る本能が発達したのだ。
そしてグルーク王子は、クラウゼアの運命には全く響いていない。

「とにかく一度、ちゃんとお断りをしましょう…」
手紙の拒否だけではどうにも伝わらないらしい。
仕方が無い。
ふう…と小さな憂鬱を吐き出すと、クラウゼアは裸身に闇の衣装を纏い、王城へと向かった。
貧しくも活気のあるカライルーズの城下町を、漆黒の魔女が静かに歩く。
ここ数年と続いている漁や不作で、みんな生活は苦しい。
しかしそんな不満をぶつける場所も無く、みな我慢に我慢を重ね、努めて明るく振る舞ってもいるのだ。
昼過ぎて、そんな町でも、ややノンビリとした空気に包まれている。
「お、おい…あれって……」
「ああ…は初めて、見た……」
「なにか、とても神秘的だわ…」
闇のマントに身を包んだ、眉目麗しい黒髪の淑女。
町の男性たちは、みな足を止めて視線を奪われ、女性たちは東洋的な秘めた輝きに惹き付けられる。
全身をマントに包みながらも、風に揺れると薄生地が肢体に張り付いて、見事な起伏を露わにしていた。
クラウゼアは滅多に町へは出てこないから、その姿を知る者は殆どいない。
大陸を旅して歩く吟遊詩人たちは、暗黒の魔女をして「大陸至宝のオニキス」「愛と美と恐怖。全てに於いて最上の魔女」などと口々に伝え、畏怖と羨望の噂だけが広まってもいる。
更に出所は不明なれど、クラウゼアの神秘性も相まって「神秘の国、ヒノモトの王の血を引いているらしい」とまで。
一方で、下衆な男たちはまだ見ぬ魔女に対し「一晩中犯しても犯し足りない肉女」などと、自らの欲求を転化していた。
町の中心に位置する王城。造りは質素だけど、カライルーズでは最も高い建造物である。
城の外壁、正門には、国旗がひらめいていた。
正門を潜ると、広大とは言えない王家の土地の一角に、国教であるテリィボル神教の教会が、絢爛とそびえる。
貧しい国にあって、しかし王宮よりも豪華に見える教会は、現グルーク王の代になってから急速に発展したようにも感じられた。
魔女は、開けられた教会の扉から、教会の最高位である司祭、ギー司祭に会釈を捧げる。
禿げた頭部にシッカリとした面立ちのギー司祭は、穏やかな笑みでクラウゼアに祝福を返した。
「テリィボルの名において、良き日を…」
王宮の門番に現王からの親書を捧げ、通される。
長い通路は、先代王の頃よりも色鮮やかに改装されていた。
(……以前、伺った時よりも……)
現王の父ニューフオウは、国の財政を思い質素を旨としていた。
城も、派手では無いものの清潔で落ち着いた、心が安まる空間だった。
しかし今や、ギラギラした色合いと品の無い造形の「自称　高価な芸術品」で、長い廊下が埋め尽くされている。
なんと言うか、主の中身の無さをそのまま表しているかのようだ。
謁見の間に通されると、朱い絨毯の先の玉座には手紙の主であるグルーク王が、鎮座していた。
金に任せて、女遊びばかりしていると噂の若王。
噂と言うか、現に恋文を送った相手と面会しているこの瞬間も、肌の露出も露わな五人ほどの女を足

著者近刊　『星騎士少女キラジェム・ナイツ 悪夢の十三日姦』『猟辱島 スレイブハンティング』『わたしがゼッタイ妊娠するもんっ！ 幼なじみの正妻戦争』『道場破りガールズ!! 負けたら子作りいたしますっ！』『双子づくり！』ほか
好評発売中！

下に侍らしていた。
玉座に向かった左には、宰相である初老の男、ガギロギアが控えている。
前王から仕えているこの男性は、小柄で痩せてはいるが、大して眼孔はギラギラと異様に鋭い。
クラウゼアは音も無く歩を進めると、王の前にソっと跪いた。
一つ年上の魔女をみとめた王は、割と整った顔を素直に破顔させて、歓喜する。
「おお、クラウゼアよ。僕の想いに良き返答を以て応えにきたのか？」
いかにも知性の足りない物言いに、魔女は静かに瞼を伏せる。
「麗しきグルーク王様……私の様な卑しき魔女が王宮の床を穢す事など、決してあっては成りませぬ事…私はこれまで通り、先王ニューフオウ様より戴いた北の森で、グルーク王とカライルーズの民の永遠の発展の為に、守護に務めましょう……」
静かで凛とした美声が、流れる風のように耳を打つ。
王を護る衛士たちも、漆黒の魔女の美しさと美声と誠意ある言葉選びに、心を射貫かれていた。
比して、知性の乏しいグルーク王は、魔女の言葉が意味不明だったらしい。
「？　ガギロギアよ、クラウゼアは何と申したのだ？」
問われた宰相は、小柄な身をやや揺すって主に申す。
「グルーク王よ。クラウゼアは王と国民の為にその身を捧げる覚悟である。と申して降ります」
「僕の恋人の一人にしてあげるって話は？」
「クラウゼア自身は、その身に余る光栄でありまする故、王には相応しい王妃を迎えられるよう、幸せを心から願っていると」
魔女の申し上げを、宰相はギラついた眼孔を隠さないながら、それなりに気遣って伝えている様子。
しかし知性の足りない若き王は、不満タラタラな反論を、クラウゼアにぶつける。
「そんな心遣いは無用ぞ。僕の好意を断るのは許さん。お前ほどの女はそういない。僕の愛人になればあんな粗末な小屋なんかじゃなく、王宮で贅沢な暮らしをさせてやるぞ。どうだ、嬉しいだろう？」
「……」
どうすれば、女が生理的に嫌悪するこのような言葉が、これ程ナチュラルに出てくるのだろう。
言葉が通じても意思疎通が出来ないタイプだ。
今まで何度も断っているのに、全く伝わっていなかったのも、納得である。
「こうして謁見を戴いている間にも、ドラケニアが攻めてこないとも限りません。私は前王より拝領された森にて、王と民の幸せの為に時を送りましょう…それでは……」
静かに頭を垂れると、漆黒の魔女は謁見の間から退室をする。
「ク、クラウゼア？　おい、待て。僕の求愛に対する良き返事はどうするのだ？　クラウゼア、何が不満なのだ？　宝石だって、いっぱいやるぞ！」
王が立ち上がると、身に縋る女たちが押しのけられて「キャっ！」と転げた。
もう何も届かない王子に向かい静かな礼を捧げ、クラウゼアは王宮を後にする。
残された王子は、ただポカンと呆気にとられた表情で立ち尽くす。
振られたと理解した途端、その怒りをガギロギアにぶつけ始めた。
「おい宰相っ、クラウゼアはつまり、僕の求愛を断ったのだろう！　の魔女め、優しくしてやれば付け上がりやがって！」
逆ギレしながらも、クラウゼアの身体を抱く妄想は忘れないグルーク王子。
「あの身体は僕のモノだ！　こうなったら何としてでも僕の愛人…いや牝奴隷にして、身分の違いを徹底的に教えてやるんだ！」
「グルーク王よ、なればこのガギロギアに、妙案が御座います」
若き王の思慮の無い言動に、宰相のガギロギアはニヤリ…と密かに笑った。
謁見から数日が過ぎた城下町では、不審な噂が囁かれていた。
「なあ、ここのところの不作…どうやら魔女の仕業らしいって…」
「なんでも、この国に住む魔女が悪魔と通じて、オレたちの命を悪魔に捧げるつまりらしいぜ…！」
「その魔女って、あの……」
特に夜の酒場は、男たちの不満が吐き出される場でもある。
口々に噂を流す者たちと、その噂に乗る男たち。
しかし町の人々の殆どは、そんなウワサ話を信じてなどいなかった。
「馬鹿馬鹿しい。クラウゼア様は先日だって、ドラケニアと戦ったウチのダンナを、助けてくれたんだよ」
「不作だって、あのバカ王子の放蕩癖への神罰じゃないのか？」
現王では無く王子と名指す事で、王への批判をうまく回避している国民たちだ。
魔女批判どころか、王政批判になりかねない事態に、噂を流した張本人のグルークが慌てふためく。
「ガギロギアっ！　国民どもは僕の悪口ばかり言ってるではないか！　このまま暴動にでも発展してしまったら、僕の生活はどうなるんだっ！　あああ、

恐ろしい…っ！」
頭を抱えて玉座で震える王。
対して宰相は、ギラついた眼球を更にギラつかせて、笑って答える。
「グルーク王よ、これで良いのです。国民たちの、クラウゼアに対するこの信頼。これこそがあの魔女めを王の前に跪かせる、最上の一手に御座います」
「ほ、本当か？　何かあったらお前の責任だぞ。僕は無関係だからな？」
「御意……ククク…」
情けない言葉に何の恥も感じない王に、宰相は深く頭を垂れた。

その頃、夜の城下町で不審な事件が起こり始めた。
「ウ～イ……ったく、もっと賃金寄越せってんだァ…ヒック」
今宵も、安い葡萄酒で憂さを晴らした男たちが、路上で転げたり座り込んだりしている。
そして人もまばらな裏路地で、今夜も事件が起こった。
「ふえぇ……やべぇな。早く帰んねーと、カーチャンがウルセーや」
「ウチもだ、へへへっ」
しこたま飲んだ男たちが、暗い路地をフラフラと家路に向かう。太った中年の愚痴に、痩せた中年がヘラヘラと同意していた。
そんな二人の前に、漆黒の影が静かに音も無く舞い降りる。全身を闇色のマントに包み、頭には三角の鍔尋な帽子を乗せている。
その姿は、魔女。
「んん……なんだぁ？」
「どした、おい…んん？」
酔った二人の前で、女がフワっとマントを開く。
隠されていた女体に、男たちは酔った目を釘付けにされた。
白い肌が月光を浴びて、誘う様に艶めく。
マスクで隠された素顔は解らないものの、真っ赤な唇が鮮血のように、ヌラりと微笑んでいた。
抱くと折れそうな細い肢体に、豊かなバスト。
引き締まったウェストから豊かに広がる女腰が、牡の性欲求を誘って煽る。
ムッチリとした白い腿と、細い足首。
起伏に恵まれた女体は、黒皮のビキニだけで護られている。
押し込められた双乳が、ビキニを食い込ませてムニっと丸く盛り上がる。
ハイレグショーツは腰紐が極細で、更に背後は丸いヒップが完全に露出していた。
両の手足は付け根付近まで黒く艶めく革装飾で、全身は微細な宝飾類で、煌びやかに飾られている。
ウェーブの掛かった黒髪が、優しい夜風に揺れて官能的な芳香を漂わせていた。
「ウフフフフ……」
女が微笑むと、酔った男たちは光に寄せられる羽虫のように、マスクの美貌と胸の深い谷間に吸い寄せられる。
「およよ。オネーチャン、もしかしてお客探してんの？　ヒック」
痩せた男はどうやら、魔女の恰好をしたコールガールだと思ったらしい。
「ふえぇ…い～い身体だねぇ。うっへへへ」
ニヤける男たちを引き寄せた魔女は、子供っぽく微笑むと、桃の花を取り出し、二人の顔に向かってその甘い香りを優しく吹きつけた。
「クスクス……フウゥ…」
マスク美女の挑発吐息を、男たちは我先にと鼻腔に吸い込む。
「はふはふ……ふえぇ…」
「くんくんくんっ……およよっ！」
魔法の桃の香りを嗅がされた二人は、中からズボンを突き破りそうな勢いで股間が隆起。
更に意識も強く興奮して、一刻も早く女を抱きたい暴走寸前の状態になっていた。
「ふえぇっ！　こんなガチガチ、久しぶりだっ！」
「おオレもだあぁっ、早く帰ってカーチャン抱くかっ！」
「クスクス」
家族を大切にする中年男たちの前で、うら若きマスクの美女がビキニのカップを更にグっと寄せて、谷間の柔らかさを見せ付ける。
「ふえぇっ！」
「こ、こんなプニプニっ、久しぶりに見たぞっ！」
桃の香りと谷間の効果で、男たちの目が真っ赤に輝く。
まるで、女の唇のようなヌラっとした血の色。
「オジサン、イイヨ…クスクス」
まるで、牡の欲求を知らない無垢な少女が清楚なその身を委ねるような、抗いがたい誘惑。
血の色の唇から発せられた誘いの文句に、血の色の瞳の男たちは、急速に理性を奪われてゆく。
「ふっ、ふえええっ！」
「お、オネーチャアアアンっ！」
月明かりから隠れる路地裏で、ビキニの魔女が男たちに襲い掛かられた。
太った中年に正面から抱き付かれて、脂ぎった顔を谷間に埋められてフガフガと嗅がれる。
背後に抱き付く痩せた男は、マントを捲って細い背中を嗅ぎ周りながら、紐ショーツでは絶対に隠れない巨尻を撫で廻して、柔らかさと暖かさを堪能。
「ウフフフ…オジサンタチ、カワイイ♥」
中年男たちに挟まれながら、マスクの美女はまるで母のように優しい笑顔で、禿かかった頭を優しく

撫でた。
太った男がビキニのカップを引き下げて、豊かなバストを露出させる。
白くて丸くて柔らかくて温かい乳肌が溢れてると、夜風に晒された先端の桃色媚突が、キュ…と硬化して朱みを増す。
「ふえええっ、おっぱいいいっ！　なんて白くて大きいんだあっ！」
タプンと弾む柔らか双乳を食い入るように見つめると、両掌で掴んで揉みあげて、ツンと硬化する乳首にムシャブリ付く。
「アアン……オジサン、エッチィ…♥」
長年連れ添った奥さんで経験値は十分だからか、男の吸い付きと舌使いは、美女の官能をゾクゾクと甘く刺激しているらしい。
ヒップを撫でる痩せた男も、濡れた舌で細い背筋を舐め上げながら、紐だけで隠された尻谷間を優しく指愛撫する。
「レロっ、レロロちゅっ――オネーチャン、なんてスベスベっ――ちゅぷっ――してるんだぁっ！」
滑らかな背中を舌舐めしながら、指先は紐の下の尻谷間を進軍。一際高い熱源にたどり着くと、そこはプクんと膨れた後孔だ。
「尻も温かくてっ、イヤらしいなぁっ！」
「オジサン…ァアンッ――ナデナデ、イヤン♥」
言葉で抗いながら、甘い肢体を揺する美女。
男たちの股間が更に熱を帯びてくると、美女は自ら跪いて身を沈めて、二人の股間を見上げる。
「ウフフ…オジサン、スゴイネ…♥」
突き上げられるズボンの紐を、黒皮手袋に包まれた細い指がスルっと解く。
下着までずり下げられると、いつもとは比較にならない程の硬化を示す黒い勃起が、力強く起立していた。
「ふえええっ！　こんな感覚っ！」
「およよよっ！　若ぇ頃以来だぁっ！」
二十歳の頃の勃起を示す逸物に、男たちは本能的な歓喜と、より強い興奮に包まれてゆく。
「ウフン…スゴイカオリ…♥」
性臭まで若返った男性器を、跪くマスクの美女は頬を染めて、まるで尊敬の眼差しで嬉しそうに見上げていた。
早く何とかしてくれと突き出されたペニスそれぞれに、美女の掌が添えられる。
触れるか触れないかの優しいタッチに、男の腰が奥までジリっと痺れた。
「んんんっ――オ、オネーチャンっ！」
「は、早くっ――しごいてくれぇっ！」
「ウフフフ…ハ～イ♥」
優しく妖艶な笑みを見せると、手袋手淫が始められる。
――シュ、シュ、シュ…シュシュシュ、シュルシュルシュルシュルシュル……。
美女の手淫は絶妙だ。
数回の愛撫と男の反応で、男性器の性弱点を見極めて、それぞれの性感帯を連続刺激。
勃起をしごかれる中年たちは、娘ほども年下の美女に、完全に主導権を握られている。
「おおおおおおっ――こ、腰がっ――爆発しそうだっ！」
極薄い革手袋で愛撫をされて、勃起本体が強く甘く、痺れてゆく。
温かく滑らかな革でペニスを愛撫されると、湿りとは違うヌメりの張り付き感で、ジワっと痺れる。
ペニスの肌から中心に向かって焦らされて、本体の芯から腰の奥へと、射精への力が強く貯められてゆく。
「はあっ、はああっ――オネーチャンっ、上手すぎだあぁっ！」
愛撫され続ける勃起は熱を上げて、更にグンっと堅さを増す。
腰の奥が、強い圧迫感で膨張する感覚に満たされて、もう射精をしないと収まらないと、自分でも解る。
無意識に美女の黒髪に手を添えて、肉に突き込みたいと、肉の欲求を伝えていた。
男たちの身体がグっと力み、放出の欲求で強く瞼を閉じる。
「ふえええっ――オネーチャン…っ！」
母に縋る子供の様に忍耐する、中年二人。
そんな姿に、美女はご褒美を捧げた。
「ウフフフ…ダシテ、イイヨ…ペロリ♥」
限界まで堅くなった勃起の裏側、亀頭部分の根元が、濡れた舌でツンと舐め上げられる。
素早い急所への舌刺激で、男たちは同時に、腰の力を爆発させられた。
「ふえええっ！」
「およよよっ！」
――どドビゅウウウウウウウウウウウっ！
二人の勃起からマスク美女に向かって、熱い白濁が一斉に放出される。
水鉄砲のような勢いの精液が、魔女の黒髪やマスク、細い鼻筋や真っ赤な唇を溢れて穢す。
「アアン…クサクテ、ステキィ…♥」
名前すら知らない中年二人の汚濁をマスクの顔面に浴びながら、美女はウットリと官能の笑みを浮かべている。
前髪から頬に垂れる精液が、細い顎から豊かな剥き出し乳房へと、ヌットリと垂れ伸びる。
欲求を吐き出した男たちは、かつて無い程の満足感と放出感で満たされていた。
「ふえええ……こんなの、初めてだぁ」

「オレもだぁ……およよよっ？」
「クスクス……」
タップリと放出したにも拘わらず、美女が無垢に微笑むと、勃起は再びガッチガチに硬化した。
「みっ、見ろ見ろっ！　オレのこの姿っ！」
「おお俺だってっ！　おオネーチャンンっ！」
再び強い肉欲に支配された男たちが、黒皮ビキニの美女の女体に手を伸ばす。
一度射精をしたからか、今度は手淫では済まない勢いだ。
「ウフフフ…ワタシノカラダ…イイヨ♥」
男の欲求を美女が受け入れると、中年たちはだらしない笑顔で歓喜する。
「じゃ、じゃあまずは俺からなっ！」
太った男がのし掛かろうとすると、美女は優しく制止して仰向けに転がした。
天上を指す肉棒を艶の視線で見つめると、美女は自ら男に跨がって、紐ビキニのショーツをずらす。
「ふえええっ、なんてエロいマンコだっ！」
美女の肉溝は、まるで淫欲なバラの様に朱く、美しく艶めいて咲き誇っていた。
女を知らない男子だったら、見ただけで理性を失って強姦に走ってしまいそうな程、朱く色付いて蜜の艶を魅せている。
経験豊富な中年男性だったら、見ただけで柔らかさと締め付けを確信できるだろう。
男の視線を受けながら、マスクの美女がゆっくりと、大きなヒップを下ろしてくる。
ツンと先端が触れたら、姫処の柔らかい感触と濡れた蜜が、勃起の奥までジンと痺れを走らせた。
「ウフフフ……ァアン♥」
——づぷっ！
一気に奥まで迎えられると、襞々の濡れた膣壁が強く抱き締めてくる。
「ふえええええええっ——なんてっ、熱くてキツくて柔らかいんだあぁっ！」
全体でヌュルっと締め付けて、細かい襞で肌の休所を責め立てる濡れ膣壁。
太った男の性感を淡む痩せた男は、朱い唇で、焦らされる勃起を喉奥にまで含まれた。
「んんん……んちゅ、んくん…♥」
「およよよっ——オネーチャンの口っ——なんて、吸い付きいぃっ！」
シットリと艶めく唇で、ペニスの根元をキュっと締められる。熱い口腔内では、タップリの唾液でヌルヌルに濡らされていた。
強い吸引で、腰の奥が暴発させられそうな、強い焦燥感。
肌全体はサラサラの熱い舌で満遍なく舐められて包まれて、カリ部分の裏側などの弱点を舐め攻められた。
「おっ、オネーチャンンっ！」
「は、早くっ——動いてくれぇっ！」
二人の男性は、もう早く射精がしたくて、全身が力んで硬化する。
「ウフフ……カワイイ、オジサン…♥」
漆黒の美女が巨尻の上下を開始すると同時に、唇愛撫の抽送も開始。
——ぢュぷヅぷちュ、ヅぷチゅるチゅプづプっ、ちゅッぺろツちュっんプんクんプっ！
襞の膣壁が勃起を締め付け、熱い口内が男性器を舐め転がす。
上下の媚口は肉の角を根元まで含み、全てを吐き出させようと、性弱点の箇所を集中愛撫。
「く、口もっ——強く吸われてっ——凄く気持ち良いぃっ！」
「マンコ最高だぁっ——もっともっと動いて、出させてくれぇっ！」
魔女の肉の虜となった中年たちが、射精欲求に押しつぶされて、哀願をする。
男たちを受け入れる美女の女体は、上下動に合わせて肢体がくねる。
仰向け男の突き上げるままに巨尻がバウンドし、丸い艶肌に恥汗が滑る。
細い背中はクンっと反れて、男の力を優しく逃がす。
黒髪の頭を掴まれて前後させられながらも、吸引の力は全く弱まらない。
痩せた男のするがままの口淫なのに、濡れた舌はあくまで抽送に合わせて、勃起の弱点を舐め愛撫し続けていた。
豊かな双乳は、男たちの突き込みのままに上下して、柔らかさと大きさを見せ付けている。
先端の媚突も更に朱みと硬化を増して、男たちの欲求を視覚からも増幅させてゆく。
下から突き上げる太った男が、射精までの限界を口にする。
「はぁっ、はあぁっ——早くっ——はあぁっ——出したいいぃっ——はあぁっ！」
その目はしかし、虚ろ。
「おオレもっ——はあぁっ、はあぁっ——呑んでっ——くれへっ——はぁぁっ、はあぁっ——っ！」
唇奉仕を受ける痩せた男も、息の切れ方が異様な限界を迎えている。
まるで、精と一緒に生命力まで言われているかのように。
「ンンン……オジサン、マダマダ、イッパイダシテ…ウフフフ…♥」
男たちと交わりながら、美女の目が赤く輝く。
そんな乱交現場を、貧しい少年が通りかかった。
「早く帰って妹たちの晩ご飯を……あわわっ！」
男女の交わりを初めて直に見てしまった少年は、

ピチャン…

この辺今まで
だーれも分布調査
入ってないんだよねぇ…
へんなの

フィールドワークで
ふしぎ発見!

パシャ

パシャ

ここにはどんな
頭足類ちゃんが
いるのかな~…

キラリ

あっ!

あれ? な~に大事に
持ってるの~?

その宝珠を取れ
我が僕よ

六つの星を揃え
地球の真の支配者を
長き死の眠りより

ピチャ

君がピンクの
サンジュエルに
選ばれし者か

覚醒めさせるのだ

ちょっと来て…
もらえるかな?

本誌VOL.70で掲載した本作、
戦隊ヒロイン好きの
皆様からお声をいただき
連載シリーズスタートです！
深淵戦隊
クトゥルージャ
暗澹たる怪イカとの姦淫！
戦隊もののこだわりっぷり負けません！
漫画 COMIC
からすま弐式

ここはアビスベース
世界の平和のための
研究施設だ

コポ…

コポポ…

サンジュエルの
反応が出るのを
心待ちにしていたよ

櫻庭ミコトくん…君には
深淵戦隊クトゥルンジャー
となって

世界を
守って欲しい！

はえ!!?

地球の
旧支配者たちの
復活を企む
邪悪な存在…

そいつらの脅威から
人類を守る戦隊が
各地に組織されている

え？

はい？

その二つが俺たち！
クトゥルンジャーなんだ！

ご…この人
何言っちゃってんの…!?
戦隊…ってテレビで
やってたやつでしょ？

あっあれかな…
ご町内見回り隊
的なやつかな？

これが君の
隊員ジャケットと
変身ブレスだ！

や…わ
私……

私学生ですから
…そーいう活動する
時間ないんで

あっ

…すみません

ハウイーヌ

わっっ

むぶっっ
ぼいんっ
ったた…！
んぐ…
今避け…
もごぉぉご…
ちょっ
喋らな…！
ぐぐっ
んあっ♥
ハカセ！
基地には入るなって
言ってるだろう！
だって五人目の戦士が
ついに見つかったって
言うんだもん！
そしたら女子だなんて…
大丈夫なの焔侍？
ないきなり
なんなの
この子――!?

大丈夫だよ
私カンケーないからっ

ザイザイーッ

緊急事態
C6-SWにて
何者かが街を
破壊している模様

!! 奴ら…
ついに街にまで
現れたか！

みんな！
行くぞ！

えっ…？
破…壊って……？

さぁ一緒に叫ぶんだ！テケリ・リチェンジ!!

えっ!?

テケリリ チェンジ

ひっ

アっアメーバ!?

何!?

ヌリュルルルル

やっ

あ

まとわりついて…っ

きゃるんっ☆

!?

深淵戦隊！

クトゥルンジャー!!!

え!?

ええぇえ!?

ドオオオン

なッ…
何なのコレぇっ!?

こんな全身タイツ
みたいなの…

見えちゃって…っ!!

サンジュエル…
そしてその守り人まで
五つもクトゥルプスの下に
揃ってしまっていたとは…

我は金の風を纏うもの
ハスタード！

我が完全顕現の為
その宝珠…頂くぞ

!?

あ…あいつだけ
格が違う…！

行け！
ビャーク共!!

ギキキィイイ!!

えっえっえっ
ちょっ待っ

ムラマサレディ
屈辱のマシンクラベンス
小説/NOVEL 新居佑(あらいゆう)
挿絵/ILLUSTRATION NO.ゴメス
悪しきアヴェンジャーの機械淫獄に
美しきスーパーヒロインが堕ちる！

数十年前、突如世界中で、人類の限界を超えた超常的な能力に目覚める人々が続出した。

彼、彼女たちは『覚醒者』と呼ばれ、ホモサピエンスの進化した姿だと敬われ、あるいは神として崇められた。

人類のさらなる可能性を示した覚醒者だが、中にはその能力を使い、悪逆非道のかぎりを尽くす輩もいた。

なすすべをもたない普通の人々は、非情な覚醒者――『ヴィラン』に恐怖することしかできなかった。

だが、超常の力をふるう悪の覚醒者たちに立ち向かう者もいる。

それこそが圧倒的な能力で人々に希望と勇気を与え、ヴィランを打ち倒す者――『スーパーヒーロー』『スーパーヒロイン』と呼ばれる人類の守護者は、今日も平和のために、その熱い正義の拳を固く握りしめている。

東京からほど近い、太平洋に浮かぶ人工島――そこに設けられた五百万規模の大都市は、シティ・ヨドトミと呼ばれていた。

世界的な金融危機を受け、国家戦略経済特区として開かれたそこは、〝ノーマル〟な人類とともに、『覚醒者』が多く暮らし、彼らがもたらす超能力や魔法、オーバーテクノロジーの研究が基幹産業となっている。

時は平日の昼下がり。本土との巨大な連絡橋近辺に設けられたオフィス街は、普段ならランチタイムを楽しむ会社員たちの姿で賑わっているはずだった。

しかし今は、一人の狂人ヴィランによって、恐怖と混乱の只中にあった。

「きゃぁあっっ！　どうなってるのっ!?　車が勝手にっっ！」

「またヴィランどもの仕業だっ！　とにかく逃げろっっ!!」

人々でごったがえすオフィス街を、無人の……あるいは座席に乗った運転手の命令を無視した何台もの車が、暴走しながら道行く人々を追いかけまわしている。阿鼻叫喚の中、人々が逃げ惑う様子は、まるで猛獣の群れの中に放り込まれた、憐れな子羊たちだ。

「ふ、くくっ。最新の自動運転システムも、この私にかかればでかいラジコンカーだ。そぉれ、もっと早く逃げろっ。頭をはね飛ばし、内臓をつぶされ、グチャグチャのミンチになってもいいのか、ただの人間がぁっ！」

その陰惨な光景を、稀代のマッドサイエンティスト、ドクトル・ゴルトは、百二十階建てビルの屋上から、愉しそうに見下ろしていた。

彼は非人道的な実験を好むことから、学界を追放された有能な科学者だった。自らの実験の失敗により、致死量の高電圧をその身に受けたことで覚醒し、超頭脳をもつ特A級のヴィランとして、人々に恐れられている。しかし――。

「輝け、フォトンソードっっ！　駆けろ、残影っ！　ふっ、はぁああっっ！」

ザシュッッッ！　ジュバァアアッッ!!　ザヴザヴゥウウッッ!!

瞬間、眩い閃光が街中できらめいたかと思うと、光で形作られた一本の剣を握った麗しき美少女が現れる。

その美しい姿は、一瞬にして何人もの分身に分かれ、瞬き数回の間に、何十台もの暴走車のタイヤを高熱で溶断し、沈黙させてしまう。

「……っっ！　見つけたぞ、ドクトル・ゴルト！」

そう叫んだ美少女は、まるでマンガや映画の中のニンジャのように、高層ビルの窓を、垂直に駆け上ると、颯爽と男の前に現れ、握った光る刃を男の喉元に突きつける。

「あ、あれは……っ！」

「ええ、まちがないわっ！　シティ・ヨドトミの誇り高き女神――」

「ムラマサレディ！　くく、やはり現れたな。待っていたぞ、お前に復讐できる、この日をなぁっっ！」

ゴルトは不敵に笑いながら、目の前に立つ美麗のスーパーヒロインに告げた。

「まさかヴィラン専用の監獄から脱獄するとは。だがこの私、ムラマサレディがいるかぎり、ヨドトミの平和を脅かせはしないっ！」

「ほざけっ！　たかが小生意気な娘のくせに、よくもこの天才マッドサイエンティストを、あんな監獄送りにしおって！　私は十年間、ただひたすらお前に復讐することだけを考えてきたのだっ！」

ゴルトは十年前、まだ力に目覚めたばかりのレディが捕えた最初のヴィランだ。

自尊心の高い科学者は、まだうら若いスーパーヒロインに敗北したことを恨み、脱獄してまで、その復讐心を満たそうというのだろう。

「私に恨みがあるのなら、正々堂々、私一人を狙えばいいだろう！　罪もない人々を巻き込むとは言語道断っっ！　その歪んだ心……我が光の刃で、その身体ごと真っ二つにしてみせる！」

「できるものならやってもらおうか！　くらえ、テンタクルハンド！」

そう叫んだゴルトの細い身体から、無数の機械の触手が伸びて、レディを襲う。

「ふっ、相変わらず下卑た力だ。そんなもの、私には微塵も通用しないぞっ！」

ゴルトの天才的な制御能力と高度なセンサーによって対象を捕える、高速の触手攻撃。

しかし、触手がレディのむっちりした美体を掴んだと思えた瞬間、ふいにその姿が、霞がかかったようにぼやけ、完全にその場から掻き消えてしまう。

「ニンジュツ・霞隠れ、そして縮地っ！　うっとうしい触手だ。貫け、千羽投刃っっ！」

得意のニンジュツで迫る触手を欺き、いきなりゴルトのはるか頭上へと瞬間移動したレディ。そのまま密着ハイレ

グスーツに包まれた、熟れた肉感ボディをギチリと空中でひねり、いつのまにか両手の指の間に挟んでいた無数のクナイサイズのフォトンソードを、眼下の触手に向けて投げ放つ。

ジュバババッッッ！

白とオレンジの輝きを放つフォトンクナイが、ゴルトの身体から伸びる触手の群れを根元からすべて断ち切ってしまう。

「むっ、十年の間にさらに腕を上げたようだなレディ。くくく、そうだ、そうでなくては復讐のかいがない」

武器を無効化されたというのに、慌てる様子もなく、不気味な笑みを浮かべるゴルト。タッと可憐に着地したレディは、そんな男に毅然と告げる。

「私に復讐など無意味だ。正義のスーパーヒロイン・ムラマサレディの名にかけて、お前を葬り去ってやるっ！」

ヨドトミの守護女神（ヴィーナス）と敬われるレディは、これまでに何人ものヴィランたちから街の平和を守ってきた。他の追随を許さない実績と実力に裏打ちされた自信。さらに誰よりも人々を愛する気高い心が、レディに圧倒的な凄みと神々しいまでの輝きを与えている。

「そうだ、レディは俺たちの無敵のヒロインなんだっ！」

「あんたなんかに、レディは絶対負けないわっ！」

ビルの下では、人々が口々にレディに声援を送り、覚醒してから今までずっと、街の安寧のために活躍してきたスーパーヒロインを後押しする。

「ふっ、少しこそばゆいな。……さぁ、ドクトル・ゴルト、とどめを受けろっっ！」

ヴヴンッッッ！　と威圧的な音をたてる光の刃を腰だめに構え、ニンジュツ・『イアイ・ヌキ』を繰り出そうとするレディ。身体中に溢れたシノビの力を全開にして放つ必殺の一撃は、一太刀で対ヴィラン用戦車の重装甲さえも灼（や）き溶かすほど強力だ。

「フフ、正義だと⁉　ならば私の相手より先にするべきことがあるのではないか⁉」

「なにっ⁉　ま、まさか……っっ！」

男の言葉の真意を悟り、ビルの下を覗き込む。――事前に地中に埋めてあったのだろう。スプリンクラーのような機械がアスファルトの下から現れ、見るからに毒々しい紫色をした煙が、人々ごと辺りを覆い尽くそうとしている。

「くっ、毒ガスかっっ⁉　どこまでも卑劣な男だっ！　だがそれでも市民たちを守り抜くっ！　それが覚醒者となった私の使命だっ！　ニンジュツ・旋風（ツムジ）――」

フォトンソードを握ったまま、レディは自らを高速回転させ、巨大な竜巻を作ろうとする。毒ガスを集め、毒消しのニンジュツでまとめて中和させようとしたのだ。しかし……。

バリバリィィイッッ！

「ぐっ、なん……っ⁉　うあああああっっっ⁉」

レディが足を一歩踏み出そうとした瞬間、先ほどゴルトの身体から分断したはずの触手アームから、強烈な電磁波が、無防備のレディに向けて照射される。

人々を守ることに意識を集中し、かつまったく予想していなかった攻撃に、レディの美しい女体が、ビクビクッッ！　と淫靡に痙攣しながら、ガクリっとその場に崩れ落ちてしまう。

そんなレディをあざ笑うかのように、ゴルトの身体の触手が生えていた穴から、ブシュゥゥッッ！　と先ほど地上でまかれたガスが噴き出し、レディを覆っていく。

「くっ、私に毒など……うぅっ⁉　なんだこれはっ⁉　い、意識が……ぅぅぅ」

「ふふ、あの煙はフェイクだ、レディ。ただの人間にはまったくの無害。しかしスーパーヒロインであるお前には……」

視界が薄れていく中、ゴルトの声も遠くなっていく。たまらない悔しさに包まれながら、レディは、完全に意識を失ってしまった。

「はぁ、はぁ……くっ、ふぅぅぅっ」

「ここに連れてきてから、すでに十時間……ふふ、まだ正気を保っているのか？　私の特性催淫ガスをあれだけ吸えば、普通のスーパーヒロインなら、たちどころに悶絶するはずなのだが……。さすがはレディ。並外れた精神力だ」

「くっ、誰がこんなものに屈するものかっ！　待っていろ、必ずお前を倒してみせるっ！」

ドクトル・ゴルトに捕えられ、気づいたときは、シティ・ヨドトミのどこかにある、男の研究室（バイオラボ）の中だった。

学園の教室ほどはある広い部屋には、いくつもの巨大な試験管や、不気味な実験装置の数々が並んでいる。

そんなひんやりとした部屋の中にあって、レディの肉体だけは、真夏のようにネットリとした汗を全身から噴出しており、自慢のハイレグスーツからは、蒸れた女の汗の臭いが漂っている。

普段凛と澄ました吐息は妙に荒く、色気を帯びており、見目麗しい美貌は、ほんのりと朱色に染まっている。

（う、くっ、やはり動けない……っ。しかしまさかすべて罠だったとは。だが私は正義を守るスーパーヒロインだ。こんな、うぅっ……下賤な快楽などに負けるわけには……っ！）

男の言葉通り強力な催淫ガスを嗅がされた身体は、これ以上ないくらい熱く疼いていた。

しかも両手、両足は恥知らずに大きく開かれたまま、奇妙な機械によって完全に拘束されている。

得意のニンジュツも、レディを研究し尽くしたと豪語する男が用意した、特殊電波によって、上手く精神を集中できず、繰り出せない。

著者近況　機械姦特集ということで、前々からやってみたかった、アメコミ風ヒロイン陵辱です。全身スーツとかハイレグコスとか、エロくて、めっちゃ好みなジャンルです。それではみなさん、オタッシャデー！

（か、身体が熱い……っ！　頭がおかしくなりそうだ……っ。くぅ、この卑怯者めぇっ！）

レディは、女の盛りである二十五歳だ。

ヴィランたちの悪行により、両親を失い、若くして、ヨドトミに名をはせる良家の当主を引き継いだ彼女は、持ち前の高潔な正義感から、それ以来一人の交際相手もたず、正義のスーパーヒロインとして、ヴィランたちから、人々の笑顔を守り続けている。

そのため、いまだ処女のレディにとって、男が用意した非道の姦計は、これまで意識してこなかった、自分の女の部分を強く表に引き出させてくる。

「くくく、臭うぞ。発情したレディの牝の臭いが、こちら側にも臭ってくる。どんな超能力に目覚めようと、女の性からは逃れられんようだな」

機械に拘束されたレディを、分厚い壁を隔てた隣の部屋で、強化ガラス越しに、まるで実験動物のように見つめるゴルト。

複数のモニターやキーボード、そしてコントロールパネルに囲まれながら、ニヤつく様は、文字通りの狂科学者だ。

「だ、黙れっ！　この私を快楽で籠絡できるなどと思わ……な、なんだこれはっ!!」

「籠絡だと……？　くく、私の恨みがそんな安い方法で晴れるはずがないだろう」

機械に拘束されながらも、気丈に声を張るレディ。

だがそんなヒロインの強がりを、むしろ楽しむかのように、ゴルトが近くにあるコンソールパネルに手を伸ばし、なにやらパネルを操作した。

すると天井から、まるで大蛇のように太く長い機械の触手が現れる。その銀色の表面は、毒々しいピンク色をしたローションでヌルヌルとしており、先端は、まるでいきり立った肉棒を模したかのように醜悪なものだ。

そんな機械触手が、男の慣れた手つきから響くピピッという操作音とともに、レディに向けてヌルヌルと伸びてくる。

「監獄にいる間も、ひたすらお前の活躍を追いかけ、お前を牝豚に堕とすことだけを考えてきたのだ。私の発明の恐ろしさ、とくと味わうがいい、ムラマサレディ！」

ゴルトがキーボードを自慢げにタンっと叩いた瞬間、メカニカルな毒蛇触手が鎌首をもたげ、キリリとしたレディの美貌……その悩ましい唇に、グロテスクな疑似亀頭を無理やりねじ込んでくる。

「くぅ、そんな汚らわしいものを私に近づけるなっ！　ぐむっ、むぐぅっっ!!　んひっ、くぅうっっっっ!!」

きつく力を込めた桃色の唇を、強引にこじ開け、粘ついた機械の触手が、レディの唇を満たしていく。金属のため噛み切ることはできないが、どうにか触手を吐き出そうとしたその瞬間。

ドチュドチュッッ！　ブチュチュゥウウッッ！

「ふむんぅっ!!　おごっ、んんっ、おぼぅぉおおおっっっ!!」

触手の先端からドロリとした大量の液体が、すさまじい勢いで噴き出し、レディの口内はおろか喉から食道を通って、胃の中いっぱいにぶちまけられる。体内に溢れる不気味な液体によって、機械に拘束されたスーパーヒロインのグラマラスな女体が、ビクンッッ！　ビビクンッッ！　と大きく、そしてエロティックにはね上がる。

それは凶悪な痛みに震えたものではない。まだ性的に初心でありながら、肉体的には完熟の域を迎えている悩殺ボディが、明確な牝の快感に反応した姿だ。

「ふぅっ、あひぃぅぅっ……く、はぁはぁ……んはぁぁぁあっ！」

（な、なんだこの感覚はっっ!!　急に体が疼いてっ！　熱いっ！　くぅっ、ぉ、ぅぅぅっ！）

いまだ処女ではあるが、レディも性に関しては一通りの知識を備えてはいたし、一人切ない夜には、自らの手で女の疼きを発散させてもいた。

しかし、誰もが羨む妖艶ボディを襲ったのは、そんな拙い自慰が文字通りの〝ごっこ遊び〟に思えてしまうほど、強烈な牝の衝撃だった。

「汚らわしいだと？　くくく、レディ。それは先ほどの催淫煙の原液だ。そしてお前の身体を誇り高いスーパーヒロインではなく、淫らで浅ましい牝奴隷に改造する、私の最高傑作なのだよ！　そぉら、もう肉体の変化は始まっているぞ！」

「催淫薬だとっ!!　ふざけるな……こ、ぉおおおっっ！　なんだこれはっ!!　む、胸が……っ。私の胸がぁぁあっっ!!」

無様に大の字で拘束されているレディが、先ほどまでの凛とした声ではなく、野太い牝の艶っぽい音を漏らしながら、魅惑的な肢体をビクビクと震わせる。

ガラス越しにこちらを見下す男の言葉通り、丸出しにされたたわわな両胸が、ぶくんっっ！　と大きくわなないたかと思うと、まるで悪夢でも見ているかのように、さらに軽く一回り……二回り以上は膨張し、バスト百センチを超える爆乳へと変わっていく。

しかも、さらに量感を増した乳房の内側の牝脂肪が、まるで灼熱のマグマに変わったかのように、たまらなく熱く、ズキズキと淫靡な疼きを発し続けてくる。

（そ、そんな……っ!!　これがゴルトの媚薬の効果なのか!!　くっ、堪えろっ！　スーパーヒロインが快楽などを欲しては……ぁっ！）

もしこの場にレディ一人だけならば、恥ずかしさを通り越した牝欲に身を任せ、屈辱的なまでに爆乳化された自らのおっぱいを、一心不乱に揉みしだいてしまっていたかもしれない。

著者近刊　『キュアリープリンセス 正義の心を悪堕ち洗脳』『気高き妖狐は悦獄に堕つ』『エンゼルヴィーナス 失墜の天使』『守護姫 淫神復活の宴』『ダブル姫騎士 隷辱の王室』『サムライスレイブ 姫武者淫辱』　好評発売中！

正義のヒロインでありながら、そう強く思えるほどに、下衆なマッドサイエンティストが施した肉体改造媚薬の効果はすさまじいものだった。

魅惑的な紫のボディスーツに覆われた美体からは、先ほどまでとは比べ物にならない大粒の汗が噴出している。

レディの高潔な意志に関係なく、ムダ毛ひとつない両腋から、ムワリとした牝の発情臭が放散される。

「いい格好だ。そぉら、改造された肉体の浅ましさを思い知るがいいっ！」

男の言葉とともに、新たな二本のアーム触手がレディに迫る。それらの先端には、見るからにおぞましい大人の淫具――極太のディルドーが備え付けられていた。

それは成人男性の腕ほどもある巨大なもので、表面に無数のイボが生え出ている。

凶悪極まりない疑似逸物の黒々とした表面は、オイルでも塗られたようにヌメヌメとてかっており、それが先ほどの媚薬原液だということを、強制発情させられた牝の肉欲が、恥ずかしいまでに感じ取ってしまう。

（くぅっ、どこまでも下衆な男だ……っ。落ち着け。たとえニンジュツを使えなくとも、私の鍛え抜いた精神が、快楽などに屈するはずがないっ！）

いまだ口の中いっぱいに突き込まれている触手に、きつくギリッと歯を立て、精神を集中しなおす。

身体ごと沸騰しそうな強烈な快楽を抑えつけ、窓の向こうの男を睨みつける。

「せいぜいいきがるがいい。その強気な表情を、淫らな牝のアクメ面へと変えてやるぞ！」

ガラスの向こうの男が、触手のコントロールパネルを勢いよくタッチする。そこから発した邪な黒い感情を受けた二本の触手アームが、大きくM字に広げられたレディの股間へと突きつけられる。

ズチュゥゥッッ！　ズボォオオオオッッ!!

「ん、くぅぅぅっっっ！　あふぅっ……ぐぅぅぅぅっっっ！」

ディルドーの大きく広がった肉傘が、濡れそぼった淫穴に挿入された瞬間、大事にしてきた乙女の薄膜がビリリッと破れる感覚が脳まで突き抜け、レディの純な心を傷つける。

しかも同時に不浄の穴のヴァージンも、容赦なく奪われてしまう。

そして極太の疑似ペニスが、二穴の肉壁にびっしり生えそろった細かい牝粘膜を、思い切り擦りあげた瞬間、レディは男の肉体改造が、胸を爆乳化させるという、外見的なものだけではなかったことを、身を以て思い知らされる。

ズブヌプッッ！　ドチュドチュッッ！

「ふっ、ぎぃいいいっっ！　おっ、おほっっ！　んぶぅぅぅぅっっっ!!」

（なんだこの感覚はぁっ!?　ば、ばかな……。たまにするオナニーなど比べ物にならな……ふぐぅぅぅっっっ!!）

全長二十センチを超える黒塗りのディルドーいっぱいに生えそろった、細かい無数のイボイボが両穴の壁面を、ズリュズリュと抉るたびに、想像をはるかに超えた明確な〝快楽〟が、レディの膣、そして尻穴で爆発し続ける。

それまで気高い正義の執行者の凛々しさを保ってきた、レディの瞳が大きく見開かれ、眉が垂れた、しまりのない表情を見せてしまう。

思わず淫らな声が出そうになるのを、口に挿入されたままの触手の柔らかい先端をきつく食いしめて、必死に堪えしのぐ。

「ふははっっ、どうだムラマサレディ!?　お前の性感帯は、すでに常人が発狂するほどのものへと改造されているのだ。ここからじっくり見物させてもらおう。正義のスーパーヒロインのマシンアクメの瞬間をなぁっ！」

そう言ったゴルトが、さらなる触手アームをレディにプレゼントする。

先端に二つのカップが備えられたその淫具は、肉体改造薬によって、大きく膨れ上がった美爆乳の頂点にミチリと食らいつき、ウィィッッ！　という独特の作動音を発しながら、猛烈な勢いで、カップ内の陰圧を高めてくる。

しかもカップ内の小さなローラーが、親指大にまで肥大化した勃起乳首を、思い切り上下から挟み込み、まるで牛の乳を搾るかのように、レディのニップルをきつく激しく扱きあげた。

「ほごぉぅっ!?　んおおおおっっ！　おぉおっ、ふぐひぃいいいっっ！」

両腕を頭上に固定され、屈辱のM字開脚を強いられているレディの身体が、たまらずビクンッ!!　と大きくわなないた。

膣と尻穴だけでなく、新たに生まれた搾乳快楽に、美麗のくノ一ヒロインが、艶っぽい悶絶姿を披露してしまう。

（ほぉおっ、私のおっぱいが機械に絞られているぅっ!?　な、なのに気持ちイィッ！　くぅっ、覚醒者であるこの私が……き、機械ごときで、こんな……っ！）

覚醒者同士の尋常なる勝負の末に組み伏せられるならまだしも、卑劣な罠にはまり、強烈な媚薬と、無機質な機械によって犯され、あげく感じてしまうことに、たまらない屈辱感が生まれる。

だが両手両足をガチリと押さえつけている拘束具を外すことはできず、陰唇とアナル、それに爆乳化した両胸。それらを、なんの感情ももたない――それでいて確実にレディを牝へと調教していくマシン淫具たちによって、責められ続けるしかない。

「んじゅるぅっ！　んぶっ、んんっっ！　ふぐぅぅ……っ。んんっっ！」

しかも、唇に突き入れられた機械触手までもが、まるで男根をねじ込んでいるかのように、グリグリ、グチュグチュと、前後に淫靡な出し入れを始め

る。
媚薬の大量注入によって、スーパーヒロインであるがために抑えつけていた牝の本能が解き放たれ、レディ自身の唇が、ペニスを模した機械に、きつく吸い付いてしまう。
（おぶっ、んちゅぅっ！　ほぉっ、吸い付けば吸い付くほど、媚薬がどんどん溢れてくるっ！　な、なのに止められないっ⁉　機械のペニスをしゃぶるのが、気持ち……イイッッ！）
レディの穢れなき意志は、魔性の媚毒によって植え付けられた、燃え盛る情欲の炎に抵抗しようと、必死に信号を全身へと送り続けていた。
けれど、二穴をイボ付きディルドーでゴチョゴチュッ！　と刺激され、両胸とそそり立つ勃起肥大化乳首をローラーでギチギチに扱かれ続け、さらには味覚までも、激烈な性感へと改造された肉体を制御することはできない。
「おっ、おほぉっ！　じゅぶるぅっ！　んじゅんぐぅぅっ！　じゅずるるぅぅうううっ⁉」
ヴィランたちを震え上がらせる、正義のくノ一ヒロインが、どれだけきつく睨みつけ、威圧的な気を発しても、感情をもたない機械たちには、まるで意味をなさない。
レディのこれまでの実績に怯えることも、逆に捕えたことで油断することもないのだ。
グィィイッ……ギチチチッッ！　ヴヴヴヴッッ⁉
「んぐぅっ！　あふっ、ふ、ぉぉおっ……じゅずちゅぅぅっ！」
（このアーム、私の力を完全に計算に入れて設計されているっ！　こんな機械に、くぅっ……いいようにされるなんてっっ！）
冷酷なまでに淡々と確実に、誰もが羨むグラマラスな女体を、徹底的に牝の発情ボディへと快楽調教し続ける。
ゴルトの周到なスカウティングにより、レディの能力は丸裸にされ、すべて機械に打ちこんであるのだろう。
強い正義の使命を熱く滾らせ、身体にいつも以上の力を込めても、手足を拘束する冷たい銀の縛めを解くことはできない。
「せいぜいあがけ。正義の心などで、私の発明を堪えしのげるものか！」
凶悪なヴィランとの数々の激闘に勝利し、市民たちの尊敬を一身に集める紫のレオタードスーツが、全身から噴き出る汗と甘く香り立つ本気汁によって、ベトベトに滲んでいく。
肉体改造によって、さらに妖艶さを増したダイナマイトボディが、冷たいベッドに拘束されたまま、ビクンビクンッ！　と淫靡に震え、M字開脚を見せつける腰が、クンクンッッ！　と惨めな空腰を打ってしまう。
（くっ、堪えろっっ！　ゴルトの前で……あぁっ、イ、イク……ことなど絶対に……っ。ほぉおっ、ぉおっ……くふぅぅうっっ！）
垂れた眉の間に必死に力を込めながら、無情にも女の絶頂に駆けあがろうとする肉欲を、強い思いで抑え込もうとする。
一度刑務所送りにした男に見られながら、機械などに、まるで実験動物のように絶頂させられることは、レディのプライドが許さない。しかし――。
「惨めだな、ムラマサレディ。いくらお前の強靭な精神力でも、身体は正直だ。とどめをくれてやる。派手にイってみせろ、レディっっ！」
強化ガラスの向こうで、男の指がわずかに動いた瞬間、レディの唇を責めていた触手アームが外れ、同時に、二本の黒塗りディルドーを付けたマシンアームが、フルパワーのモーター音を響かせながら、スーパーヒロインの女肉を牝の頂点へと昇天させていく。
ドチュドチュッッ！　ズボォォオオッッ⁉　ヴィィイインッッッ⁉
「んぼぉおおおっっっっ⁉　そんな……っ⁉　ほひっっ、おおっっ！　コレとめ、機械を止めろぉおおっっ⁉」
銀色の硬質な拘束具にがっちりと捕えられたレディの女体が、落雷でも受けたかのように、何度もはね上がり、冷たいベッドの上で凄絶な牝のブリッジをキメる。
意志をもたない二本の触手アームは、レディの悲痛な叫びを無視して、プログラムされた――『スーパーヒロインを堕とす』という指令を忠実に実行し続ける。
（ダ、ダメだっっ！　責めが、激しすぎるっっ！　機械などに……おぉおっ！　イクイクッ、あぁぁぁぁあっっ⁉）
自身の指を使ったオナニーをはるかにしのぐ、猛烈な突き込みが、新品そのもののレディの陰唇と尻穴に、普通の女性が生涯体験することのない、激烈な牝の快感を、ロストヴァージンしたばかりの女性へ深く教え込む。
レオタードスーツの股間部は、ブシュブシュと噴き出してしまう愛汁にまみれ、パックリ開き、充血しきった陰部を、下卑た狂科学者、そして冷徹なマシンアームたちに見せつけてしまう。
「さぁ、イケっっ！　イクのだ、ムラマサレディ！　その身に決して消えない『変態』牝豚アクメを刻むがいいっっ！」
「へ、変態……だとっっ⁉　ふざけ……なんだ⁉　胸の奥が疼いて……っ。あ、ああっっ！　なにかが……。私のおっぱい、乳首が……あぉおおおおっっっっ⁉」
麗しい美貌が驚愕の声を上げると同時に、グンッッ！　と大きく仰け反り、膨張した爆乳がブルンッッ！　と激しく揺れる。
そして搾乳機内の圧力が極限まで高まり、ローラーで扱かれていた肥大乳首から、大量の牝白濁が、思い切り蛇口をひねったようなすさまじい勢いで、カップの中に噴き出されていく。
ブシッッ、ブシュオオオオッッ！　ドパアアアッッッ！

勝ち気なエース
パイロット、参上！
機械のクセに
生命体の真似事か…
フン！
雑魚どもが…
西暦26XX年
防衛軍エースのハルカに
銀河系外より突如
飛来した機械生命体の
排除任務が下った…
機械生命家畜
キカイセイメイカチク
本誌初登場！
漫画 COMIC
儚枯悠天
ハルカ

この程度なら本隊との合流を待たずともこの私だけで十分…
やるか…
ペッ
ペロッ
機械生命母体
Code NAME
ラフレシア

ヘヘッ
ビッ
バカな!!
まぁ
ドガッ
なっ!!
ししまった!!
プルンッ
あぁぁぁ
ぷぅ…
ぷぅ…

あぅ…
ここここは…
なっ！
う動けない…
コレは一体!!
ギチッ
ギチッ
ぎゅっ…
クソッ！
こんな物
吹き飛ばして…

うっ
うわぁぁぁ!!

カッ!!

ドサッ!!

ばうっ!

ぶちっ

実験体捕獲完了

ウィィィン

う…

はぁ

はぁ…

コレヨリ調査開始…

識別タグ発見
うぅ…
ぐぐっ
ぶる…
ウィィィ…
キュッ
ぐぐっ
タグノデータヘアクセス
にっ
ぬぽ
ぬぽ
ぬぽ

ややめ…
乳房ヲ調査…
いやあああ!!
ギュー
ゲゲ
パパパパ
ぱぱぱぱ
ババババ

小説 NOVEL／舞麗辞（まいれいじ）
挿絵 ILLUSTRATION／草上明（くさかみあきら）
魅惑のボディスーツを狙う機械調教トラップ！
ヒロインを脱出させられるかはあなた次第！
宇宙捜査官ルナ
SPACE POLICE LUNA
MECHANICAL DYSTOPIA
機械仕掛けの淫獄（ディストピア）
ご案内
この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～8の番号がふられていますので、シーンの小説本文末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

ACT.1

「最初に言っておくがお前たちに残された道は二つだ。一つは俺たちに従って商品になる。もしくは俺たちに歯向かって痛い目にあってから商品になる——どちらも同じ結末ならおとなしくしていた方が利口ってもんだ」

男の低い声が響いたのは薄暗い倉庫の中だった。一人乗り宇宙船の格納庫ほどのスペースにいるのは服装も人種もまちまちだが、皆若い女ばかり。そんな彼女たちをいかにも柄の悪そうな若い男たちが小型のレーザー銃を構えて取り囲んでいた。

「なんでっ…なんであたしたちこんなことに……!?」

突然の悲劇だった。惑星旅行の途中、補給のため星間コロニーに立ち寄っただけなのに。船を降りるやいきなり銃を突きつけられ狩り集められて、あとはご覧の有様だ。

「だっ、大丈夫よっ……きっとすぐ警察が助けに来てくれるわ——」

姉と思しき女性はまだ幼い妹の背中を擦りながら、自分自身に言い聞かせるみたいにそう繰り返す。気丈に男たちを睨み付ける者、恐怖に泣き出す者と女たちの反応はそれぞれだったが、死の恐怖を前に男らに抗える者は一人もいなかった。

「さぁて、まずは身体検査を——」

「お前たち、そこまでだ！」

ウィィンッ！

男が身を乗り出した瞬間、突如背後のドアが開き鋭い男の声が飛んだ。

助けが来た——女たちが期待に一斉にドアの方へと顔を向けるも。

「ボス、脅かしっこなしですぜ」

一度は身構えた若い男だったが、すぐさま相手を認めて口元に笑みを浮かべかぶりを振る。

「お前らに任せきりでこの前みたいに商品を皆キズモノにされちゃかなわんからな——ほほう、今日はこれまた大漁じゃないか」

ボスと呼ばれたスーツ姿の男は女の群れに目を細め、ヒュウと口笛を吹きながら満足げに顎髭を撫でる。

「にしても全員ここに集まってきてるのか？　工場の方はどうした？」

好色な瞳で女に銃を構える配下を一瞥し叱責を飛ばすボスだったが、

「硬いこと言いっこなしでしょ。早く唾付けとかないとイイ女から味見されちまって、ロクなのが回ってこないじゃないすか」

「そうそう。それにあっちは全工程オートメーションに切り替えてから来ましたんでご心配なく」

若い男たちはそんなものどこ吹く風とばかり、視線は狩り集められた女に向けたまま平然と言い放つ。

「ったく、最近のガキは……まあいい。わかってると思うが高値のつきそうな上玉には手を出すなよ。それ以下の女は——好きにしろ」

「さすがボス、話がわかる！」

「へへ、それじゃ改めて——」

許可を得た男たちは羊の群れに飛び込んだ狼よろしく、舌なめずりまでして好みの女を物色する。

「ひっ——!?」

値踏みされる女たちはより一層肩を窄ませ身を縮ませて身を寄せ合う。その姿はまるで逃げ込んだ穴倉で肉食獣に怯えるウサギのようだ。

だが、そんな中にあって。

「へえ、いいこと聞いちゃった♪」

恐怖に戦く女の群れから突如、あっけらかんとした声があがった。

「なっ、なんだ——？」

あまりにも場違いな明るい声に、その場の全員の視線が声の主へと集まる。そこにいたのは——。

「ここにいるのでお前たちの仲間は全部なんだ？　じゃあもうぶりっ子する必要もないわね——あー疲れたぁ」

言いながら一人大きく伸びをするのは歳の頃なら二十歳前後のブロンド髪の女だ。彼女に視線を向けた瞬間、男たちはこぞって息を呑む。

室内の明かりを反射して輝く艶やかな長いブロンド、子猫を思わせる少し生意気そうなコバルトブルーのつり目は長いまつ毛に彩られ、形よい鼻梁の下に開いた薔薇色の唇はまるでジェリービーンズのような艶やかさ。服装こそTシャツにホットパンツとラフな出で立ちながら、それがかえって彼女のプロポーションの良さを引き立てる。小顔なことに加え女性にしては上背があり腰の位置も高いため、すらりと伸びた美脚での立ち姿はモデル顔負けだ。

「こっ、こいつぁたまげた……」

「とんでもない上玉ですよボス!?」

「ああ…こりゃ久々の大当たりだ」

宝石箱の中で見つけた一際輝く大粒のダイヤを前に、男たちがにわかに色めき立つ。しかし当のダイヤモンドはといえば、

「廃棄コロニーを改造して星間コロニーに偽装、女性のソロシップだけを狙ってジャミング電波で航路をミスリードし立ち寄ったところを拉致——か。なかなか凝った手口ね……どうりでこの海域ばかりで行方不明者が増えてもシッポを捕まえられなかったわけだわ、ねえボス？」

腕を組んで周囲を見回しつつ男たちの手口を推測、ボスと呼ばれていた男に視線を向けクスリと口元を綻ばせ不遜な笑みを漏らす。

「——何者だ貴様」

浮かれていた男たちもようやく目の前の女がウサギの皮を被った女豹だと悟り一斉に銃を抜いた。瞬く間に両手の指で数えきれない数の銃口が女へと向けられるがブロンド髪の美女は口元の笑みを崩さない。

「待て、殺すんじゃないぞ」

自身も女に銃を向けつつ、ボスが慌てて部下を制する。

「わかってますよ、誰がそんな勿体ないこと」

命令に男たちはレーザー銃を構えつ

つ、もう一方の手でスタンガンを取り出し包囲の輪を縮めてゆく。
「フン、女を見る目だけは確かみたいね。けど殺しといた方が身のためよ？まあ殺せればの話だけど」
不遜極まる態度は崩さずに挑発的な台詞を紡いだその直後。
ヒュンッ!! 女はまるで立体映像だったかのように残像を残して一瞬で姿をくらました。
「どっ、どこだっ!!」
女の姿を見失い、銃を構えたままキョロキョロ辺りを見回す男たち。
「そんな大声出さなくても、すぐそばにいるわよ？」
からかうようなその声はボスの耳元で囁かれた。いつの間にか背後に回っていた女は一瞬で彼の得物を奪うと銃口をそのこめかみへと押し当てる。
「さあ、どうする？」
僅か一手でチェックメイトを決めたブロンド美女が余裕の笑みと共に上目づかいで男たちを見回すと、
「くそっ、構うな殺れっ!!」
バシュッ、バシュンッ!!
ボスを人質に取られた男たちはほんの一瞬だけ躊躇った後、再び一斉に銃を撃ち始めた。
「ひいぃっ、おっお前らっ!?」
あっさり下剋上の憂き目にあったボスの悲鳴さえ掻き消して幾重ものレーザーが一点を穿ち、焼き切れた床から黒煙がもうもうと立ち込める。
「やったかっ!?」
軽くせき込みながら煙を取り囲む男たち。だが煙が晴れた後彼らを待っていたのは女の身につけていた洋服の切れ端だけ。女はおろか彼女が人質にしたボスの亡骸もない。
「もぉ、やめてよ。一人も殺さず逮捕しないと上がうるさいんだから」
迷惑そうなその声は背後からした。少し離れた場所に移動していた女は失神したボスに手錠を掛けて転がすと、その場ですっくと立ち上がる。
いつ身につけたのか。着衣を脱ぎ捨てた女はその肢体をボディペイントと見紛うほど極薄のボディスーツに押し込んでいた。はち切れそうなほど豊満な胸元に引き締まったウエスト、対照的にむっちりと熟れた腰つき——濃紺生地に浮き立つボディラインに男どもは一瞬状況も忘れて目を釘付けにしゴクリと喉を鳴らす。
「私は宇宙連邦警察の特務捜査官、ルナ＝アルタイル。貴方たちを拉致監禁の現行犯、及び人身売買の容疑で逮捕します」
そんな男たちへ手首の腕時計型デバイスからホログラムの身分証を示し、凛とした声で言い放つ女捜査官。
「くそっ、やはり囮捜査官か——殺せ殺せぇっ!!」
バシュッ！ バシュンッッ!!
狩る側から狩られる側へと回った男どもは気を取り直し攻撃再開、やみくもにレーザー銃を撃ちまくる。
「まったく、捜査官への武力行使は重罪なのよ——高速機動、発動！」
やれやれとばかりに肩を竦めてみせた後、キッと鋭い面持ちと共に女捜査官は手首のデバイスに向かい鋭く吠える。次の瞬間ボディスーツが薄い光の膜に包まれ、輝きに包まれた彼女自身が光となってレーザー飛び交う男たちの中へと飛び込んだ。
そこからの女の動きは圧巻だった。たなびくブロンド髪が残像となって、まるで黄金の女豹が舞い踊るかのようだ。高く蹴り上げた美脚が男の銃を蹴り飛ばし、返す刀の手刀が男の首筋を打って卒倒させる。
バキッ！ バコンッ!!
痛烈な打撃音と男どもの呻きが立て続けにあがり、ほんの十秒たたないうちに女を取り囲んでいた犯罪者は一人残らず地面に転がっていた。
「これで——おしまいね」
がしゃんっ。最後の一人に手錠を掛け終えたルナは立ち上がると、囚われた女たちへと振り向いた。
「あなたたち、怪我はない？」
その表情は一転してとても美しく柔和で、とても犯罪者相手に大立ち回りを演じた捜査官とは思えない。
「はっ、はいおかげさまで……あのっ、ありがとうございます！」
「ふふっ、もう心配ないわ。ここからは私が——」
《脱走者を発見しました》
ルナの言葉を遮って、冷たい電子音声が倉庫に響き渡った。振り向けばそこには、バレーボールほどの大きさのロボットが一機、中空を浮遊していた。真ん中に開いた赤いモノアイカメラがこちらを認識して点滅を繰り返し、フワフワと上下しながら近づいてくる。
《脱走者をロックオン、これより捕獲します》
抑揚のない声でそう宣言した機械はそれまでの緩慢な動きから一転。
ビュンッ!!
獲物に飛びかかる肉食獣のような俊敏さでルナ目掛けて突撃してくる。
「くっ、巡回パトロール用のロボットか——邪魔しないでよっ！」
ガキンッ！
襲い来るロボットをすんでのところでかわしつつ、ルナは背後から踵落としを見舞う。地面へと叩きつけるように踏みつけたそれに向かい銃口を構えると——。
バシュ、バシュッ、バシュンッ!!
一発目でモノアイのガラスを砕き、二発目でカメラを破壊。ダメ押しの三発目で内部のCPUを撃ち抜く。
「すごいっ…！」
全弾寸分の狂いもない正確無比な射撃に女たちの間で歓声があがった。
「感心している場合じゃないわ。今のでメインコンピュータが異常を察知したはず。すぐに同型のロボットが大挙して押し寄せてくるわよ？」
窘めるようなルナの言葉を裏書きするように。
ウィンウィンウィンウィン!!

著者近況 本誌21号でデビューさせて頂いてから今回でちょうど十周年と相成りました。感謝感謝……しかし十年ですよ、あの頃産まれた赤ん坊ももう十歳。学年なら小四、つまりさ○らたんと同い年!! まさに食べご…いや、育ち盛りですねっ♥（手の甲で涎を拭いながら）

耳をつんざくけたたましい警報が辺り一面に反響し、再び怯えを取り戻す女たち。だが若き捜査官はあくまで冷静だった。

「この通路の向こうにさっき降ろされた宇宙船の発着場があるわ。私の船なら全員まとめて乗れるはず。私が監視用ロボットを引きつけている間にこいつらを連れて逃げるのよ」

そう言って手錠を掛けた犯罪者らを爪先でコツリと小突くルナ。

「でっ、でもルナさんは――？」

「心配ないわ。あなたたちこそ男たちが何を言っても無視、死んでも手錠は外しちゃダメよ？　通信が効くようになったら宇宙連邦警察の特務二課へこの件を連絡して」

「はっ、はいっ！」

矢継ぎ早に出された指示に一斉に頷くと、女たちはまるでビル火災から逃げ惑うように一斉に宇宙船へと雪崩を打って押し寄せてゆく。

「――さてと」

笑顔で被害者らを見送ったルナがブロンド髪を靡かせ振り返ると、その表情は一瞬で鋭い捜査官の貌にスイッチする。二体目、三体目の監視ロボットが既に飛来していたのだ。

「かっこいいこと言っちゃったけどっ、私ってばなにげにピンチじゃないのよ、っと！」

自嘲気味に吐き捨てながら、ロボットの体当たりを紙一重でよける。先ほど男たちを瞬殺した高速機動を駆使すればこんな機械などに後れを取ることはないが、自分が見失われたら今度はあの娘たちに害が及ぶ。

「とりあえず船から引き離すか――おーいポンコツぅ、こっちよ!!」

ダッ!!　宇宙船への通路を遮るように立ちはだかっていたルナはロボットを挑発するようにアピールしつつ自力でのダッシュを開始。思惑通り自分を追いかけてきたのを確認して一気に速度を上げる。

金色の髪を靡かせ走る女捜査官は自力でも並のスプリンターを凌ぐ速さで迷路のような通路を駆け抜けていった。

（かなり広いわね、ここ――単なる人身売買のアジトじゃなさそうね）

確かボスと呼ばれた男はここを〝工場〟と呼んでいた。内部ではどんなおぞましいことが行われているのかしれない。援軍が来るのを待つべきだとは思ったが、もたもたしているうちにこの場にいない仲間が舞い戻り、犯罪の証拠を隠滅しないとも限らない。ならばたとえ危険でも証拠は押さえられるときに押さえておく――それが捜査官としてのルナの経験則だった。

それからしばしロボットと一定の距離を保ちつつ、延々とだだっ広い通路を駆け巡っていたルナだったが。

「さてと、そろそろあの娘たちも船に乗り込んだ頃合いかしら」

くるりっ。突如身を翻したルナは背後から追いかけてくるロボットを見据えニヤリと笑い、おもむろに角を曲がる。追撃するロボットたちもまた数秒遅れて同じ角を曲がったが――そこに女捜査官の姿はなかった。

《目標喪失、目標喪失……探索モードに切り替えます》

しばし辺りをうろついた後、ロボットたちは逃げおおせた脱走者を探し求めて四方へと散らばった。

（うまくかわせたみたいね）

そんなロボットたちを網の隙間から見下ろしながら、闇に包まれたルナは独り静かにほくそ笑む。

彼女が潜り込んだのは天井近くに開いていた排気ダクトの中だった。普通ならサーモグラフィで感知されるところだろうが、それを免れたのはスーツの体温調節のおかげだ。

ここならあの面倒なロボットに邪魔されることなくアジトの内部を探索できる。

（にしても、やっぱ狭いわね……）

潜り込んだダクトは女であるルナでも四つん這いでどうにか通れる広さだった。匍匐前進なら訓練で慣れていたが、それでも音を立てないように進むのは一苦労。それに腰を掲げ膝と肘とで金属の地面を滑るように前進する姿は、任務とはいえ女子としてはとても人には見せられない格好だ。

ともあれ、あの手の警備用ロボットは固定式の監視カメラの代用に使われることが多い。つまりロボットにさえ見つからなければ居場所を悟られる心配もない、というわけだ。

それから延々十分以上、ダクトの中を前進し続けたルナだったが、アジトはかなり巨大なようでいくら進んでも一向に出口は見えず、あたかも同じ場所をぐるぐると回り続けているんじゃないかと錯覚させられるほどだ。それでも根気よく前進を続けているうちに、左右に枝分かれしたT字路へと突き当たった。

（さて、どっちに行こうかしら？）

迷ったルナは腕のデバイスを翳し、周囲に向けて反応を見る。右の方で高エネルギー反応。そちらにメインコンピュータがあるに違いない。

本格的に捜索するならまずはコンピュータを停止して警備などを解除するのが得策だろうが――。

…すけ…て…たすけ…て……

警報と機械の動力音に紛れて僅かに鼓膜を震わせた音にルナが足を止めた。

（これは――悲鳴!?）

一度は尻を向けかけた左側に向き直し、耳をそばだててみる。

けっ、て……助けてぇっ……!!

やはり微かにではあるが「助けて」という女性の声がした。

（この中にはまだ他に、さらわれてきた被害者がいるの――!?）

ならば、先にそちらを助けに行くべきなのだろうか？

◆中央監視室へ急ぎ右へ⬇ACT.2へ
◆やはり声が気になるので左へ向かう⬇ACT.3へ

著者近刊　『セーラーヒロイン イカせてパワーアップH！』『いもうとバイト！ エッチなお兄ちゃんを誘惑するだけの簡単なおしごとです』『ムチムチボディの隣の姉ちゃんがダイエットを始める模様です』『お隣のお姉ちゃんな女子大生は俺のいいなりです』　好評発売中！

ACT.2

（やっぱりまずはメインコンピュータを押さえるのが先決よね）

そう判断したルナはデバイスが感知したエネルギーを目印にダクトを進み続ける。一歩前に進むたび、デバイスの反応が強まるのがわかる。

（やっぱりこの先に――）

ルナがそう思ったのと闇に閉ざされたダクトの中を赤い光が差したのはほとんど同時だった。

「くっ!!」

慌てて振り返れば案の定、そこには先ほどと同型の巡回用ロボットの姿。

（やばっ、バレたっ!!）

迂闊だった。こんなところにまで警備用ロボットを配置していたとは――反重力装置を内蔵したボール型の機械はふわふわと空を漂いながら音も立てずにじり寄ってくる。

「このっ――邪魔しないでっ!!」

こうなったらもう息を潜める理由もない。撃退すべく携えていたレーザー銃を後方へ向け撃つ。

バシュウッッ！

瞬く赤光が冷えた空気を切り裂きロボットを襲うも、装甲に触れた途端火花となって四散した。

「ひぅっ!!」

反射したレーザーを浴びて小さく悲鳴を漏らす。特殊繊維のボディスーツを身につけていなかったら大怪我をしていたところだ。

（やはりピンポイントでカメラを狙わないと駄目かっ）

しかしこの窮屈なダクトの中、無理な体勢で、不規則に浮遊しながら迫る的を射抜くのは容易ではない。

それ以前に間合いが近すぎた。ここまで接近されたら今度は反射で無防備な顔をやられる恐れもある。

「このっ、来るんじゃないわよっ!!」

どうにか距離を取るべく二度三度と蹴りを見舞うも、この狭い空間では攻撃の筋はことごとく読まれロボットはいともたやすくそれをかわしてしまう。幾度かのキックが空を切り、そうしている間にもロボットはルナの突き上げたヒップに触れるまで近づいてきた。そして艶やかな美臀に接触した刹那――。

カパッ。ボールがちょうど真ん中の辺りで横に割れた。それはまるで獲物を前に大口を開くカバのようだ。

（えっ、何を――!?）

ルナの脳裏に浮かんだ疑問はすぐさま行動によって答えを与えられた。

バクンッ!!

「ひゃんっ!!」

情けない悲鳴が女捜査官の唇を割って出る。ロボットはまるで鉄製の下着みたいに、こちらの股間を拘束してきたのだ。

「なっ、なんのつもりよっ――!?」

がしっ！　腰に取り付いたロボットに両手を宛てがいどうにか引き剥がそうとするも、かっちりとはまり込んだそれはいくら力を込めてもびくともせず、頑として外れない。

（このまま重力負荷をあげて拘束するつもり――!?）

しかし機械の行動はルナの予想のはるか斜め上を行っていた。

《目標を捕獲。これより再調教に入ります》

腰に取り付いたロボットがそう宣言した次の瞬間。

ぐにゅ、ぐにゅぐにゅぅぅ……!!

「ひんっ!!　うそっ…やだぁっ!!」

想定外の場所への刺激に少女のような声が喉を駆け上る。機械の内側……股座の辺りに硬い感触が押し付けられてきたのだ。それはまるで杭のようにズンッ、ズンッ、とボディスーツの股布部分を突いてきた。

その動きはまるで――。

（ウソでしょ…この機械っ……私のこと、れっ、レイプしようとしてるのっ……!!）

まさか監視用のロボットにまでこんな卑猥なメカニズムが仕組まれているなんて。先ほどから〝脱走者〟と連呼していることからして、おそらく逃亡を図った女へ罰を与えるためのシステムなのだろうが――。

「じっ、冗談じゃないわよっ!!」

捜査官とはいえ年頃の乙女、人並みに男性経験くらいはあるがだからって機械に犯されるなんて絶対にゴメンだ。しかし銃は使えず、力ずくではとても外せそうにない。

（でっ、でもボディスーツがあるから中までは――）

捜査官に支給されるボディスーツは特殊な液体繊維製、その薄さに反して衝撃吸収力に優れ、並の弾丸ならわけもなく弾き返すほど強靭だ。

いくら機械が挿入を試みようともスーツが護ってくれるはず――しかしそんなルナの期待はすぐさま裏切られることとなる。

しゅるしゅるっ……。

「こっ、今度はなによぉっ!!」

ロボットが見せた新たな行動にルナが身を固くする。尻を咥え込んだ大口の端から、何本ものワイヤーが伸びてきたのだ。まるで生き物のようなそれは女捜査官の手首のデバイスまで届くと、液晶画面にピタリと密着し――。

ピピッ！

小さな電子音と同時に、機械に食まれた股間が冷ややかな外気に舐められた。目視はできないが感覚でわかる、股布部分を開かれたのだ。

「なっ!!」

（うそっ、ハッキングされたっ!!）

股布部分の開閉は本来速やかな排泄のための機能。ロボットはそれを悪用し秘所の守りを剥いだのだ。

ウィィィィン……機械はあざ笑うようにモーター音の唸りをあげながら再度剥き身の秘唇へと無機質な張り型を押し付ける。ぬちゅり、と濡れた肉花弁に硬いゴムのような感触がパズルのピースみたいにピタリとはまった。

「いっ、いや……」
グニッ…ずぶずぶずぶぅぅぅっ!!
「ひぃぎっ…いっ、嫌ぁぁぁっ!?」
股座から脳天までを突き抜ける衝撃に、怯えるような悲鳴が一気に絶叫へと変わる。電子頭脳の強姦魔は恐ろしく無慈悲な一撃で膣口から子宮の底まで一突きに刺し貫いたのだ。
「っ…くぅっ…よくもぉっ……!!」
腰骨を砕かれたみたいな衝撃に唇が、言葉が震える。人並みの経験があるとはいえ、前戯なしでの乱暴な挿入は身体に新たな穴を開けられたかと思うほどの痛みを伴っていた。だがそんな身体の痛み以上に。機械に囚われあまつさえ陵辱されていることへの屈辱に胸が軋み、女捜査官は闇の中で肢体を震わせ呻く。しかしそんな感傷に浸ることすら機械は許さなかった。
「んひぃっ!? やだっ、うごっ、動くなぁあっ!?」
ズッズッズッズッズッズッ!!
膣奥深くに埋め込まれたディルドーが休む間もなくピストン運動を開始したのだ。挿しては抜き、深く押し込んでは一気に引っ張り出す——偽りの男根はメトロノームのように正確な抽迭運動で窮屈な肉穴をこじ開けまだ硬さの残る膣壁を無慈悲に擦りたてて、幾重にとじた粘膜襞を無理やり引き伸ばし拡張してゆく。
「ひゃめっ、やめろぉぉっ……!!」
ガンガンと腰をダクトの壁に叩きつけどうにか責めから逃れようと試みるも、鋼鉄のショーツによる抜き差しは決して揺らぐことなく正確無比に女性の一番神聖な場所を蹂躙されてしまう。
無機質な機械に犯される屈辱——しかしそれ以上に屈辱なのは自分の肉体がそんなおぞましい陵辱に反応し始めていることだった。ぐちゅっ、ゆちゅっ、ずちゅっ、ぬちゅぅっ……ディルドーが抜き差しを繰り返すたび痛みは疼きへと変化して、機械の内側からは粘っこい水音が漏れ伝わってきた。
(うっ、嘘よっ…こんな機械相手に気持ちいいだなんてっ……!!)
戦慄と共に湧き上がる快感を否定しようとするも、逞しい張り型に子宮口をズンと叩かれると甘い快感がジンッと腰を揺さぶった。
(いっ、いいぇ落ち着きなさい私っ……こいつはそういう風に作られているんだから、感じてしまうのはしょうがないことなのよ——!!)
必死にそう自分へと言い聞かせ、恥辱から湧き上がる混乱を抑え込もうとする。だがいくら頭でそう理解しても、ただのプログラムに牝としての本能を暴かれ浅ましく乱れさせられているという屈辱は拭えない。
「くっ、負けない——こんな機械なんかの思い通りになんかならないんだからぁっ!!」
快感に震える脚を叱りつけ、愉悦を孕んだ重たい尻を持ち上げて。ルナは再び四つん這いの姿勢を取ると前進を再開する。その間もディルドーはヌポヌポといやらしい音を奏でつつ肉穴をほじくり続け、子宮口を突かれるたび腰骨を揺るがすほどの喜悦が爆ぜて尻餅をつかされてしまう。それでもルナは諦めず、ガクガクと笑う膝で何度も立ち上がり腰を掲げ直して前へ前へと進み続けた。
(とにかく早く広い場所へ——)
レーザー銃さえ使えればこんな機械、すぐにでも破壊し取り除ける——女捜査官は快感に蕩けそうな牝腰を引き摺るようにして出口を目指す。
しかしそんな獲物の反逆さえ、機械にしてみれば計算の範囲内に過ぎなかった。多少なりとも経験がある姫百合への責めだけでは不足と結論付けた電子頭脳が次に狙いを定めたのは——。
グヌッ…ぐにぐにゅずぬゅりゅぅう——!!
「ンァォッ!? ひゃだっ、そこはぁっ!?」
予想だにしない場所へ仕掛けられた突然の奇襲に思わず声が裏返る。信じられないことにロボットは陰裂のみに飽き足らず、そのすぐそばで息づく桃色の排泄孔にまでその冷血な魔手を伸ばしてきたのだ。
(おっ、お尻だなんてっ…うそでしょ、そんなところまで入ろうっていうのっ!?)
例によって目視不可能なため正確なディテールはわからない。女陰を襲うものに比べると細身のようだが、その分鋭利な先端を持っているらしく直腸へまるで削岩機のように桃穴をほじくり返しながら侵入している。
「いっ、いやぁっそんなとこっ…入っていいわけないでしょぉっ!?」
今のパートナーはもちろんこれまでの恋人にも、アナルセックスを求めるような変態なんていなかった。ゆえにルナのそこは生まれてから今まで排泄の用途以外に使われたことなどない。だというのに、このいやらしいロボットはその手付かずの場所まで侵犯しようとしているのだ。
「そんなのっ、そんなことさせてたまるもんですかぁっ!!」
どうにか体内への侵入を阻止すべく括約筋を引き締め抵抗しようとするも、
「きひぃぃんっ!?」
下腹部に力を込めると同時に膣も一緒に締め付けてしまい、肉壺に突き立てられた鉄槌を自ら食い締めてそのゴツゴツとした感触を柔膣に刻み込んでしまう。臍の下辺りにもどかしいほど甘い喜悦がジンジンと滲み、思わず下腹部の力が緩んだ。
冷酷な陵辱マシンがそんな獲物のつけ目を見逃すはずもない。
ズニィ…グニュグニュグニィィィ——…っっ!!
「ひぃぃんぐぅっ!? ひゃだっ、だっ、あっあっあぁぁぁ——!?」
まるでドリルが木板に穴を開けるように。二本目のディルドーは弛緩した排泄孔へと一気に雪崩れ込んできた。表面に油のようなものが塗布されてい

るようでその侵入は恐ろしくスムーズだ、直腸内部を異物が遡上するえもいわれぬ感覚に身体中が粟立つ。内臓が逆流してくるような気持ち悪さと脱力感に襲われて、その場に尻餅をついてしまう。

そうしている間にも機械による肛辱は激化していた。

ぐにぐにずにずに……おそらく螺旋状の形をしていると推測されるアナルディルドーはネジを巻くように旋回しながら直腸内へと潜り込み、斜めに刻まれた凹凸で桃粘膜をゴリゴリと苛烈に苛めてくる。抜き差しのたび肛門口が焼けるような熱を帯び、まるで無限に排泄を繰り返しているかのような錯覚がルナを襲った。

「やっ…だぁぁっ……こんなっ、こんなのってぇぇっ……!?」

まるで腹の中に鉛玉を仕込まれたみたいに下腹部が鈍い。だが同時にジンワリとした疼きが腸内を駆け巡り、普通のセックスでは味わったことのない快感を植え付けてきた。

ヒリヒリと焼け付くような刺激さえ恥悦となり、尾てい骨から背骨を遡上してブルリと身を震わせる。

(だっ、だめこのままじゃっ!!)

もう多少の怪我はやむを得ない。決死の覚悟でレーザー銃に手を掛ける。

「このぉっ…いい加減にしろっ!!」

バシュッ! バシュッッ!!

白銀の火花を散らして紅光が瞬き、腰に取り付いた機械を撃つ。

しかし快感に震える手では先ほどのようにはいかなかった。うまく狙いが定まらず、それたレーザーが立て続けにダクトの壁へと穴を開ける。

「くっ、当たりなさいよっ!?」

女捜査官はガクガクと震える指をトリガーに掛け、なおもカメラアイに照準を合わせようと息を殺し狙いを定めるが、いつまでも「脱走者」の反乱を許すほど機械も甘くはない。

《殺傷能力のある武器の所持を確認——鎮圧モードに切り替えます》

腰に取り付く機械から放たれた抑揚のない年齢不詳の人工音声。そして次の瞬間。

ゴゴゴガガガガガガッッッ!!

突如巨大地震がダクトを揺るがした。いや、地震ではない。振動の発信源は——他ならぬルナ自身だった。

「ひぃぃぎぃぃっっ!?」

激しい振動に視界がブレる。前後の穴を刺し貫いた無機質の牙がエンジンのように凶悪なスピードで抽迭を始めたのだ。

「あひぇっ、んひぃぃぃぎぃぃ♥」

モーター音が嵐のようなけたたましい唸り声をあげ、骨を砕かんばかりの衝撃と共に二穴がほじくり返される。一突きごとに快感が溢れ、弾ける喜悦で一瞬にして腰が砕けた。圧倒的な情報量の刺激を一時に叩き込まれ脳髄の処理が追いつかず、暴力的な突き込みに、全身の神経を桃色の電流が狂ったみたいに駆け巡る。

「ひぃぃっぃぐっ、いぐぅぅっ♥」

脳髄が沸騰したかと思うほど意識が白濁し、擦りあげられた膣粘膜の細胞全てを喜悦に震えさせながらルナは力ずくでオルガスムスを迎えさせられた。腰を揺るがす凄まじい絶頂に身体中が弛緩し、身体中の体液が淫熱に沸騰する。肉も骨も甘い蜜となって全てが体の外へと流れ出てゆくかのようだ。

「ふっ、ひっぃぃぃ……♥」

絶頂に弛緩したルナは手にした銃を取りこぼし丸腰となっていたが、それでも無慈悲なロボットは責め手を止めようとはしなかった。

ずぶずぶぬぶぬぬちゅぬちゅ!!

「ひゃだっ、いってるっ、今イってるからぁっ動いちゃだぁめぇっ!?」

ブロンド髪を掻き乱し甘酸っぱい汗の玉を四散させて。女捜査官は腰をくねらせ懇願するも、鋼鉄の拘束具は冷血に抜き差しを繰り返すばかりだ。

ぬぽっじゅぽっぐぷっ、ずちゅっ…前後の穴から交互に濡れ音が響くたび、鋭い喜悦と鈍い肛悦の連弾に否応なく絶頂へと突き上げられる。

「ひっまたっ、またイクぅ——ッ!?」

絶頂快楽に冒されてもう前に進むこともできない——完全に戦意を喪失し無抵抗となったルナだったが、それでもロボットは許してくれなかった。

「ひぃうっ、ひぃぃんぅうっ…だっめ、ゆるひへもぉやだぁぁっ!!」

情けを知らぬ電子回路は脱走者の身の安全など関知しないと言わんばかりに、むしろ愛蜜で水気を増して摩擦が弱まるのをこれ幸いとピストン運動の速度を早め、既に充血しきり柔らかく蕩けきった肉穴をぬぷぬぷと卑猥な音を立てながら犯し抜く。

「も、ゆるひ…んぉぉっ♥ まっ、またおひぃりぃぃっっ♥」

肛門を嬲る螺旋型淫具も同様で、刺激に分泌した腸液のねっとりとした滑(ぬめ)りを纏いキュルキュルと甲高い音と共に牝尻を奥の奥までほじくり返し、直腸粘膜に毒のように鈍く甘い肛悦を刻み付けてきた。腹を満たす淫具のおかげで今まで知る由もなかった自らの直腸内部の構造までが快感をもって教え込まれる。今やルナの排泄孔はすっかり第二の性器へと作り変えられていた。

「だめぇっ、こんなの…気持ちっいいっ……きもちよすぎるぅっっ……あぁぁイクっ…あそこもっ…おっ、おしりもぉおイグっイグぅぅぅっ♥♥」

ぶるっ、ぶるるぅぅっっ!!

押し寄せる二穴絶頂にプルプルと震える鋼鉄尻を掲げたルナは、バテた犬みたいに桃色の濡れ舌をだらりと垂らした惚け面を晒す。

(こんなっ、こんな気持ちよくされて逃げるなんてぇっ…無理よぉ……!!)

屈服した女捜査官の周囲には、彼女を嘲笑するようにいくつものロボットが宙を舞いながら取り囲んでいた——。

⬇ACT.8へ

ACT.3

監視ロボットをやり過ごし、ようやく狭苦しいダクトから潜り出たルナを待っていたのはドーム状の空間だった。散々窮屈なダクト内を進んでいたせいもあるだろうが、天井は空のように高く、向こう側の壁も目視できないくらいに広大だ。

散々折り曲げ続けた身体を伸ばし大きく深呼吸の一つもしたいところだが、しかし女捜査官は解放感に浸る間もなく目の前に広がる光景に絶句させられていた。

「なっ、なんなのよここ――!?」

そこは一見すると巨大な牛舎のようだった。車くらいなら通れそうな幅の広い通路がはるか向こうにまで続き、その左右には家畜が横一列に繋がれている。

ただしそこで飼われていたのはその全てが、先ほど逃がしたような若い女性だ。

そしてその誰もが、目を覆いたくなるような酷い仕打ちを受けていた。ある者は胸元にホルスタイン用の搾乳器を取り付けられて母乳を搾取され、またある者は木馬のようなものに乗せられ鞍に取り付けられた淫具で股間を責め苛まれていた。

「あああっいやっ、あっあはっ、んぁあぁぁっ♥」

「ひゅごいのぉっ、おっぱいとろけっ蕩けちゃぁあっ♥」

囚われた女は揃って喉を嗄らして喘ぎ鳴き、幾重にも重なった牝鳴きの不協和音が禍々しい淫獄から漏れる地響きのようにドーム内に反響していた。

「ひどいっ……」

身も心も、人権さえ蹂躙される女性たちを前に思わず顔を背ける。ここに来てルナもようやく先ほどの男が言っていた〝工場〟という隠語の意味を理解した。

(ここは奴隷の工場――いいえ、性奴隷の工場だったんだわ!)

捜査官として裏社会で行われている人身売買の実態は知っているつもりだ。こういった性的奴隷や強制売春はどの星でも行われている。年端もいかない子供を臓器目的で売り買いしていたシンジケートに潜入した際、組織が運営する闇病院のおぞましい手術室も目の当たりにした。

しかしやはりこういう光景は何度立ち会っても慣れない。怒りで身体中の血液が沸騰しそうだ。

「ひぃっんぅっ♥ してっ、おまんこもっとごりごりしてぇぇっ♥」

涎を垂らしながら喘ぐ女は自分と同い年くらいか。元は理知的な顔だちをしていたが、高速で回転する歯車のようなものに陰唇を抉られており、そのせいで頬は弛緩し口元からはだらしなく涎を垂れ流して絶叫を繰り返している。その乱れようは明らかに正気ではなかった。

「――薬ね、きっと」

やるせない気持ちで瞳を細め、ふつふつと湧き起こる怒りを胸の内に押し留めるように低い声で呟くルナ。

こういった調教に麻薬を併用するのは犯罪者の古くからの手だ。目の前の彼女のみならず、既に目の焦点が合わず壊れた薄ら笑いを浮かべている被害者が多い。おそらくその多くが麻薬に冒されているに違いない。

しかしそんな中にあって。

「助けっ…てぇっ……!!」

こちらに向かい必死に懇願している一人の少女がコバルトブルーの目に留まった。

そこにいたのは異性の相手をするにはまだまだ幼い、花に喩えるなら蕾のような愛らしい少女だ。だというのにその発育途中の薄い胸板にさえ淫らな吸引プラグが容赦なく吸い付いており、陰毛もろくに生えそろっていない恥丘には大人の女性でさえ容易には受け入れがたいほど極太のバイブを突き立てられていた。

調教や薬物にまだ完全に壊されてはいないのか、悲痛な叫びで助けを求める彼女の瞳は他の被害者に比べまだ輝きが失われていない。

「……っっ!!」

反射的に少女のもとへと駆け寄ろうとした女捜査官はしかし、グッとその場に踏みとどまる。無論ルナとて今すぐにでも助けてあげたいが――。

(けど、ここにいる全員を私一人じゃとても助けきれない――!)

この広大な奴隷牧場の中、目の前の少女同様に助けを待っている被害者は両手で数えきれない数いるに違いない。

今でも施設内ではひっきりなしに警報が鳴り続けていたし、いつまたあの監視ロボットが見回りにやってくるかもわからない。

この工場のメインコンピュータさえ止めてしまえば彼女たちを苛む機械も停止するはず。中央監視室はすぐこの先、ならば目の前の状況に流されず行動することこそが結果的により多くの人を救うことになる。

それこそが捜査官としての自分の使命なのではないか――?

「ひぎぃっ…たすけっ、助けてぇぇっ!!」

ルナが迷っている間にも少女の股間からはゴリュゴリュと鈍い音が響き、感電したみたいにその細い肢体をビクビクと震わせ喘ぎ鳴いている。

(でっ、でもっ…今私に助けを求めてるこの子を見捨てていくだなんてっ……そんなこと、私には――!!)

捜査官としての冷静な判断と、ルナ=アルタイルという一人の女性の心情が胸の内で激しくせめぎ合う。

「くっ……!!」

(私、どうしたらいいの――!?)

ギリッ……奥歯を軋ませ、眉間にしわを寄せて。やがてルナが出した答えは――。

◆目の前の少女を助け出す⬇ACT.4へ
◆断腸の思いで先を急ぐ ⬇ACT.5へ

!!
あれは…
カリオストロ伯爵に…
ウォリヒ男爵…
情報通り他の貴族も
獣欲の花嫁たち
ぱふえ
最新単行本『獣欲の花嫁たち』好評発売中！
エルフNinjaセンリ
～無限カラクリ責め地獄～
漫画 COMIC ぱふえ
センリよ忍務です
反クレメンツ公爵派の方々に不穏な気配があるようです
その証拠を持ってきてください
すみません危険なことばかり…
悪を倒すためであれば構いません
だが何故この時期に
先の魔王大戦で伯の財力も疲弊したままと聞いたが…
ザッ
侵入者がいるぞ！
出あえ出あえ――!!
悪党の密謀を暴く美少女ニンジャ！

ひるむな
かかれ！
追い込む
んだ!!

ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ

くっ 不覚！
水責めとはやってくれる
水…ではないのか？
ねばぬ
ここは館の…地下ね
どこかに出口は…
こっこれは!?
そうか!!

伯爵が急に動いたのは こいつが裏にいたからか
ゴゴ
ゴゴ
くくく
狐が一匹かかったわ
カリオストロ伯爵!!
貴様たちの悪事は露見したぞ
観念するがいい
…ふっ

誰に露見したと言うのだ
忍びにか？それは大変
お前など賭けの駒よ
どこで捕まるかって言うゲームのな
なっ!?やだっなにこれ!!
お前が誰の差し金かどこまで秘密を知ったか
何分で吐くか楽しみだわい
そして次の余興だ
い…た
くぅぅぅッ
ああっしまった！

ひゃっ
ななっ何を!?
やめっ
あ…♡
ふるる
んんっ
ガハハハ もう乳首が勃起しおった
下賤な忍びは淫乱よのう

おかしいっ
こんなゲス
ども…に
ひゃめっ
そ…こぉお
くすぐ…ッ
りゅなぁぁ
くすぐられて
いるだ…け…
なのにッ
先ほどの水の
せいか!?
だが…あんな
大量の媚薬を
どこから…
ッぁぁぁ
だ…めだ
このままでは
放せ…
このぉっ
限界…
が…ぁぁ
いい加減
にぃ…い
しなさ…

恋愛天士
キューティッド桜
暴走ロボの搾取調理
小説/NOVEL ナるカく
挿絵/ILLUSTRATION Alber
無機質な手に犯される愛の魔法少女
マシン触手で搾乳アクメクッキング！

「バレンタインの相談？」
二月の上旬。時刻は昼に差し掛かった頃。
とある学園に通う雪花桜（ゆきばなさくら）は、友達の女子と一緒に寒空の下、テスト終わりで早めに下校していた。
「う、うん……もう直ぐ当日なのに、好きな男の子にチョコを渡そうかどうか、まだ迷ってて」
顔を赤くする友人が話した通り、帰り道にあるどの店もチョコを販売しているし、手を繋ぐカップル達の姿も目立つ。バレンタインムードたっぷりだ。
「好きなら迷わずに、本命チョコ渡しなさいよ」
「で、でも私……桜みたいに、可愛くないから」
自信なく言う少女は、チラッと隣の桜を見た。
緩やかに弧を描き、強い意志を感じさせる釣り目の黒瞳。肩に届く長さの黒髪が、冷たい風を受けてマフラーと一緒に流れ躍る姿さえ美しい。
「スタイルだって、桜の方が魅力的だし……」
ブレザー制服の胸生地を、しっかり押し上げるのは大きなリンゴ程はある肉果実。
程良く括れた腰を抜ければ、少女らしくふっくらと張り出した臀部が、ミニスカートを膨らませる。
細くてしなやかな足までも、非の打ち所がない。
「普通よ普通。アンタの方が可愛いわよ。だから勇気出して、本命チョコ渡せばいいのよ」
「……で、でもぉ……」
「そんなに弱腰じゃ、他の子に先を越されちゃうわよ？　アンタ、それでもいいの？」
風紀委員長として、日頃から厳しく生徒を指導している桜はハッキリと言ってしまった。黙って悩んでしまう友人を見て、慌てて付け足す。
「ま、まぁアタシも出来るだけ手伝ってあげるから……頑張って勇気出しなさい」
微妙になった空気を桜が立て直す前に、帰り道が違う不安気な友人と、途中で別れる。
『あんな言い方じゃダメだよ！』
すると突然、小さくて可愛らしい少年の声が聞こえた。しかし周りには自分以外誰もおらず、声が聞こえてくるのは、首に巻くマフラーの下からだ。
『もっと優しく、友達を勇気付けないとダメ！』
少し首巻を緩めて制服の襟元を見下ろすと、あったのはハートのネックレス。それが独りでに揺れ、まるで口うるさい教師の如く訴えていた。
「ちゃ、ちゃんと勇気付けたじゃないの」
『あれじゃダメだよ！　君は魔法少女、恋愛天士キューティッドなんだから！』
この喋る首飾りの正体は、実は恋の妖精なのだ。
人間の世界に溶け込む為に今はネックレス姿をしているが、魔法の契約を結んだパートナーである。
『僕が君を選んだのは、誰よりも強い勇気を持ってるからだよ。その勇気を恋に悩む人に分け与えて、優しく手助けするって約束したのに……』
誰かに幸せになって欲しい。そう思ったからこそ契約を結んだ桜は、先程の事を思い出していた。
（……やっぱり、ちょっと厳しく言い過ぎたわね）
自分自身を叱り、人が居ない路地に入って首のネックレスに触れる。するとピンクの光が溢れ、身を包むと同時に制服が弾け消えた。
滑らかな曲線を描く、美少女を代表する様な身体に、桃色の光が密集してくる。下着の支えがなくても丸みを失わない乳房を、エプロン型のコスチュームが包み込み、初々しい谷間が艶やかに弾んだ。
フリルの付いたスカート部分が臀部を優しく隠して、誰も触れた事がない股下の繊細な陰唇を、可愛らしいショーツがぴったり覆う。
ふっくらとした太股にはニーソ、足首から下にはブーツ、華奢な腕にはオペラグローブが形作られて、そして黒瞳は煌めく海色に染まり、髪の毛が太陽を溶かし込んだ様な淡い金色に輝く。
リボンやハートのアクセサリーが服や身体を飾ると同時、背中に半透明な翼が現れた。
『さぁキューティッド、さっきの子を追うんだ！』
魔法少女に変身した桜は、頷いてアスファルトを蹴る。背中の翼が揺らめき、風で舞う羽の如く身体が宙を浮かぶ。高層ビルよりも更に高い上空から、変身して視力が増した青い瞳で、地上を見据えた。
「……居た」
そして、元気なく帰宅中の友人の姿を見つける。
「私も、桜ちゃんみたいに可愛い女の子だったら」
片思いに苦しむ人の声を、遠くからでも捉える事が出来る魔法少女の耳に、切ない言葉が聞こえた。
「……アンタの方が絶対可愛いし、それにとってもいい子よ……大丈夫、上手く告白出来るわ」
心の声を口にする。桜色の光を片手に集めて弓を形成し、もう片方の手には、恋の勇気を封じ込めた輝く矢を出現させた。必要な人にだけ必ず届く魔法の矢を優しく放ち、友人をそっと射抜く。
「……で、でも当たって砕けろって言葉もあるし！勇気を出して、手作りチョコ渡そう……うん！」
元気良く駆け出した友人に、桜は微笑んだ。
『ほら、周りにまだまだバレンタインの悩みを抱えてる人が居るよ。皆に勇気を出してもらおう！』
首飾りからコスチュームのベルトとなった妖精に頷き返し、桜は翼を羽ばたかせて皆に勇気を運ぶ。
「ふぅ……今日はこんなところかしらね」
人が居ない公園に空から下りた桜は、一息つく。
『お疲れキューティッド。じゃ変身を解いて――』
「グフフ！　見つけたぞキューティッド!!」
制服姿に戻ろうと思った矢先、公園の茂みから大声を上げて誰かが飛び出してきた。
「この公園にテントを張って一週間……君が現れそうな場所を、見張ったかいがあったよ」
目の下にクマを作り、ろくに洗っていない制服の

著者近況　あけましておめでとうございます、ナるカくです。もう2月なんですね……ウフフ。変形と合体って、なんかいやらしい響きだなぁ～、と考えながらニヤけている今日この頃。

上から同じく汚れた白衣を着ている男子学生だ。
「ッ……暗杉」
危険漂う笑顔の少年は、桜のクラスメイト。以前学園で執拗に迫られた事があり、どんな手を使ってでも恋人になろうとしてきた最低な男子だ。
「グフ！　いやぁ今日も可愛いね……憧れの桜ちゃんにそっくりで最高！」
「……アンタ、その桜って子が好きなんでしょ？　ならどうして、アタシの事をつけるのよ？」
魔法少女の正体を知らない暗杉に、質問した。
「グフ、そんなの桜ちゃんとキューティッドの両方を手に入れる為に決まってるじゃん！」
邪な願望が、歪み笑う声から伝わってくる。
学園でも未だにしつこく言い寄られ、キューティッドになってもストーカーされ続けて正直最悪。
「誰がアンタなんかと……お断りよ!!」
「グフフ。なら無理矢理手に入れちゃおっと！」
茂みの中で、何かがガサガサと音を立てた。
『またエッチなロボットかも！　注意するんだ！』
その言葉通り、暗杉は学園のロボット研究部に一人所属し、毎日怪しい発明をしている。いやらしいロボットで何度も戦いを挑まれては、魔法少女の力で撃破してきた。
「……って、何よアレ」
茂みから出てきたのは、家庭用プリンター程しかない小さなロボット。しかも四本足のクモの様な見た目で、武器らしき物も何も装備していない。
「前に戦った人間っぽいロボットの方が、もっと強そうだったじゃないの……緊張して損したわ」
『キューティッド、油断しないで！』
「分かってるって……さっさと倒しましょ」
弓と矢を出現させ、しっかり狙いを定めて射る。
見事ロボットに命中して破壊したが、小さい爆発と共に大量の白煙が吹き、辺り一帯を覆う。
「な、何よこれ見えないッ……まさか、罠!?」
「グフフ……今だ！」
視界が悪い中、変態発明家が叫ぶ。それと同時に今まで隠れていたもう一体のクモロボットが、凄い速度で背後から突撃してきた。
「な!?」
慌てて弓を構えるが、間に合わない。ロボットは飛び掛かってきて、背中に抱き付いてくる。
「嘘！　ちょ、ちょっと離れなさいよ!!」
四本足でしっかりとしがみつく機械グモ。足を引き剥がそうとしてもビクともせず、青ざめた。
「やった！　ついにキューティッドを捕らえた!!」
いつの間にか変な機械帽子を被った卑怯男子が、嬉しそうに飛び跳ねて不敵な笑みを向けてくる。
「さっきのはダミーで、本物はそっち……いやいや失敗作でも使い道はあるんだねぇ」
暗杉は「この帽子はコントローラーなんだよ」と得意気に話し、ロボットのボディに開いた無数の小さい穴から、にょろり、と紐の様な物を伸ばす。
「ひゃ……な、何？　何？」
背中を這う冷たい感触。その正体は四本の鉄紐でミミズの如く妖しくうねり、コスチュームの脇腹やニーソの太股を撫でられて気味が悪い。
「まずは、君の動きを完全に封じなきゃね」
暗杉は公園の茂みに隠していたダンボール箱を抱えてきた。そして四本の機械ミミズを操って箱の中に先端を入れると、何やらクレーンゲームのフックに似たパーツを取り付ける。
「バレンタインも近い事だし……僕の為に手作りチョコを作ってもらおうか」
フックワームが、桜の手と太股をしっかり掴む。
「ひゃッ！　な、何この感触……」
フックの表面はゴムで柔らかいのに、中は機械の硬い質感。今まで感じた事のない感触を味わい、その異様さに身震いした。
（し、しかもこのロボットのパワー、凄く強い！）
変身した桜の身体能力は、前と比べて数倍に増幅されている。しかしそれでも、機械の拘束力は凄まじくて振り払う事が出来ない。
『今は従うフリをして、チャンスを見つけるんだ』
ベルトになった妖精は、チョコを作るだけなら危害は加えないだろう、と耳打ちする。
（クッ……しかたないわね。今は、我慢するわ）
暗杉から調理道具や材料のチョコを渡されて、命令されるまま公園の中でお菓子作りを始める。
「はぁ～……あのキューティッドが僕の為に、チョコを作ってる。今年は最高のバレンタインだ!!」
機械グモを操る卑劣少年は、嬉しそうに言う。
「無理矢理作らせといて、よく言うわ……アタシの恋人にでもなったつもり？」
チョコをボウルの中で溶かしつつ、悪態をつく。
「当然だろ？　君はもう、僕のモノなんだから」
囁くと、新たに用意したフックワームで妙にいやらしく身体を撫で回される。
「きゃッ!?　ちょ、ちょっとドコ触って……ン！」
コスチューム越しの美乳がメカハンドに触れられて歪むと同時、変な感覚が背中を駆け抜けた。
余った機械手がスカートに迫り、摘んで捲り上げられるとショーツに包まれた尻山を撫で回す。
（んぁ、や、柔らかいのに……硬ぃッ）
女膨を掴まれ、ぐに、ぐに、と柔フックの一本一本で丁寧に揉み込まれる。人の手とは違うゴムと細鉄の感触に、胸と尻が熱く痺れて身体がビクつく。
「こ、この卑怯者ぉ、ン!!　あ、ぅ……変態！」
「グフフ……でもエッチな声出してるじゃないか。エロい事されて、本当は感じてるんだろ？」
「ち、違ッ……有り得ない事言わないでよ!!」
「じゃあチョコ作り続けなよ、問題ないでしょ？」

著者近刊　『子づくり委員長　美少女たちと孕ま性活』『守らせて！発情生徒会長！』　好評発売中！

光翼戦姫
〈EXS-TIA〉
エクスティア
小説 NOVEL／上田ながの
挿絵 ILLUSTRATION／宮越良月
原作 ORIGINAL／Lusterise
発売が迫る期待の変身ヒロインゲームから
今号も書き下ろしで陵辱小説を展開!!

（もう……駄目……。創ちゃん……）

怪人の巨大触手がエクスティアの肉体へと伸びてくる。

その刹那のことだった。

ドゴオオンッという凄まじい爆音と共に、作られた異空間に穴が開いたのは……。

「な……なんだ!?」

怪人が戸惑いの声を上げる。

「それ以上……させるかよぉっ！」

聞き慣れた声が空間内に響き渡る。

それと同時に、エクスティアの視界は真っ白な閃光に包み込まれた。その光の中で、エクスティアは意識を手放す。

＊

「こ……ここは……？」

それからどれくらいの時間が経ったのだろうか？　エクスティア――いや、真里奈は意識を取り戻す。

「ほ……けんしつ……？」

視界に見慣れた保健室が映り込む。

「大丈夫か真里奈？」

「そう……ちゃん……」

恋人の顔が視界に映る。その顔を見るだけで、なんだか心がとても安らいでいくのを感じた。

「でも、どうして？」

何故自分は助かったのだろうか？

「……異空間の綻びを私が探索し、そこを万が一の時の為に紫峯に渡してあった道具で破壊させたんだよ。そうすることでキミを救い出した」

疑問には百合が答えてくれる。

「そういうことだったんですか……。ありがとうございます先生。ありがとう……創ちゃん」

「……礼なんていらないさ。俺はやるべきことをやっただけだ」

「でも、ありがとうね」

礼を重ねて微笑むと、創真は恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めた。

「そういう青いやり取り……嫌いではないが、今はそれよりも敵を倒すことを優先するぞ」

「あ……は……はいっ……」

百合の言葉が挟まれる。創真同様顔を真っ赤にしながら、先生の言葉に真里奈は頷いた。

「一応不意を突いてキミを救出することには成功した。だが、敵はまだ街に残っている。周囲の人々を捕らえ、プラントのようなものを形成している。効率よく人間の感情エネルギーを吸うプラントを」

「……放ってはおけませんね」

「そうだ。放っておけば被害は拡大する。だからこそ……悪いが葛城。これからキミには紫峯とセックスしてもらうぞ」

百合は実にストレートにそう告げてきた。

＊

「……その……や……優しくしてね……」

保健室に並べられたパイプベッドの上で、真里奈は顔を真っ赤にしながら並ぶように座る恋人に告げる。思考がショートしてしまいそうな程の羞恥を覚えながら……。

エネルギー回復の為に、今までもこうして幾度となくセックスしてきた。それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

「分かってるよ」

恥ずかしがる真里奈に微笑みかけてくると共に、チュッと創真は優しくキスをしてくれた。唇と唇を重ねるだけのキス。でも、それは最初だけ。すぐに口腔に舌を挿し込んできた。グチュグチュと淫靡な音色を奏でるように口内をかき混ぜてくる。

「んっふ……んちゅっ……ふちゅうう……」

ただのキスなのに、それだけで達しそうな程の心地よさを感じた。

この感触をもっと味わいたいというように、自分からも舌を蠢かせる。卑猥な水音が響いてしまうことも気にせず、互いに唾液を交換しあった。

そうしてキスをしていると、なんだか身体が熱くなってくる。ジンジンと下腹部が疼き始めるのを感じた。

自然と身体をくねらせてしまう。クイックイッと腰を左右に振りつつ、強く創真を抱き締めた。

そんな求めに応じるように、創真はキスを続けつつ、真里奈の乳房に手を回してくる。優しい手つきでグニッグニッと乳房をこねくり回すように揉み始めてきた。

「んんっ……あっ！　あんっ……」

ほんの少し乳房を揉まれるだけで、思わず甘い声を漏らしてしまう。身体中が蕩けてしまうのではないかと思うほど心地いい感触が身体中を駆け巡っていくのを感じた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

自然と息が荒くなっていく。堪らない程に下腹部が火照り、ジュワアアッと愛液が溢れ出していくのを感じた。

触って欲しい。秘部を弄って欲しい――身体が快感を求める。

それを創真は理解してくれた。

スカートの中に手を入れると、クチュウッと下着に指を這わせてくれる。

「んあんっ」

ビクンッと肢体が震えた。

「エッチな声……。それにここ……凄い濡れてる」

囁くような言葉が向けられる。

「やだ……恥ずかしいよ……」

「でも、本当のことだから」

吐息を耳元に吹きかけつつ、創真は指をくねらせてくる。グチュッグチュッグチュッという淫靡な音色を演奏するように、真里奈の敏感部分を上下に幾度も幾度も擦り上げてきた。

「んんんん！　あっふ！　あっあっあっあっあっ」

指の蠢きに合わせて肉悦が身体中を駆け巡っていく。下着のクロッチ部分を上下に擦られると、それだけでお漏らしでもしているみたいにどんどん分泌される愛液量が増していった。

ねっとりとした粘液が創真の指に絡み付いていく。

「はぁ……はぁ……はぁ……ねぇ……もう……」
快感と共にもどかしさが膨れ上がっていく。身体の一部分にぽっかりと穴が開いたような感覚だった。
欲しい。この穴を埋めて欲しい。一つになりたい。創真の逞しいもので自分の身体を満たして欲しい。
どうしようもないほどに欲求が増幅していく。抑えることなど不可能だった。
だから求める。挿入れてくれと創真に願う。
「ああ、いくよ」
この真里奈の求めに創真は応じてくれる。頷くと共に、肉棒を剥き出しにしてくれた。痛々しい程に硬く屹立した肉棒を……。
「ごめんね……創ちゃん……私……」
ペニスを見た瞬間、怪人に陵辱されたことを思いだしてしまう自分がいた。反射的に謝罪の言葉が口を突く。創真に対して酷い裏切りをしてしまったような気がしたから……。
「大丈夫。大丈夫だ。忘れさせてやる。辛かったことなんて……俺が……」
けれど創真は真里奈を責めはしなかった。それどころか優しい言葉と共に、ギュッと真里奈を抱き締めてくれる。伝わってくる恋人の体温を感じていると、それだけで心が安らいでいくのを感じた。
「ありがとう……創ちゃん……んふっ……」
礼の言葉を伝えながらもう一度キスをする。創真もこちらに唇を押しつけつつ、真里奈の身体をベッドの上に仰向け状態で押し倒してきた。
そのままスカートを捲り上げ、ストッキングと下着を脱がしてくる。
愛液に塗れた秘部が露わになった。そこにグチュッと肉先を押しつけてくる。そして――
「あああ……く……くるっ」
ペニスを挿入してきた。ズブズブと下腹部に硬くて熱い感触が広がってくる。
「あぁぁ……創ちゃん……好き……。大好き」
自分と創真が一つになっていく感覚に、自然と好きという言葉が口を突いた。
「俺も……俺も好きだ！」
創真もこれに答えてくれる。
答えつつ、ジュッボジュッボと腰を振ってくれた。
「凄い……これ……すぐ……私……すぐいく！　イッちゃう……」
想いが強すぎるせいだろうか？　ほんの少し動かれただけで絶頂感がどうしようもないほどに膨れ上がっていく。
「俺もだよ。俺もすぐいく！」
真里奈にシンクロするように、創真も限界を伝えてきた。膣中に肉棒が跳ね回るように震える。
「来て！　創ちゃん！　膣中に……出して！」
「くあああっ！」
ズンッと創真が膣奥に肉棒を突き込んできた。次の刹那肉先がクパッと口を開き、ドビュドビュと白濁液を撃ち放ってくる。
「んひいい！　で……てる……！　これ……凄い！　あああ……熱いの……来て……い……イクっ！　私……イクっ♥　イクイク――イクぅぅぅ♥♥♥」
肉壺に広がる熱気と共に、強い力が身体の隅々にまで漲っていくのを感じながら、真里奈は絶頂に至った。

＊

「今度こそ……貴方を倒すっ!!」
エクスティアは怪人の前に再び立つ。
エネルギーは回復している。それに、前回の戦闘データをもとにした戦闘プログラムも、変身デバイスには組み込まれていた。
『いいか……俺の指示通りに動くんだ』
それに、前回の敵の動きを見ていてくれた創真が、今回はバックアップとして指示も出してくれる。
（だから大丈夫……今回は勝つ！　絶対に!!）
その想いと共にエクスティアは剣を具現化させ、切っ先を怪人へと向けるように構えた。
「……今度こそ、お前のすべてを我が物にしてやるぞぉおお……」
これを見た怪人が嬉しそうに笑う。
「そうそう上手くは――いかないっ!!」
今度は負けない。絶対に――その想いと共にエクスティアは大地を蹴り、敵との距離を詰めた。
「はぁぁぁぁ！」
これに応じるように怪人から幾本もの触手が伸びてくる。
『真里奈っ!!』
創真からの指示が飛んできた。
「はぁぁぁぁっ！」
戦場全体を見渡せる創真の指示により、敵の攻撃をすべて回避する。一気に敵の懐に潜り込むと、容赦なく剣を振るった。
「がぁぁぁぁぁっ！」
ザシュウウッという一撃に、怪人が苦痛の悲鳴を響かせる。
（いける！）
前回とは違う――勝てる！
そんな想いと共に、更にエクスティアは剣を振るった。
嵐のような連続斬撃を怪人へと向ける。
「ぐっが！　あがっ！　ぐがぁぁぁぁっ!!」
触手を斬り、敵の身体に傷を負わせる。
（これなら……今度こそっ!!）
勝利の確信のようなものを、この段階でエクスティアは得た。
「止めです！　はぁぁぁぁぁっ！」
全身からエネルギーを噴出させる。エクスティアの背中から、青い翼のようなものが伸びた。
「フォトン――」

著者近況
エクスティア後編でございます～！　ゲーム本編の発売はこのコメントを書きつつAmazonで調べてみたところ3月らしいです。おお！もう少しだ！！　ってなわけで皆様、どうぞよろしくお願いしますです～。

必殺の一撃を放とうとする。
「いや、そこまでだ」
刹那、怪人がにやりと笑った。
それと共に――
「なっ！　このっ！　うぁああっ!!」
「えっ!?　そ……創ちゃん？」
創真の悲鳴が聞こえた。
思わず足を止め、振り返る。
そんなエクスティアの視界に映り込んだのは、何本もの触手によって肉体を拘束されてしまっている創真の姿だった。
「嘘……そんな……創ちゃんの方に敵？」
創真が襲われないよう、敵の気配には気を配っていた。それなのに、どうして？
「くくく……斬られた触手は死んだわけじゃない。こういう使い方もあるんだよ」
「そ……そんな……」
「さぁ、どうする？　まだやるか？」
怪人が実に嬉しそうにそう告げてきた。
「駄目だ！　真里奈！　俺のことは構わない……だから……だからぁっ！」
創真の絶叫が響く。
自分のことは構わない――創真ならきっとそういうだろうという言葉だった。そんなところが創真らしい。
だからこそ――
「ごめんね……創ちゃん……」
彼が傷つくところなど見たくはなかった。

エクスティアは敗北宣言でもするかのように、握っていた剣を投げ捨てた。

＊

「んっく……くあああっ……ああぁ……き、気持ち悪い……」
抵抗を諦めたエクスティアの肉体に、幾本もの触手がねっとりとした動きで絡み付いてくる。糸を引く程濃厚な、滑る粘液に覆われた触手の生温かな感触が実に気色悪かった。こうして絡み付かれるのは二度目だけれど、前回同様鳥肌が立つほどの嫌悪感を覚えてしまう。自然と身を捩り、触手から逃れようとしてしまう自分がいた。
けれど、肉触手はそのようなエクスティアの抵抗を嘲笑うかのように、より強く肢体を締めつけてくる。肢体が触手によってぶら下げられるような体勢にされてしまった。その上で怪人は触手をうねらせつつ、秘部に肉先を近づけてきた。
ぐっちゅ……ぬちゅうううっと強化スーツの上からではあるけれど、淫部を押し込んでくる。
「あくうっ！　んんっ！　あっあっ……ああぁ！」
ほんの少し圧迫されただけでしかない。だというのに、全身が痺れるような刺激を覚えてしまう。ガクガクと膝を振るわせ、思わず声を漏らしてしまう自分がいた。
「はふうう……はぁっはぁっはぁっ……」
何度も肩で息をする。

「くくく……」
そんな反応を見て喜びの笑みを浮かべつつ、怪人は更に触手をくねらせてくる。クロッチの上から秘裂を容赦なく擦り上げてきた。
「あっあっ……だ……駄目……。やめて……お願い……んんん！　お……願い……だから……やめてぇえ！」
創真の前で陰部を愛撫され、快感を刻まれる。耐え難い事態だった。だからやめてくれと必死に懇願するのだけれど、幾ら願ったところで怪人がそれを聞き入れてくれることなどあり得ない。
それどころかやめてくれと訴えれば訴えるほど、より強く触手を秘部に押しつけてきた。
「やめて？　違うな。本当はこうして欲しいんだろ？　こうやってあそこをグチャグチャに弄られたいのであろう？」
触手を蠢かせ、クロッチを上下に擦り上げてくる。まるで敏感部分を愛撫するかのように……。
「あっ！　んあっ！　あっあっあっ」
何度も創真に抱かれ、既に快感を覚えてしまっている肉体は、最悪な状況だというのに、ほんの少し秘部を刺激されるだけで、甘く痺れるような感覚を覚えてしまう。自然と喘ぎ声にしか聞こえない声まで漏らしてしまう自分がいた。
「ほら……感じている」
「ち……違う！　違うっ!!」

慌てて首を左右に振る。
認めることなどできない。
「んんんっ！　くっふ……んっんっんっ……」
慌てて口唇を引き締め、声を抑えようとする。
「そんなことをしても無駄だぞ。ほら……聞かせろ。お前の甘い声を」
怪人は耐えるエクスティアを嘲笑うかのように、更に触手をくねらせ始める。ただワレメを愛撫してくるだけでは終わらない。スーツ越しではあるけれど、クリトリスまで刺激してくる。快感を刻まれたことによって勃起し始めていた陰核を転がすようにグチュグチュッグチュッと……。
その上更に乳房まで揉みほぐしてくる。こねくり回すように柔らかな柔肉に触手を食い込ませつつ、乳頭にグロテスクな先端部分を押しつけ、じゅるるるっと吸引行動まで行ってきた。
「あんん！　あっあっあっ」
声を出してはいけない。こんなことで感じてはならない――理性ではそれを理解している。
だというのに抑えることができない。
（駄目……声……出しちゃ駄目ぇえ……）
相手は恋人ではなく、倒さなければならない敵だ。そんな相手に無理矢理身体を弄り回され、声を漏らす――そのようなことあってはならないのに……。
「んふううう……くっふ……んふうう

著者近刊　『聖騎士牧場 家畜に堕ちた戦姫たち』『女騎士エルザの復讐　終わりのない娼婦淫獄』『聖換天使エクスラグナ』『学園百合ストーリーズ 3つの恋花』『ツンツン妹は僕専用の射精管理官！』ほか　好評発売中！

思春期なアダム 第15話

EVIL EYES

藤田睦月が元の家に戻る？

以前バネイリとの戦闘で破壊されたマンションにか？

最新コミックス第2巻いよいよ3月12日登場！

AMAGAI YUKINO 天海雪乃 原作：さかき傘

web版コミックヴァルキリーでも連載中！

http://www.comic-valkyrie.com/

はい 先ほどミスEに連絡が入ったとのことです

なるほど 考えたな

我らや魔族が狙いやすい環境へ身を置くことで

逆に三者いずれも手を出せない状況を作ったのか

前号までのあらすじ エンジュに護られつつ学園生活を送る睦月と、二人を見つめる同級生の少女・沙耶の妖しい視線…。そしてついにショピングモールを訪れた睦月たちの前に“黒猫”が襲いかかる！

黒猫は？

ミスEや魔族のいる学校内で

睦月少年に近づくのはやめたようです

とはいえ動力半導体を数点用意しているのが確認されており

少年を狙っていることには間違いありません

ふむ……困った子猫だ

睦月少年はミスEに連絡する際学校に届けた電話番号

…つまり一般回線を用いました

おそらく通話内容はほぼ100％黒猫に盗聴されています

だがマンションの位置までは掴まれていまい？

ええ…ですが……

たとえば引越しに伴う大きな買い出しなどでどの店を選ぶか悟られていたりしたら…
灼霊浄剣(プロミネンス)・双噴射(ルーブ)ッ!!!
ハアアアッッ!!
やった！

損傷…32%
攻撃可能域…Positive
ドクン
くあッ！
か……は……
ヨロ…
エンジュ！大丈夫!?
に…逃げよう？
あの人がきっと伊部草さんが言ってた黒猫だよ
ほう……名をご存知とは光栄だ

うるさい
うるさい！
あんなのすぐに
ぶっつぶして…
ポタ
ポタ
ビ…ビール？
ミカさん！
頭を
冷やしなさい
エンジュ！
あなたの
最優先任務は
藤田睦月君の
護衛でしょう！

淫妖蟲凶 後編
～凌蝕病棟退魔録～姦禁蟲蠲り
妖魔うごめく病棟に踏み込む深琴と鈴子…
触手凌辱AVG『淫妖蟲 凶』小説版、いよいよクライマックス！
小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）
挿絵／ILLUSTRATION 汰尾乃きのこ（たおの）
原作／ORIGINAL TinkerBell

登場人物紹介

白鳥深琴

退魔屋本舗黒猫支店所属の退魔師少女。退魔刀『雷光』を操る。妖魔には強いが幽霊が苦手。

九重鈴子

九尾の狐の力を持つゴスロリ少女。訳あって深琴たちに力を貸す。熊のぬいぐるみを肌身離さず持っている。

香山水依

黒猫支店所属の黒髪の少女。鋭い霊感を持つが、妖魔に対する戦闘能力は低い。巨乳。

前号までのあらすじ　人間の精気を吸い取る、ネット動画の出所を追って本郷病院に潜入した深琴と水依。だが水依は院長に囚われ、妖魔の苗床にされてしまう。

水依を攫われた翌日の、夜――本郷医院の裏手に立つ、旧病棟の廊下。

「――大畜、比、明夷」

大きなクマのぬいぐるみを胸に抱えた小柄な少女が、独り言のように小さく呟く。間髪入れず白刃が閃き、なにもない空間に黒い裂け目を三筋刻んだ。

周囲の光景が一瞬揺らぎ、すぐ元通りに。

見た目はなにも変わらない――が、薄暗い廊下に立つ赤毛のポニーテール少女と小柄な隻眼の少女は、頬に浮かぶ緊張を微かに深めた。呪術に長けたふたりの目には、蜘蛛の巣のように張り巡らされたさまざまな種類の結界が、青白い燐光を放つ細い筋としてはっきり映っているのだ。

「また結界……斬っても斬ってもキリがない。昨晩はまったくの無警戒だったのに……」

制服の襟を無意識に直しつつ、退魔刀の切っ先を下げて自然体で立つ深琴と、

「あの乳牛女を助けるために私たちが再潜入すると、敵も予測したのです。ただ、九重鈴子という天才美少女の存在までは、予測できなかったのです」

胸に抱えたクマの頭に細い顎を押しつけて、ボソボソと呟く隻眼の少女・九重鈴子。

自らを「天才美少女」と呼んで憚らないほど自信過剰だが、実際に天使のように愛らしい。常に纏っている黒ゴスドレスと右眼を覆った眼帯、そして毒のある言葉をボソボソと呟く特徴が異様な印象を醸し出しているが、それらを差し引いてもなお余りあるほど、小柄で細身の美少女なのだ。

そのうえ呪術の知識も技量も力量も、天才的。巨乳を目の敵にしているため、胸の大きな深琴とは相性が悪いが、敵に攫われた水依をなるべく早く救出するため「今回だけは特別なのです」などとブツブツ言いながら共闘している。

「本当にこの方角でいいのよね？　敵の結界に誤魔化されていたりしない？」

「ムッカムカーッ！　鈴子様を疑うのですかッ!?」

「そ、そうじゃなくって……私も結界は見えるけど、その性質までは分からないから、不安なのよ」

「ふんっ！　オッパイは大きいのに、肝っ玉は小さいのです。鈴子様にすべてお任せあれなのです！」

眼帯に塞がれていない左眼をスッと細くし、薄暗い廊下を見透かす鈴子。

「……ここからしばらくは警報結界なのです。斬っても触れてもいけないのです」

敵が複雑に張り巡らせた結界の性質を瞬時に判断、退魔刀・雷光を提げた深琴に細かな指示を出す。

「大有に六歩、小過に三歩、比に二歩、訟に四歩」

方位の指示は六十四卦、一周を三百六十度で表現する方法に換算すれば、約五度六分刻み。誤差はプラスマイナス二度八分以下でなければならない。

生半な技量では対応できない精度だが、制服姿のポニーテール少女は呼吸を鎮めて腰を落とし、スス、スス、と滑るように歩を進める。

退魔屋本舗黒猫支店の中ではガサツで不器用で直情径行、半人半妖の橘木ヤマトと並ぶパワー系の人材と見なされている深琴だが、それは愛用している退魔刀・雷光に負うところが大きい。本人もあまり自覚していないのだが、実際にはそこそこ器用で意外に繊細で、知識や技量は並以上。今回のような急造チームでもすぐに呼吸を合わせて対応できるだけの柔軟さもある。

「大有に三歩、蒙に五歩。向きを秦にして、その方角を新たな乾坤に設定」

「……正面に壁が見えるんだけど、本当にこの向きでいいの？」

「頭に送るべき栄養を胸の脂肪玉に奪われているバカ乳女は、考えるだけ無駄なのです。鈴子様の言う通りにしていれば、間違いないのです」

深琴のうしろに付かず離れず、影のように寄り添って移動した鈴子が、天使のように愛らしい顔でトゲトゲしい言葉を吐く。

水依救出のためチームを組んだが、鈴子の巨乳嫌いは筋金入りで、こんなときでもチクチク責めずにはいられないらしい。

一方の深琴は、無言。普段なら最終的に負けると分かっていてもついつい口喧嘩に応じてしまうのだが、いまはそんなことをしている場合ではない。

（私が幽霊に怯えていたせいで、水依を攫われてしまった……私の責任だ、早く助けなければ……！）

そう思い詰めているから鈴子の悪口には一切反応せず、正面の壁を静かに見つめて次の指示を待つ。

「……むう。張り合いがないのです」

小さく溜め息を漏らした鈴子も、すぐに気持ちを切り替えた。左眼を細めて薄闇を見透かし、常人の目には映らない気の流れを検分して――。

「家人、謙、需、解」

斬るべき気筋を指示。

ひゅひゅんと雷光が趨り、目に見えない経絡を的確に寸断した。

鈴子が指示し、深琴が斬っているのは、空間や認

識をねじ曲げる遁甲術系の結界だ。
だから、雷光が閃くたびに周囲の光景が蜃気楼のように揺らぎ、揺らぎ、揺らぎ――目の前にあった壁が消え、階下へ降る階段が現れる。
「……ッ！」
駆け出しそうになる脚を、すんでの所で踏み留める深琴。
現れた階段の下から水依の気配が漂ってきたのだが、しかし罠かもしれない。危険を承知で敵地に再潜入したのは、水依を助け出すため。ここまできて敵の罠に引っ掛かってしまったら元も子もない。
「こ、この階段……降りちゃダメ？」
焦る深琴に対し、
「当たり前なのです」
薄い胸を張ってすげなく答える鈴子。
「でも、でも……水依の気配が……」
「あーあ、これだから乳デカ女はダメなのです。敵の術にまんまと引っ掛かってるのです。やはり頼りになるのは賢く可愛い鈴子様だけなのです」
「そう、その通り、鈴子だけが頼りなの！　だから早く……どうしたらいいのか教えて！」
いまにも縋りつきそうな深琴から、ぬいぐるみを抱えた隻眼の少女はなぜか、スッと離れた。
「ちょ、ちょっと、鈴子ッ！　こんなところで意地悪しないで！」
「まだ分かっていないのですか？　やれやれなのです。もう、どこにも行く必要はないのです。すでについているのです」
「え？」
「乳ばかり無駄に育ってしまったノータリン女の目は誤魔化せても、この鈴子様の涼やかに澄んだ円らな瞳は誤魔化せないのです。右足、一歩退く！」
「え？　え？　……あっ⁉」
鈴子に指差され、右足を一歩退いた深琴は、自分が踏んでいた場所に遁甲術の札を見つけて目を丸くした。階段が現れる前にはなかったはずだ。
ということは――あの瞬間、壁が消えて階段が現れたのではなく、自分たちが別の場所に移動したのか。移動した先でいままでと似たような光景を見せられ、水依の気配を餌にして、罠である階段へ誘われていた――。
「雷光で突く！」
「こ、こう……？」
鈴子に指示されるまま雷光を逆手に持ち替え、床の呪符を切っ先で突く深琴。
途端、周囲の光景が一変する。
薄暗い廊下から、窓のない十畳ほどの広さの、殺風景な部屋に。
元々は霊安室だったのだろうか、入口はふたりの目の前にある一枚の扉だけ。左手の壁や床には大きな家具が取り除けられたような跡があり、埃臭い薄闇に微かに線香の香りが混じっている。
部屋の中へと目を転じれば、中央には腰高の寝台があり――。
「ッ！　水依……ッ！」
白衣姿の水依が仰向けに横たえられているのに気づき、思わず駆け寄る深琴。だが寝台に触れる寸前、見えない壁にぶつかって、したたかに尻餅を搗く。
「く……ッ！」
「ダメなのですッ！」
反射的に雷光を振り上げた深琴の腕を、鈴子が素早く掴んだ。
「放してっ！　水依を助けなきゃ……」
「その結界は、力尽くで破壊すると爆圧が内側に向くようになっているのです。感情の赴くままに馬鹿力を振り回す能無し乳女なら簡単に引っ掛かってしまい、しかもすべての努力が一瞬で水泡に帰すという、単純かつとてもいやらしい罠なのです」
「う……わ、分かったわよ、分かったけど……でも、どうすればいいの？」
なんとか落ち着いた深琴に対し、ピッと背後の扉を指差す鈴子。
「乳だけ無駄に大きなバカ女が考えなしに結界に触れたので、警報が発せられたのです。でも天才美少女・鈴子様が、壁も床も天井もすでに封印したので、敵が来るとすればあの扉だけなのです。馬鹿力だけが自慢のバカ乳女は、あの扉を見張るのです」
「わ、分かったわ。水依をお願い！」
バカバカと連呼されて内心穏やかではないものの、呪術の知識や技量は鈴子のほうが上だ。ようやく見つけた水依から目を離すのは辛いが、ここは鈴子に任せるべきだろう。
雷光を握り直して扉に向かう深琴と入れ違いに、鈴子が寝台に近づいた。腰を屈めて床を見つめながら、眠っている水依の周りを一周し――。
「ふふん、表層と基層で別の呪法を用いるとは、ちょこざいなのです。でも鈴子様の目は誤魔化せないのです。基本は顕密分離前の古流仏教、それを神道系の左道呪法でアルマデル変換して……」
小声で呟く少女の頭に、ぴょこん、ぴょこん、と大きな耳が突き出す。黒ゴスドレスの短いスカートの下からは、もふもふとした太い尻尾がいくつも生え出してきた。退魔の名家・九重一族は、九尾の狐の力を使えるのだ。
「ふふふ……みーっけ！　ここが錠前なのです！」
寝台に横たわっている水依の足先にしゃがみ、床に向けてビシッと指を向ける鈴子。
「クァエ・ヴァルバ・アルカナ・ルミニス」
呪文を受けて青白く輝き始めた指先で、結界表面をスッと撫でる。指が通り過ぎたあとには緋色に輝く文字が浮き上がり、脈打つように明滅する。
どのような方式の錠前でも、鍵の情報は錠前自体

に含まれている。結界の場合も同様で、錠前部分に適切な方法で干渉すれば結界自体がキーワードを語り出すのだ。

「おっと、カローシュティー文字なのです。この術師はとてもお年寄りなのです。でも鈴子様はこれも普通に読めるのです。ええっと……ノウマク・サマンダ・バザラダン・カン。マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ、ウーン！」

鈴子の声が終わると同時、数万本もの針が一斉に石畳に跳ねたような、微かでありながら盛大な音がした。水依を包んでいた結界が、微塵に砕けて消失したのだ。

そして――。

「ッ⁉　しまったなのですぅっ！」

「えっ⁉　ど、どうしたの鈴子……きゃっ⁉」

隻眼の少女の悲鳴に驚き、慌てて振り返ろうとした深琴が、胴を横薙ぎに打たれて扉にぶち当たった。反射的に振った腕に冷たくぬめる弾力が絡みつき、バンザイの格好で吊り上げられる。

触手だ。

妖魔だ。

しかしいったい、どこから――。

「く……あっ⁉　な、なんてことを……ッ！」

いやらしく蠢く肉紐に腕や脚を搦め捕られ、天井近くまで吊り上げられた深琴は、寝台の上に横たわる水依に目を向けてギリギリと歯噛みした。

生臭い粘液に濡れた無数の触手は、水依が纏った白衣の中、タイトなミニスカートの内側から、いまもなお次々と溢れ出しているのだ。

太い物もあれば細い物もある。

指先のような肉イボを互い違いに生やした物もあれば、片面にだけびっしりと小さな吸盤を生やしたタコの脚のような物もある。

蛇のようにのたうつそれらは水依の脚の間から怒濤のごとく溢れ出し、いやらしく蠕動しつつ複雑に絡み合いながら床へと流れ落ちて、深琴や鈴子目がけて殺到する。

「バカ乳女の子宮に、次元門が仕掛けられていたのです！　結界内部のさらに奥だから、気配が感じられなかったのです……！」

悔しげに叫ぶ鈴子は深琴と反対側の部屋の隅に押しつけられ、群がる触手と格闘していた。蹴り、剥がし、引き毟ってなんとか自由を確保しようとしているのだが、いかんせん数が多い。

深琴も雷光を振るい、次々と押し寄せてくる触手を片っ端から斬り捨てているのだが、水依の膣奥から溢れ出してくる触手のほうが多いようだ。

「く……ぁンッ⁉」

制服の胸に弾む大きな乳房が、粘液にぬめる触手にムギュッと締めつけられる。愛撫というほど巧みな動きではないが、おぞましい蠕動によって胸の膨らみが滅多矢鱈に揉み回される。

逆手に握り変えた雷光で断ち切ると、今度は太股にコブコブとした肉紐が巻きついてきた。締めつけは緩いものの、瑞々しい柔肌に押しつけられた硬い丸みが電動玩具のように振動するのがいやらしい。

「こ、のぉっ！　灼滅せよ、雷光ッ！」

退魔刀に霊気を込め、力いっぱい振り下ろして、数十本をまとめて断ち切る深琴。

だが、焼け石に水だ。

水依の脚の間からはなおも陸続と触手が溢れ、さして広くない霊安室が徐々に徐々に、おぞましい肉紐によって埋め尽くされていく。

「次元門を封じなければジリ貧なのです！　退魔の気だけを飛ばして……ンぉっ⁉　む……ンむぅっ⁉」

叫ぶ鈴子の口にムリムリッと、いやらしい肉イボを生やした太い触手が潜り込んだ。円らな瞳が驚愕に見開かれ、細い眉が嫌悪に歪む。

深琴の位置からでは見えないが、鈴子の足首に巻きついた触手は柔らかな脛を締めつけ、いやらしく蠕動しながら瑞々しい太股を這い上がって、すでにスカートの中へ潜り込んでいた。薄布に浮かぶ柔肉の畝に指先のような尖端を押し当てて、弾力を確かめるようにクニ、クニ、クニ――。

「む、むぅ、ンむぅうっ！」

頬を赤らめて怒る少女の頭上で、狐の耳が激しく打ち振られる。

（こ……こんな、ものぉっ！）

胸中で気丈に叫ぶのだが、その柔らかな頬は恥辱と怯えに強張りつつあった。

水依の秘裂から溢れ出してきた触手たちに、お守り代わりのクマのぬいぐるみを弾き飛ばされてしまったのだ。あれがないと、鈴子は気弱な少女になってしまう。大丈夫、戦える、戦わなければ――頭の隅では思っているのに心が縮み、身体が竦んで、

「ン……ッ⁉　ンぁ……ぇお……ンぇおっ⁉」

口から喉へと押し入ってくる触手のおぞましさに、思考が停止。裾から潜り込んできた肉紐に恥ずかしい場所をまさぐられても、袖から這い込んできた触手に薄い胸を揉み回されても、ただただ怯え震えて涙をこぼすだけで、なにもできない。

一方、深琴は――。

（退魔の気だけを飛ばして水依を……ううん、水依の中に造られた次元門を、斬る！）

鈴子に示唆された打開策を実行するため、精神を集中していた。

ぞわぞわと蠢く触手が足首を咥え込み、脛を呑んで太股まで這い上がってくるが、無視。

部屋に満ちた触手のせいで水依の傍に寄れないか

著者近刊　『アリシア　淫獄の姫騎士』『学園戦姫　巴　淫辱の下剋上』『トリプルとらぶるプリンセス』『若妻の秘蜜　堕ちゆく美沙子の爛れた日々』『凌辱レオタード　～淫獄に堕ちた女子高生～』
好評発売中！

ら、ハンパな呪力ではダメだ。
「頭に大雷神、胸に火雷神、腹に黒雷神、女陰に裂雷神……左手に若雷神、右手に土雷神、左足に鳴雷神、右足に伏雷神……」
己が身体を依り代にして八雷神を召喚。溢れんばかりの霊力を受けて、頭上に振り上げた雷光が青白い火花を散らす。
「我ここに、己が身を贄に、雷神の御魂を借り受けて……灼滅せよ、雷光っ！」
転瞬、耳を聾する轟音が響き、真っ白な光が炸裂して、窓のない霊安室が激しく振動。
一拍置いて「むぎゅ！」と聞こえたのは、顔から床に突っ伏した鈴子の声。
光が消え、雷鳴の余韻が退いたあと――霊安室を埋め尽くそうとしていた無数の触手は、跡形もない。寝台に横たわった水依の脚の間から新たな触手が溢れ出してくる気配も、ない。
一太刀で、雑魚妖魔ごと、水依の胎内に造られた次元門を叩き斬ったのだ。
「水依……ッ！」
あれほど凄まじい音が鳴り響いたのにいまだ目覚めぬ仲間のもとへ、蒼褪めた深琴が慌てて駆け寄った。白衣に包まれた細い肩を掴み、揺さぶると、薄い瞼がピクピクとして、桃色の唇が微かに動く。
「生きてる……よかった……」
ほうっと安堵の吐息を漏らした深琴は、すぐに気持ちを切り替え、掌に霊気を集めた。
ここから脱出するためには水依を起こしたほうがいい。起きていても戦力にはならないだろうが、眠ったままでは深琴や鈴子の手が塞がってしまう。
「起きて、水依……お願い、早く！」
薬で眠らされているのか、術で意識を封じられているのかは分からないが、胎内の霊気が一定水準以上になれば生体の自己防衛機能が働いて目を覚ますはず――そう考えて水依の大きな胸に掌を翳し、霊気を送り込んでいるのだが、治癒系の技量はあまり高くない。そのうえ大技を使った直後だから胎内の気が足りず、なかなか上手くいかない。
（焦るな、私……スカスカの気を送り込んでも意味がない。まずは導引術で気を練り込んで、それから水依に送り込まなきゃ……）
深呼吸して経絡に気を巡らせる。丹田で練り込み、掌に集めて、水依へ――。
深琴が必死になって治療している脇を、
「マ、マンディー……マンディー？　どこ……？　どこにいるの、マンディー……！」
涙目になった鈴子がよたよたのろのろ、しきりに首を巡らせながら這って通り過ぎた。触手に弾き飛ばされたクマのぬいぐるみを探しているのだ。
広さは十畳ほどあるが、中央に置かれた寝台以外はなにもない部屋。対して、クマのぬいぐるみは小柄な鈴子がうしろに隠れられるほど大きい。
だから、見失うはずはないのだが――。
「どこなの、マンディー……ッ！」
涙声でクマの名を呼びながら這っていた鈴子は、いつの間にか開いていた扉から真っ暗な廊下に出た。俯いた視界の隅に黒い革靴の爪先が映り――。
「これを捜しているのかな？」
「う、あ……マンディーッ！」
宙に揺れるクマのぬいぐるみを見てパァッと笑顔になり、飛び起きた鈴子だが、
「うぐっ⁉」
次の瞬間柔らかな腹に衝撃を受け、いましがた出てきたばかりの部屋の中へ叩き戻される。
「ッ⁉　どうしたの鈴子……あっ⁉」
足下へ転がってきた小柄な少女に驚き、慌てて振り返った深琴は、たったひとつの入口からのっそりと入ってくるガマガエルのように太った男に気づいて息を呑んだ。
「あ、アナタは……」
「当医院の院長、本郷直毅だ。そういうそちらは、どなたかな？　泥棒にしては少々可愛らしすぎるようだが、しかし日本刀を提げているし……」
「とぼけないで！　アナタ、術師でしょッ⁉」
寝台に横たわる水依を守るように身構えつつ、入口に立つ白衣の男に雷光の切っ先を向ける深琴。
その表情は勇ましいが、胸の内には後悔と焦燥が激しく渦巻く。
唯一の入口である扉から、目を離してしまった。背後から触手に襲われたせいでもあるし、水依を起こすためでもあったのだが、しかしそのせいで、敵にあっさりと接近されてしまった。
そのうえ――。
（気が、足りない……！）
一秒でも早く水依を助けようとして部屋に満ちていた雑魚妖魔を一瞬で焼き尽くしたうえ、わずかに残っていた気力も水依を起こすために使い果たしてしまった。身体はまだ動くし、雷光の素の退魔力も消えてはいないが、
「うーん、そうか。もうバレているか。それでは仕方ないなあ」
ニヤニヤと笑う男からは固まる寸前のタールほどに濃密な、おぞましい妖気が吹きつけてくる。おそらくひとりでは太刀打ちできない。
「鈴子……鈴子ッ！　しっかりして！　私がアイツを引きつけておくから、アナタは呪術で水依を……ちょ、ちょっと鈴子ッ⁉　聞いてるッ⁉」
頼りになるはずの隻眼の少女は、深琴の足下で膝を抱え、涙に濡れた顔を伏せて、ガクガクぶるぶる震えていた。常人離れした霊力を発揮するときに現れる狐耳も九本の太い尻尾も、いつの間にか消えている。どうしてそうなったのかは分からないが、戦

力にならないことは一目で分かる。
（こんなときに……ッ！）
焦る深琴に対し、
「そちらのお嬢さんは、どうしたのかな？　具合が悪そうだ。私が診てあげよう」
ガマガエルのような顔をいやらしく歪めた本郷院長が、一歩前に踏み出す。
「ッ！　ダメッ！　それ以上近づかないで！」
「まあまあ、そう言わずに。見ての通り私は医者だ。目の前に病人がいたら見過ごすわけには……」
言葉が終わるのを待たず、
「キェェイッ！」
気合を発して鋭く踏み込む深琴。
床を掠めた雷光の切っ先が、でっぷり太った男の腹を逆袈裟に切り上げた。
手応えあり――だが、院長はいやらしい笑みを深め、斜めにぱっくりと割れた己の腹を見下ろして、戯ける（おど）ように肩を竦める。
「ほう、見事な太刀筋だ。踏み込みに躊躇もない。若いのに大した腕だな、お嬢さん」
「あ……アナタ……いったい……」
「ふむ？　剣の腕は一流だが、呪術師としての才はそれほどでもないのかな？　まあいい。それなりの修業は積んでいるようだから、そこで眠っているお嬢さんよりは使い道が広かろう」
裂けた腹を押し退けて紅くぬめり光る小腸が溢れ出してくるが、まったく気にしていない。滴る己の体液を革靴の足で踏み、さらに一歩寄る。
「く……ッ！」
気圧された深琴が、思わず退いた。すぐに尻が寝台に当たり、それ以上は退けないが、構えた刀の切っ先が逃げ場を求めてウロウロしてしまう――と。
「うぅ、うぅ……うぅう……」
深琴の足下に蹲（うずくま）っていた鈴子が、ゆらり、と立ち上がった。しかし、闘うためではない。俯けた顔を両手でしきりに拭い、幼い子供のようにグジュグジュと泣いたままなのだ。
「しっかりして、鈴子ッ！」
「だって……だってだって、マンディーが……」
「ま、まん……ってなにそれ？」
「あのオジサンが、マンディーを……」
鼻声で呟きつつ、左手で院長を指差す鈴子。
つられて目を向けた深琴は、院長の右手にぶら下がっているクマのぬいぐるみに気づく。鈴子がいつも胸に抱えている、継ぎ接（はぎ）ぎだらけの大きなぬいぐるみだ。あれがマンディーか。
「んん？　ああ、これかね？」
深琴の視線を辿り、己の右手を見下ろした院長が、ニンマリと笑った。
「そちらのお嬢さんの大切なお友達のようだね。さて、どうしたものか……」
「返してッ！」
叫んだ深琴が手を差し出すと、でっぷり太った男は腹から溢れ出している長い長い腸を揺らし、からかうように両手を広げた。
遠ざかるクマのぬいぐるみを追って、鈴子がふらりと前に進む。慌てて伸ばした深琴の手は、どうしたわけか空振りする。
「そうはいかん。こんなものでも人質になるようだから、簡単には手放せんよ」
「こんな小さな女の子を泣かせて、アナタ、恥ずかしくないのッ!?」
「見た目は小さくても、キミより数段優れた術師だろう？　キミ程度の腕では、私の張った結界網を潜（くぐ）り抜け、ここまで潜入するのは不可能。私が警戒すべきなのは、そちらのお嬢さんだ」
「く、うぅ……あっ!?　ちょ、鈴子……ッ！」
歯噛みする深琴の脇から、隻眼の少女が泣きじゃくりながら一歩前へ。黒ゴスドレスの肩を掴もうとした深琴の手は、またしても空振り。天才を自称するだけあって、無意識に術を使っているのか。
「返して、返して……マンディーを返して！」
ニヤニヤと笑み崩れた白衣の男に向かって、さらに一歩進む鈴子。
「ククク……さぁて、どうしようかな」
意地悪く笑った院長が、右手のぬいぐるみを己の身体のうしろに隠した。つられた鈴子がふらふらと、敵の懐へ近づいていく。
「待って鈴子、それ以上は……ッ！」
深琴の声が焦りに上擦る。
さらに院長に近づくなら、鈴子の小さな背に体当たりして横に弾くしかない――と。
「マンディーを、返してッ！」
涙声で叫んだ鈴子が、右眼の眼帯をはね上げた。
「ぬっ!?　そ、それは……ッ!?」
腹を断ち割られても余裕綽々（しゃくしゃく）だった院長が、たるんだ頬を強張らせて弾かれたように一歩退く。
転瞬――。
「ウロア・マルム！」
叫ぶ鈴子の右眼から、眩い光が迸る。
空っぽの眼窩の奥に刻まれた呪詛回路が、呪文を受けて発動したのだ。
「ギェァァアアア――――――ッ!?」
凄絶なまでの白光を真正面から浴び、断末魔の叫び声を上げながらうしろへ吹き飛ぶ院長。開いたままの扉から真っ暗な廊下へ転げていき、そのまま姿が見えなくなる。
深琴が召喚した八雷神ほどの霊力ではないが、指向性が高いため、威力は十二分だ。並みの妖魔であれば一撃で消し飛んでしまうだろう。
だが、鈴子は再びぐじゅぐじゅと泣き始めた。どうやら、大好きなぬいぐるみを抱いていないと精神

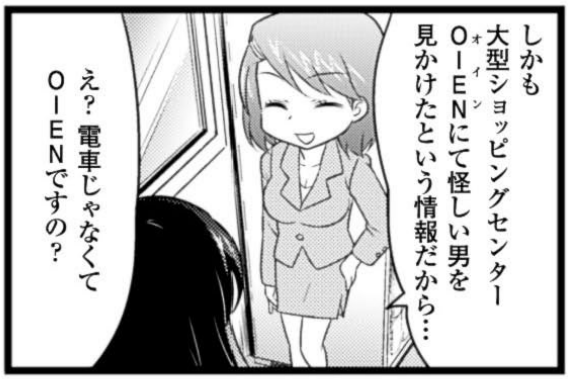
新米捜査員！麗子（れいこ）発動！！

File5

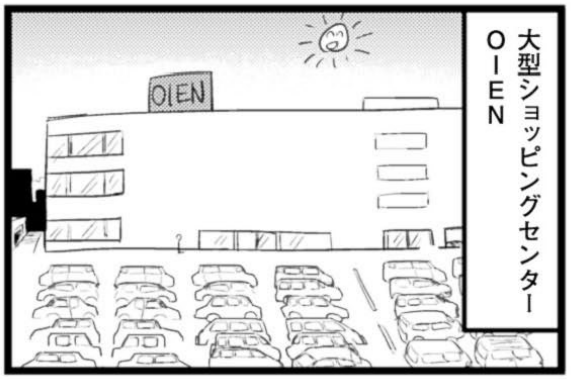
犯罪も捜査もハイテクロボットの時代？

漫画 COMIC／嘉納（かのう）あいら

お久しぶりです！捜査員麗子



先行き不安…



謎の男たち

宇都宮麗子（うつのみやれいこ）
世間知らずで生意気な新米刑事。いろんなキワモノ捜査に参加する。

潤子先輩（じゅんこせんぱい）
麗子の先輩刑事。キワモノ捜査を麗子に回す張本人。

記念撮影!?

はーい♡
そんなわけでぇ♡
ゆるロボくんとの
ファッション
チェックー
ハイ♥チーズ!!
大成功♥
クリ
ピピッ

どうもありがとう
ございました~♡
ジー
いい画が
とれたわよー♡
あこれ僕の名刺ね♡
今度Telして♡
ハァ…

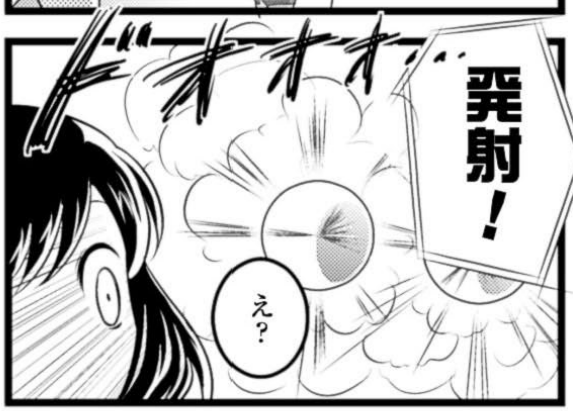
あっ♡
そこのおじょうさ~~ん♡
何アノロボトチガウ
『パックリ』でおなじみ
ファッションチェックの
バン・小錦よぉ~~♡
ヤダ~ッ

間違いなく
アイツですわね…
サイアクですわ…

思わず…(1)

番組と偽って
ゆるキャラを利用して
女性に痴漢行為を
するとは…
ジャキン!
絶対に
許せませんわ!!

ひとまず
あとをつけて…
現行犯逮捕ですわ!
キュルルルル…
照準OK


発射!
え?

チョット
ズレマシタ

しっかり録画しておけ

ルキウス殿には後日まとめて送ってやろう

監獄戦艦3

熱砂の洗脳航路

PRISON BATTLE SHIP 3
BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

episode 07 最期の渉外任務

母娘とも立派なアクメ尻！

漫画 COMIC／楠木（くすのき）りん

原作／Anime LiLiTH

は！それと艦長…

昨日の下士官に尋問した所

視察の際にベアトリスに買収されて情報を提供したそうです

やはりなそれでそいつは何を喋った？

緊急時の体制について話したようです

どうも魔女親子は海賊について随分懸念している様子で

もし『海賊に艦橋を乗っ取られた』時の対応を喋ったと

艦橋を乗っ取られた時の対応だと？

その場合は――

ちっそういう事か!!

艦長!?

わからんか!?

こいつらはこの船を掌握できるサブシステムを知ったのだ!!

予備とはいえそこからだと船のコントロールが可能だ!

医療室…

コントロールするサブシステムは全てそこに…

そうだ! 今朝も薬が欲しいとか言ってまた行ってたぞ!

お お待ちを…

艦長! ナビゲーションシステムがロックされています!

クックックッ

くそ…っいつの間に小細工を…!

それではこの船は舵を取られたという事か…

奴ら装甲騎部隊とぶつける気だぞ

ザワ

さすが女帝と死神

そうでなくては面白くない

艦長…どうしましょう…
諸君案ずるな
この身体諸君達の働きによって
もはやまともに動く事もできないほど堕ちきっている!!
装甲騎部隊が急襲するまでに時間はある!
それまでに洗脳改造を完了させれば我々の勝利だ!
イエッサー!!

――リブラ到着まであと９日
航海５日目の朝
ハァ…ん…んぅ…！
…っん…！
コツ
コツ
クク…洗脳改造の影響がはっきり現れてきたな
まあ全てクリリングのせいだと思ってくれるだろう
ビクン
ビクン
…さてこの辺にしましょうか
こ…こんな所で!?
む無理よ！もし誰か来たら…
おや？さっきは最後の取引という事で承諾して下さったじゃありませんか
キョロ
…っ！そうだけど…
……
本当にこれで最後ですね!?
ええ 約束は守りましょう
ビクン
ビクン

おしっこする所が見たいなんて…変態だわ…！

下着ははいたままでお願いしますよ

小便を垂らしている股間が見えなければ意味が無い

ぐぅ…！変態…！

足を開いて

くっ!? そのままでも見えるでしょう!?

プルプル

軍人でありながら淫らな下着をつけてますね

…っ！黙りなさい！

その手は頭の後ろへ

くそ…！

侮辱は許しません！

ザッ

おっと

せっかくですからコレも付けましょう

きゅっ

首輪!?

いいですなぁこれは！まるで雌犬みたいだ！

ブルブル

貴様ぁ…こんな恥ずかしい格好をさせて…!!

さあ早くしないと人が来ますよ？

わ…わかってます！

けど…おしっこすると私…

けどなんです？

……ッ

ななんでもありません！

し…します！

ブルッ

じわぁ。

くふぅぅ！で出るッ！おしっこ出ます…！

ふひッ!? んんんー!!
いひい! んんんんッ!!
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
おおこれは!
まさかお漏らししながらイってるのですかな!?
うひッ! ち違…んいいッ!!
ふぐんんん!!
ポル
ポル

単行本は初夏に発売予定!!
淫欲スライムとの最終バトル!?
それでもやっぱり衣装はバニー!
爆乳バニー
宇佐美マリア
美艶探偵の怪淫事件簿
最終話 オークションは混沌への序章
小説/NOVEL 山本沙姫(やまもとさき)
挿絵/ILLUSTRATION こうきくう

「くっ……んんっ、はっくぅっ……」

七色の光が飛び交うステージで、長い金髪を靡かせた肌もあらわな美女が舞う。天高くそびえるステンレス製のポールに、華奢な両手でしがみついて。

「あぅぅっ、はうんっ……」

苦しげに荒い息を吐きながら、客席の男たちを惹きつけるパフォーマンスが片時も休まず続いていく。

薄桃色に染まったムチムチと張りのある太腿でポールを挟んで、身を大きく仰け反らせて回転したり、前屈みになり、挑発的に突き出したロケット爆乳の谷間に鉄棒を挟み、客席に向けた大きな桃尻を振ってみせたり。

時折浴びせられるピンクのスポットライトと、スローテンポなエレキギターが奏でる気怠い雰囲気を漂わせた音楽が、舞姫の艶めかしさをより一層引き立たせていた。

だが、彼女はプロのポールダンサーではない。天才科学者にしてオカルト小説のヒットメーカー。そして怪奇事件専門の名探偵、宇佐美マリアである。

（まさか、こんなこと……させられるなんて……）

人間に憑りつき、奇妙な事件を起こす粘液生物〝エムザヴ〟と戦い続けてきた彼女は今、これまでにない危機に立たされていた。

登場人物紹介

宇佐美マリア

人気オカルト小説家にして、怪奇事件を解決する敏腕探偵。身体を淫らに穢されながらも、エムザヴに立ち向かう。

道明寺美茶

マリアをライバル視する、ライトノベル作家。自身が巻き込まれた事件をきっかけに、エムザヴとの戦いに参戦した。

漁火空也

マリアの生活の全般を支える、アシスタントの青年。エムザヴ絡みの事件では、マリアと別行動をとることが多い。

大滝

空也の叔父で、警視庁のベテラン警部。エムザヴの関与が疑われる奇怪な事件の情報を、マリアたちに伝えている。

前号までのあらすじ

憑りついた人間の意識を乗っ取り、身体さえも作り替えてしまう寄生生物・エムザヴ。高い知能を持ち人類に害をなす彼らを追うマリアであったが……。

ライバル作家にして、一国の軍事機密すら手玉に取る情報力を持つ名家の令嬢、そして怪奇事件調査の協力者である道明寺美茶。彼女が部下に発見させた敵の拠点とおぼしきショーパブに、二人で潜入調査を試みたものの、不覚にも捕らえられてしまった。

そして相棒を人質に取られたマリアは、彼らが夜な夜な開催する、いかがわしい裏のあるダンスショーへの出演を強要されているのである。

（おまけに、ご丁寧に素敵な衣装まで用意してくれて……女を嬲るのが好きって、人間じゃないくせにあいかわらず厭らしい男みたいなメンタルしてる……）

ポールダンス自体は、かつてダンサーが悪霊に憑りつかれるオカルト小説を書いたときに、参考のためダンススクールに通っていたのである程度踊ることはできる。しかし用意されたコスチュームが、根は恥ずかしがり屋な彼女にとっては過酷すぎるものであった。

気恥ずかしさで火照った肉付きのいい体躯に纏うのは、胸元から臍にかけて大きくV字型に切り込まれた、黒革製のボンデージスーツ。胸のカップから臍の上まで、左右の生地を繋ぐ紐は細く、激しい動きで千切れて中身が飛び出してしまいそうなほどに危なっかしい。

（それにしても、こんなにずり上がってきたら、あそこが……）

肩や長い腕は剥き出しで股間を覆う部位は鋭角的に切れ上がり、敏感な秘所を容赦なくキリキリと締め上げる。黒い網タイツを穿いていなければ、ほぼ裸同然と言っていい姿。

柔らかい太腿をキュッと締め付けるのは、黒いエナメル製のブーツ。さらに頭には、黒く長いウサギの耳を載せている。

『どうやらキミは、このバニーガールという服装がお気に入りのようなのでな、用意しておいたよ』

コスチュームを手渡してきた、エムザヴに憑りつかれた中年男の下品なニヤケ顔が脳裏に浮かび、剥き出しのなだらかな背中にゾクッと寒気が走る。

「さーて、ますます盛り上がる金髪爆乳バニーのセクシーダンス。心ゆくまでご堪能くださぁ～い」

その忌むべき男は、眼下でマイク片手に調子のいい口調でショーをひたすら盛り上げていた。白いタキシードにマントとモノクルという、実に怪しげなスタイルで。

（いい気なものね、わたしにこんなマネさせたこと、かならず後悔させてやる！）

屈辱的なセクシーダンスを踊らされつつも、美貌の超科学探偵はいつか反撃に転じようと、頭脳をフル回転させて手段を企てる。

とはいえ潜入してからずっと、唯一エムザヴに対抗し得る武器を起動させているのに効き目が出ていなくては戦いようがなかった。

胸の谷間に隠した、彼ら粘液生物が嫌う超音波を発生させるロザリオ型探査機。同じ弱点を持つゴキブリやネズミが苦しみながら這い出てこないところから、施設内に超音波を中和する装置が仕掛けられているのは明らか。

（……！　あのパラボラアンテナみたいなやつね。あれをなんとかして壊すことができれば……）

常人なら目を回して倒れそうなほどの勢いで回転しながらも、マリアは周囲の観察を怠らない。彼女の鋭く吊り上がった赤い瞳は、ついに反撃の糸口を捕らえた。

（それにしても、空也は何やっているのよ？　信号出してそろそろ二十分はたつのに……大滝さんと違ってここ一番にホント弱いんだから、あいつは……）

いつもは何かと頼りになる警視庁の敏腕警部は、先日彼の甥が捕らえたテロリストの仲間を捜索する

のに忙しく、今回の調査には協力できない。
だが、万一の備えは万全に用意してある。
幸いバニースーツへ着替えるときに見張られていなかったおかげで、通信機を使って緊急信号を送ることができた。しかし、助けに来るはずのアシスタントが一向にやってくる気配がない。
キュッキュッキュッキュッ……。
（！　なっ、何？　今のは……）
なかなか姿をあらわさない相棒に不満を漏らしたそのとき、汗ばむ肉体に異様な感覚が芽生える。股に挟んだポールで秘所を覆う黒革が擦れ、甲高い悲鳴を上げるたびに女唇に強烈な痺れが起き、産道から子宮めがけて甘美な刺激が駆け抜けていく。
（う、うそ……こんなの……変……恥ずかしいのに、あそこが、疼くなんて……）
これ以上股間を擦るのは危険と察知したマリアは、咄嗟にポールを股から離し、代わりに曲げた片膝を引っ掛ける。フロントフックと呼ばれるスタイルに切り替えて回り続けるものの、セクシーなダンスが押し付けてくる刺激は股の間にだけではない。
ブルンブルンブルンッ！
「はぁっ！」
勢いよくポールを回る遠心力で、瑞々しいスイカを髣髴とさせる爆乳が大きく波打つ。ニプレスを渡されなかったせいで黒革のカップに直接触れる薄紅色の乳首が軽く擦れ、固く勃起していく。
（む、胸が……すごく、ジンジンして……）
うっすらと汗の浮いた柔らかな乳房の皮下を、羽根箒で擦られるかのようなくすぐったさが駆け巡る。さらにそのむず痒い刺激は、野火の如き勢いで黄金色の若芝で薄く覆われた丘めがけて駆け抜けた。
「あふうんっ！　こっ、こんな……こんなのって……」
艶やかな薄桜色の唇を開き、艶めかしい吐息と共に気怠い呟きが漏れる。陰毛に火を点けられたかのように、股間が熱い。胸の鼓動も徐々に速くなり、湯あたりしたときのように頭がぼやけていく。
（恥ずかしいことさせられて、こんな気持ちなんて、おかしい。あるはずない……これも、きっと、あいつらの……妙な特殊能力の……せい……）
論理的に説明できない、認めがたい肉体の疼きを、爆乳科学者は懸命に否定した。
寄生生物エムザヴには、憑りついた人間の知識や願望といった意思をくみ取り、具現化する能力がある。おそらく、周囲から邪な視線を投げかける観客たちが抱く、金髪バニーの豊満な肉体を好きにしたいという淫欲が力となって、我が身を責めているのは間違いない、はず。
「うーむ、実に見事な身体だ」
「あのスーツの下を、是非とも味わってみたいぜ。上から下まで、たっぷりと……」
美貌の天才名探偵の推論を裏付けるかのように、そこかしこから耳障りなヒソヒソ話が聞こえてくる。
（好き勝手言ってくれて、今に見てなさい！）
臆することなく欲望を口に出す邪悪なギャラリーに憤りつつも、黒衣のバニーガールは舞い続けた。
「んくっ、んんんんん……」
極力柔肌にかかる刺激を押さえようと、ポールには手と膝裏だけでしがみついて、スピードを落として回り続ける。
キュイッ！
「あんっ！　ま、また、こんな……」
しかし一度身体中に燃え広がった快感の炎は、勢いがまるで衰えない。股間どころか、身体のどこが擦れても強烈な痺れを生み出し、皮下の奥底まで焼き焦がす。
「ほほう、ますます感じているようだな。厭らしい顔をしている……」
「いいぞー！　もっと悶えろー」
邪な観客の熱い視線と野次が、恥ずかしがり屋のセクシーバニーダンサーをさらに追い詰める。
（いっ、いったい、いつまでやらせる気なの……）
終わりの見えない恥辱の舞いに、クールで気丈な天才科学者もさすがに気力が衰えてきた。もはや反撃する手立てを考える余裕もない。
（これ以上は、もう……）
秘密の花園の奥に隠された桜色の陰核が徐々に充血して赤く染まり、薄く生え渡る黄金色の若芝を隆起させるほどプックリと膨らんでいく。
プジュッ！
（あ……）
ついに女体の最も敏感な部位は刺激に耐えきれなくなり、震える肉のクレヴァスの奥底から、ひとしずくの粘蜜が滴り落ちた。
「くっ……」
反射的に艶やかな唇をギュッと噛みしめるマリアは、つい動きを止めてしまう。
「おおっと、これはどうしたことかー⁉　金髪バニーちゃん急に止まってしまったー！　ここでダンスをやめたら大変なことになってしまうぞー！」
すると、舞台上の司会者は鋭い視線を送りながら、マイクで煽り立ててくる。踊り続けなければ人質、美茶の身に危機が及ぶと暗に言っているのだ。
「そうそう、もっといいとこ見せてくれよー」
客席からの下品な野次が、絶体絶命の爆乳バニーをさらに追い立てた。
（そんな……今動いたら……）
ポールにしがみつき、ジッと身を固めるマリアは下腹部の中を駆け巡る嵐が治まるのをひたすら待つ。
今にも弾けそうなほどに充血して膨らんだクリトリスから、尿道を伝って膀胱めがけて強烈な電撃がとどまることなく流れ続けている。内股に力を入れ

て秘割れを閉ざし、かろうじて決壊を防ぐものの、徐々に感覚が麻痺してきていた。

このままでは、大勢の男たちが見守る中での失禁は免れられない。

「仕方ないですなぁ～。こんな中途半端なところで終わらせるというのなら、控室の相方さんに罰でもあたえないといけませんかなー」

すると業を煮やした司会の中年男が、厳つい表情で驚くべき選択を突きつけてきた。

（罰!? 道明寺に何をするつもり……）

何しろ相手は、人ならざる奇怪な生物。このまま従わなければ、それこそ相棒の命にかかわるような事態にすらなりかねない。

ジュッ……。

「くうっ！」

だが、すでに限界を超えつつある尿意もまた、彼女を容赦なく責め立てる。パンパンに膨らんだ膀胱が小刻みに震え、恥ずかしい瞬間の訪れが刻々と迫るのを告げてきた。

（……やるしか、ないのか……）

観念した舞姫は固く目蓋を閉ざし、ポールを握る手に力を込め、身体を大きく揺らして勢いをつけて再び回りはじめようとする。

スルッ！

「えっ！」

だが、長きにわたってポールを掴んでいた手の平が表皮に浮き出た汗のせいで滑り、彼女は板張りの舞台めがけて落下した。

ドスッ！

「あひぃっ！」

柔らかな桃尻を床に打ち付けた衝撃で、尿意を堪えるべく内股に入れていた力が一気に緩む。

（もう……だめ……）

プシャァァァァァァァァ――――！

下腹部の奥底で膀胱が急激に萎み、限界を超えて溜まっていた小水が容赦なく溢れ出した。

「いやぁっ！ 止まってぇっ！」

混乱したマリアは悲痛な叫びを上げ、真っ赤に染まった顔を俯け大粒の涙を散らしつつ、咄嗟に両手で股間を押さえる。しかし一度噴き出した生暖かい黄金色の液体を押しとめることはできない。

「ありゃー、やっちゃったねーバニーちゃーん」

「いいねーその仕草。エロ可愛いぞー」

足元に巨大なはしたない水溜まりが広がっていくのを見て、観客たちは歓喜の声を上げて壇上の舞姫をさらに辱めた。

（こんな恥ずかしいことさせられて……もう、生きていけない……）

「それでは皆さま、これ以上の演舞は無理なようですので、オークションへ進みたいと思います。お手元の端末でご入札のほどよろしくお願いいたします」

ガックリと肩を落として項垂れるマリアのぼやける耳に司会者の嬉々とした声が突き刺さる。

（入……札……）

顔を上げ、潤んだ瞳で辺りを見回すと、ステージ後方に立てられた巨大モニターに数えきれないほどの数字が躍っているのが見えた。邪悪な観客たちが皆一様に、手にしたタブレットを叩いている。

『どうやらあのエムザヴって奴ら、さらってきた女の子に厭らしい見世物をさせた後でオークションにかけているようですわね。実験材料として……』

敵に関する情報を持ってきたときの美茶の言葉が、不意に頭をよぎった。

（……このまま、わたしに受精実験、させる気か！ そんなこと、させない！）

身を汚され、一度は傷心の沼に沈んだ邪悪な怪生物への闘志が、怒りと共によみがえる。

カンカンカン……。

「それでは入札額が出そろいましたので、上位三名さまには、これなる爆乳バニーの豊満な身体でお楽しみいただきま～す」

そのとき、どこからともなく木槌を打ち鳴らす音が響くと、司会者はマイクで客席に呼びかけた。

「ちぇー二番手かよ。けっこう張り込んだんだがなぁ～」

「まあ二位ならいいじゃないですか。とりあえず雌穴が使えるんですから」

すると舞台上に、下品な笑みを浮かべた髭面の太った中年男と、眼鏡をかけた知的な雰囲気を漂わせる美青年。という対照的な組み合わせの男たちが上がってきた。

意味ありげな笑みを浮かべつつ、床に座り込んだ黒衣のバニーガールの前に立ち並ぶ。

（何、こいつら……）

ギラついた目から放たれる、全身舐め回すようなネットリとした視線に、汗ばむ柔肌が鳥肌立つ。

「それじゃバニーちゃーん、こっちにそのデカいケツを向けて、たかーく上げて四つん這いになってもらおうかなー、こいつを突っ込んでやるからねー」

目尻を下げただらしない表情で呼びかけながら、髭男はズボンをブリーフごとずり下ろし、青筋を稲妻のように這わせていきり立った男根を曝け出す。

「くっ……」

腰を前後に振り、わざとしならせて見せつける赤黒い一物は、デコボコした表皮とあいまって思わず目を背けたくなるほどの醜悪な姿。しかし弱みを見せまいと、美貌の爆乳探偵は目尻を吊り上げて激しく睨みつける。

「いけないなーそんな顔しちゃ。お客さまの言う通りにしないと、お友達がたいへーんなことになっちゃうよぉ～」

著者近刊 『お姫さまといっしょ どきどき同棲ライフ』『お嬢さまといっしょ 麗華とミリアとママいいとこどり』『らぶおん 湯っくりしていってね』『らぶせん 風紀委員長とヤンデレ娘?』『コスって! 声優しすたーず』 好評発売中！

すかさずマイク片手のマント男が、厭らしいニヤケ顔で脅しをかけてきた。
「だっ、黙れ！」
反射的に彼へ矢のように鋭い視線を飛ばすものの、今はまだ太刀打ちできないマリアは渋々髭面男に背を向ける。そしてゆっくりと両手を床につき、頬を床に押し付けてスベスベの桃尻を高く掲げた。
「いいねぇ～、実に美味そうだ」
身を屈め、単二電池ほどはありそうな太い指で柔らかな双曲を鷲掴みにすると、大男は左手の人差し指で、尻の谷間に食い込む黒革を脇にずらす。
「きゃあっ！」
人目に晒されることなどまずない、秘密の谷の奥底でひっそりと咲く美しい紅色に輝く乙女の菊一輪が、邪な欲望を滾らせた男の目の前に引き出された。
（み……見ないで……）
生温かい息が、最も恥ずかしい部位へスンスンと吹きかけられているのがわかる。興奮して荒くなった鼻息がかかるほど、顔を間近に近づけているに違いない。
おまけにTバックをずらしたのに引っ張られる形で、股間のVゾーンを覆う黒革が、鮮やかな黄金色の若芝がはみ出すほど深く秘割れに食い込む。
「くうぅぅっっっ……」
鈍い痛みが乙女の急所を襲い、恥ずかしさで真っ赤に染まった美貌が歪む。
「いいねぇー、こーんなきれいなケツの穴、見たことがないよぉ～」
上擦ったダミ声で話しかけられたかと思うと、突然肛門に何かガサガサしたものが触れるのを感じる。
「ひぃぃぃっ！　なっ、何！　いきなり……」
思わず短い悲鳴を上げてしまったマリアは、恐る恐る振り向くと驚くべき光景を目の当たりにした。
「んくっ、んっんっんっ……」

中年男がひび割れた唇を菊座に押し付け、皺を擦るように表面を這い回らせていたのだ。おまけに固い髭が双曲の谷間を擦り、どうにも痛痒い。
「なっ、何をするのっ！　このヘンタイ！」
つい人質を取られているのを忘れ、反射的に金切り声を上げて貼りついた髭男を振り払おうと柔らかな巨尻を左右にプルプルと揺らす。
「ええーいっ！　暴れるんじゃないっ！」
ギリリリッ、ジュブジュブッ！
刃向う大尻娘を押さえ付けようと、髭面男は左の親指をアナルへ強引に押し込む。
「ひうっ！」
キュッと窄まった菊座の中心から蟻の門渡りを経て股間、さらにヴァギナの奥底めがけてむず痒い痺れが駆け抜けた。
「ふうーん、なかなか感じやすいケツアナしてるなぁ～。ならば、こんなのはどうだい？」
思わず背筋をビクンとはね上げてしまうマリアの背後で、楽しげに話しかけてくる中年男は、さらにもう一本の親指も尻の中へ滑り込ませてくる。
グニッグニッグニッグニッ……。
二本の太い指で、乙女の菊華を引き裂かれるかと思うほど大きく割り広げられ、第二関節までを直腸内に押し込まれて中をかき回される。
「くっ、ひっ……あっ……」
容赦のない肛門への攻撃の痛みと不快さに、思わず漏れそうになる悲鳴をグッと噛みしめ、手足を床に踏ん張ってマリアは懸命に堪える。
（さ、裂けちゃう……こんなことされたら……）
「げへへへへ、そんじゃそろそろ、入れさせてもらうとするかな～」
ニュブッ……。
ようやく鈍い音を立てて指が引き抜かれると、菊門のまわりを渦巻いていた痛みが引いていく。

「はぁっはぁっ……え、な、何！」
グチュッ！
だが入れ替わりに、スベスベの尻には裂けそうなほどの痛みが、そしてアナルにはアイロンでも押し付けられたかと錯覚しそうな熱さが襲いかかる。髭男は火照ったヒップを掴んだまま、固く膨れ上がった亀頭の突端を菊門に押し付けた。
「んっ！」
燃えたぎる亀頭の熱さと、すでに滴りはじめている先走り汁の粘り気がもたらす不快な刺激が、蟻の門渡りから背筋へ駆け抜け、思わず柔らかな肉体がビクビクと震える。咄嗟に括約筋に力を込めて肉門を閉ざし、醜悪な肉槍の侵入を遮った。
「ふふふ、まだ抵抗するなんて可愛いもんだな。だけどその頑張り、いつまでもつかなぁ～？」
ペロリと舌なめずりをして囁くと、髭男は柔らかなヒップを真っ赤な手形が付くほど強く握り、腰をグイグイと突出しはじめた。
グリッ、グリッグリリリッッッ……。
「ひっ！　ひぃぃぃっっっっ！　ひ、広がる……お尻が、あうっ！」
いくら肛門を引き締めても、無遠慮に突き出される固い極太の男根の進撃には歯が立たない。滑り気を帯びた亀頭が菊座を強引に押し開き、左右に捻りながら捻じ込まれる。大きく開いた固いエラが、直腸壁をコリコリと擦りつつ、女体の奥底へ進んでいく。
ズルッ！
「いっ、いゃぁっ！」
やがて肛門のまわりに、チクチクと細く固い繊維状のものが幾本も触れるくすぐったい刺激を感じ取る。巨根のすべてが直腸の中に入り込み、ゴワゴワと固い股間の剛毛が、尻穴の縁を軽く突いていた。
「おいおい、さっきはあんなに広がったんだ。これ

ぐらい難なく飲み込めるだろう？」
呆れた口調で呼びかけながら、髭面男は腰を引き、アナルに突き立てたペニスを引き抜いていく。そして、エラが肛門の縁へ差し掛かったところで再び下腹部を突出し、直腸内へ一気に突き込む。
グリュッブリュッブルンブルンッ！
ゆっくりとした力強いピストン運動で、巨大な雄蕊が体内を弄るのに釣られて、床に這いつくばる爆乳金髪バニーの汗ばんだ肉体が大きく揺れる。
「あっあっあっ、あうんっ！　こっ、壊れる……お尻が……こわれ、ちゃうっ、あぅんっ！」
排泄では感じることのない、強烈な拡張感が肛門を襲う。だが同時に、それは不可解な感触も生み出していた。
膨れ上がった男根を、隙間なく詰め込まれた紅色の肉菊華。秘所同士が擦れる摩擦が生み出す熱さが、妙に心地いい。
「くふぅっ、あっ、あんっ……」
大勢の男たちにはしたない姿を晒しているにもかかわらず、自然と淫らな喘ぎと吐息が口を衝いて出てしまう。
しかも尻穴を焼き焦がす熱は内股の切れ上がりを駆け抜け、湿り気を帯びた秘唇の中まで伝わっていく。陰裂に食い込む黒革の下で、水気を帯びて膨らむ肉真珠までもが火照り、ビクンビクンと小刻みに痙攣しはじめる。
（ど、どうしてこんな……あるわけ、ないっ、こんな……こんなこと……）
頭で否定しても肉体が拒むことを許さない、危険な快楽の扉が脳内で少しずつ開き、薄桃色に染まった肌もあらわな爆乳バニーの全身に広がっていく。
「すごいな、あんなにしっかり咥え込んで」
「まったく羨ましい。もっと入札額を上げておけばよかった……」
すると不意に、そこかしこから悔しそうに呟く男たちの声が聞こえてくる。
（いったい何が……あ……）
気になって顔を上げてみれば、オークションの入札に使われた巨大スクリーンにあられもない我が身が映し出されていた。いつの間にか司会者が、手にしたカメラで様々なアングルから辱められる姿を撮っていたのである。
開いた股の下から肉棒を押し込まれた肛門を見上げたり、鷲掴みにされたでん部に毛穴まで写りそうなほど肉薄したりと、淫欲にまみれたレンズが全身を舐め回す。
「なっ、何撮ってるのよおっ！」
咄嗟に金切り声を上げて邪悪なカメラマンを睨みつけるものの、いくら凄んでみたところでお尻丸出しの姿で這いつくばっていては、威圧感も何もない。
「おおーやっと気づきましたかバニーちゃーん。怒った顔もなかなかキュートですねぇー」
ささやかな抵抗を嘲笑い、厭らしく口元を歪めた邪悪なカメラマンは、ますます挑発的に恥ずかしい姿を撮り続ける。
「やっ、やめろおっ！」
「さて、そろそろわたしの相手もしていただきましょうかねぇ」
司会者と尻に貼りつく髭男に気を取られているうちに、正面に立つ眼鏡の優男はズボンを脱ぎ捨てて、臨戦態勢を整えていた。痩せた体躯に不釣り合いな極太ペニスがそそり立ち、大きくしなる。
ブビュルルルルッッッッ！
「ひっ！」
すると陰嚢の付け根辺りから、死んだイカを髣髴とさせる生臭い腐臭を放つ二メートルほどありそうな軟体が数えきれないほど飛び出した。その中でとりわけ長い一本が、のたうつヘビのようにマリアの下腹部に迫る。
（こ、こっちに入れる気⁉　そんなことさせるか……）
股間の肉割れに潜り込もうとしていると察知したマリアは、咄嗟に内股に力を込めて、邪な肉欲の塊の侵入を防ごうと備えた。
ギリリリリッ！
「んんんっ！」
股間に挟まったボンデージスーツがさらに深く食い込み、鈍い痛みが敏感な秘所を襲う。
「おおお、そんなにしがみつくほど気に入ってくれたか。よーし、もっと強くしてやろう」
釣られて肛門が引き締まり、急所を絞り上げる刺激が増したのに悦ぶ髭面男がさらに肉穴の感触を深く味わおうと、前後に揺らしていた腰の動きに左右への捻りを加えてきた。
「いぎぃいいっ！　そ、そんなに、強く……あぐぅんっ！」
ピチュッ！
ますます激しく尻の中で暴れる大蛇にマリアが混乱しているうちに、前から迫るもう一匹は股間ではなく、意外にも臍に貼りついた。
「はうっ！　なっ、何する気⁉」
腹部を触手で貫く。オカルト小説のワンシーンのような恐ろしい事態が頭をよぎり、サッと顔が青ざめる。
ペチョッペチュッミチュッ……。
だが、ビクビクと脈打つ赤紫色をした軟体の先端は縦割れの小さな臍を軽く小突き、そのまま生暖かい粘液を塗り付けながら腹部を這い上がって、胸の谷間に下から潜り込む。
「ひぃっ！　き、きつ……い……」
ただでさえ肉体をピッチリと締め付けるほどフィットしたボンデージスーツの中に巨大な異物が入っ

新たな精霊装甲を求めるフィオナ。
淫祇邪教の妨害を受けながらも、
高名な鍛冶職人・ニナ＝ハーボックを
訪ねるのだが、そこで麗しの皇女は、
淫らな告白を強要される！

イセリア英雄戦記

the legend of the Iserya war

第36話 反撃の燐光

小説／NOVEL 壱状什（いちじょうじゅう） 挿絵／ILLUSTRATION 牡丹（ぼたん）

フィオナは自らが戦うための精霊装甲を作り直すべく、クアール大同盟の代表への挨拶もそこそこに、都市スラルドを目指していた。

スラルドに居を構える工匠ハーボック。長命種であるドワーフの職人に会うのが目的だ。

「ではフィオナ皇女もハーボック氏本人にお会いしたことはないと」

「ええ。元の精霊装甲は母から受け継ぐ際に、わたくしに合わせて仕立て直したものでしたから。ドレスの寸法をお渡ししただけで……」

高名な職人と言えど他国の民だ。直接皇女の背中に回らせるのは如何なものかと判断されたのだろう。

「なるほど。直接の面識があれば話も早いと考えたのですが。裏返せば。そうまでしてでも公国が力を求めた人材ということですね」

白麗（ビャクレイ）は淡々と語り、自ら幌馬車の手綱を握る。左右を固めているのも十名に満たない手練の武術家のみだ。

魔王軍の目を欺くべく人数は最小限に抑え、服装もフィオナは質素なチュニックとスカート、白麗は古ぼけたローブで身体を覆っている。

「申し訳ありません、白麗姫様にこのような真似をさせてしまって……」

「仕方ないでしょう。何しろジュダ様が見ての通りの有様です」

白麗は気にした風もなく振り返る。フィオナにしがみついて豊乳に顔を埋めているのは、褐色の王子ジュダだ。

「今の王子にはフィオナ皇女しかいませんから。当然の役割分担ですよ」

男として母を支え、国中の女という女を性奴隷として愛した魔性の少年は、築き上げてきた己のすべてを覆され、すっかり打ちひしがれてしまっていた。

「う、うぅ……」

いつもの性的なスキンシップとは異なり弱々しく縋りつく姿は、実年齢よりも幼く見える。正義感の強いフィオナが放っておけるはずがなかった。

「わたくしがそばにいますから」

だがフィオナの声も意識にまでは届いていないのか、廃人王子は光のない瞳で何事かを呟くのみだ。

「あらあら。妬けますこと」

ベッドの上で苦手意識を植えつけられたからか、ジュダも白麗に縋ろうとはしない。フェイエンの美女の茶化しにフィオナは目を白黒させた。

「わたくしはこの方を放っておけないだけです。困っている方を守りたいと……」

「たとえば。今のままのほうが世のためになるとしても？」

「そうだよ、お姉ちゃん。こんな奴甘やかす必要ないってば」

女性と見れば性奴隷にしようとする鬼畜少年が大人しくなれば、毒牙にかかる被害者も激減するだろう。お気に入りの爆乳を独占されたルシィフも尻馬に乗って口をとがらせる。

だがフィオナは首を横に振った。

「それでもわたくしには、このままでいいとは思えません」

「ふふ。王子が腑抜けたままでは悪戯してもらえませんものね。私も何だか物足りなくて」

「そ、それは……っ」

否定しなくてはならないはずのからかいに、フィオナはしかし顔を赤らめて口ごもる。陵辱の末に淫らに躾けられた媚体は、幾度も胎内で味わった肉棒の味を勝手に反芻し始めた。

百戦錬磨の武術姫は、無意識に太腿を擦りあわせるイセリアの皇女を微笑ましく見守り――気配に、気付く。

「失礼ながら問答はここまでのようですわね」

一方的に会話を打ち切り、馬車を止めた。フィオナもそれを責めはしない。いつしか空気そのものが重さを増したような、濃密な気配が頭上に垂れ込めていた。身を乗り出して見上げる。

「ええ、空が急に曇って……あれは、パイラバイラを占領した魔族⁉」

「この威圧感。それだけではないでしょう。おそらく魔王の側近クラス……」

冷静に分析する白麗の視線の先には、闇の翼を広げたオークの軍勢があった。

それは飛行しているのではない。闇色の雲に包まれて、オークたちが運ばれているのだ。

「残念ながら見つかってしまいましたね。戦闘準備！」

変装用の古ぼけたローブを脱ぎ捨てれば、露わとなるのは豊満ながらもしなやかに鍛え上げられた肢体だ。淫らな拘束衣にも似た漆黒の衣装は、鍛えた武術と房中術をいかんなく発揮するための特注品である。

「ジュダ王子、すぐ戻りますからね」

白麗の号令で護衛の武術家たちが構えを取り、気を練り上げる。フィオナもまたジュダを宥め、馬車を降りた。

「グブ……」「ブグゥ……」

くぐもった鳴き声のオークたちがボトボトと地面に降着する。自主的な降下ではなく無造作に投げ落とされたのか、中には着地に失敗し、他のオークに踏みつけられる者もいた。一様に獰猛な本能すら抑制されているようだ。

『見ツケ……タゾ、力宿セシ皇女』

数体のオークがたどたどしく言葉を紡ぐ。統一された意思が群れを丸ごと支配していることが見て取れた。

「ブグゥ……」「グ、ブ……」

「ハァァッ！」「ハイィィッ！」

戦いが始まる。精鋭武術家たちの気光を込めた突きが、蹴りが動きの鈍いオークを貫き打ち倒すが、闇に浸された怪物たちは緩慢ながらも倒される度に立ち上がる。まるで不死身だ。

「このままではキリがない。おそらくは。漂う霧こそが正体」

推測しつつ拳を握る武術姫に、フィオナが並び立った。

「ここはわたくしが浄化を！」

「ボクも手伝うよ！　かっこいいところ見せなきゃね！」

ルシィフも飛び出し、魔力を解放する。詠唱する公国姫は高まる力に妖精

のアシストを上乗せし、空の魔族へと光を解き放った。
「サンク・ブリーズ！」
神聖魔法が胸元に浮かぶ妖精の力で矢の形に圧縮され、暗雲の中心に突き刺さる。
「やったぁ！」
「いえ……」
ルシィフの快哉を白麗が否定する。言葉を裏付けるように、闇色の霧の中心に突き刺さった光矢はみるみるうちに拡散し、消失していった。フィオナの表情が無力感に沈む。
「やはり、精霊装甲がなければ魔族は倒せない……せめてジュダ王子が立ち直ってくれれば」
「敵もそれらを警戒して側近を差し向けてきたのでしょう。ならばここは私たちが引き受けました。フィオナ様は先を急ぎなさい」
白麗のしなやかな蹴りが、フィオナの背後に迫った憑依オークの顎を打ち抜き、きりもみ回転させる。
「しかしそれでは皆様が！」
「おふたりの脱出の隙を作った後、我々も散開して敵を撒きます。合流の手筈は追って考えましょう。覚えておきなさい。貴女と王子は失うわけにはいかない切り札なのだと」
武術姫がクールに畳みかける。フィオナにはとっさに出せる対案はない。
「……わかりました。白麗様も、皆様も、どうかご武運を」
「お互いに。撥条舞陣を取れ！」
「ハッ！」「ハイッ！」
白麗の号令で四人の武術家が集い、互いに向かいあって腕を組みあわせ、気を巡らせる。同時に白麗も四肢の先端に気を集めて地を蹴った。
「灰猫炮！　ハイィィィッ！」
拳士たちの組んだ踏み台を用いて高々と跳躍した武術姫は、暗雲の真っただ中で両の拳を打ちあわせた。
ボゥンッ！
「グブブ……」「ブ、グゥ……」
瞬間、光と衝撃波が弾けて霧を掻き乱す。同時に憑依オークたちも統制を失い、短時間ながら棒立ちとなった。
「今です！　目的を達しなさい！」
「はいっ。皆さんどうかご無事で！」
フィオナは馬車を駆り、停止した包囲網を突破していく。再度寄り集まった闇色の霧は煙る触手を伸ばして馬車を追おうとするが――バシィッ！
複数の気弾が魔族の進路に回り込み、ぶつかりあって光を弾かせる。霧状魔族は壁にぶつかったかのように殺到を止めた。
「私たちの気功なら、浄化はできずとも接触は可能のようですね」
拳士たちの肉弾やぐらに着地した武術姫が不敵に微笑む。
「姫様。薄汚い魔族風情、ここで打ち倒しても構いますまい」
「無論です。第四席までは私とともに。他の者は雑兵の足を狙いなさい」
単なる自己犠牲で終わるつもりはない。戦乱の中で売れる恩は売り、上げられる功績は上げる。平和を取り戻した後の国際社会で発言権を高める打算も当然ながら忘れてはいない。
「ブググゥッ！」
オークたちが再び動き出す。白麗は武術家のうち精鋭の男女四名を連れて、地上に降りてきた魔霧へと向かった。
「フェイエン五獣葬、かかれ！」
「リャオッ！」「ハイヤァッ！」
地上にわだかまる霧目掛け、左右から回り込んだふたりが拳を打ちかかる。インパクトの瞬間、空中に紫電が走り、不定形の魔族が渦巻いて揺らいだ。
「セイヤァッ！」「ホワチャァッ！」
さらにふたりが目標を飛び越え、ひとりが上から、もうひとりが着地しざまに振り返り掌打を打ち込む。
四方から気を込めた打撃を受けた魔族は、残された唯一の方角、すなわち白麗の真正面へと射出された。
フェイエン五獣葬。フェイエンに生息する五種の獣になぞらえた気拳を打ち込み、対象内部で合一、破裂させるフェイエンでも精鋭中の精鋭にしか扱えないコンビネーションである。不定形の敵との戦いは初めてだが、見事に技を成立させるところに彼ら極星一葬の精鋭たる所以がある。
「ハァァ――ハイィィィッ！」
白麗は練り上げた気を指先に集中し、迫る怪異へと突き出した。聖なる破邪の力ではないが、精神の力で精神を削ぐ暗殺武術の究極形ならば不定形の魔族にも有効打を与えうる。白麗の読みは、的を射ていた。しかし――。
パキィン！
「っ!?」
衝突の瞬間、気の爪が砕ける。魔族が瞬間的に一部の密度を高めたのだ。互いに接触が可能であれば、密度と総量に優れた者が打ち勝つ。
（まさか、誘われていた！）
さらに闇の霧は自らをいくつもの鋭いトゲの形に凝縮し、全方位から白麗に突き刺さった。瞬間、全身の神経に電流が走る。
「くっ、あああああっ!?」
身体中の皮膚を剥がされ筋や骨を直接引き千切られるような激痛が、歴戦の武術姫から悲鳴を絞り出した。
「白麗様!?　おのれ！」
膝から崩れ落ちた白麗に、精鋭拳士が駆け寄る。苦悶の姫は顔を上げ、口を開いた。
『我が声を聞け、形ある小さき者たちよ。我が名はシャドゥ＝ラゥ……この娘の身体は我がもらい受けた』
「来ては、なりませ……うぐっ!?」
こぼれ落ちたのは、ふたつの異なる声だ。部下を制止しようとした火の王女が、腹部を押さえてうずくまる。胃がひっくり返るような激痛が抵抗力を削いでいた。
（まるで、無防備なお腹を殴られたような衝撃……どうやって!?）
『もはや貴様は我が操り人形。意志と感覚を伝達する経路を掌握した。苦痛も快楽も、臓腑の働きもひとつ残らず、

すべてが我が意のまま』

魔王の側近は白麗の言語中枢を介して、打って変わって流暢に解説する。

「ふざけたことをっ。みな、私にかまわず……きゃあぁんっ♥」

身をよじらせ闇を払おうとした白麗だが、今度は不意に艶めいた悲鳴をあげてしまった。

（身体に甘い痺れ……どこからっ！）

刺激のみならず、褥で長らくあげてこなかった可憐な悲鳴に、虜囚姫自身が驚きを隠せない。

「んひィ⁉　ぁっ、んぅ♥　私の身体にィ、なに、をほぉっ♥」

『抵抗は無駄だ。貴様がいくら耐えようともがいても、我は直接この身体の内側から、心の臓を止めることも、あるいは劣情の炎を起こすことができる。そうだな、乳頭の経路を爪弾いてみせようか』

ひとつの口から問いと答えが紡ぎ出される。証明するように、豊満な乳房の根元から先端へ、痛みにも似た激感が走り抜けた。

快楽神経に直接電流を流され、身体を強張らせて我慢しようにも力を入れることができない。

「身体に力が、はいらな……きゃふぅっ、奥が、勝手に、開くぅ……っ！」

『無駄ぞ。目と口、息の根の他に貴様の自由になるものなどない。より淫らに身体を作り変えてやろう』

胎の底で牝器官が蠢き出した。意志と関わりなく子宮が牡種を求めるように、発情して涎を垂らし始める。

「こん、なのぉ、耐えてみせ……んほぉっ、お尻が、抜けひゃぅ、んぅ！」

気を練り筋を引き締め抵抗しようにも、神経のすべてを支配された身体は、もはや思うように動かせない。逆に排便の感覚を強制体験させられ、火の王女はだらしない表情でボンデージの肢体を地面に横たえた。

「姫様――ぐぁあっ！」「ひぃ⁉」

駆け寄る拳士たちが一様に身体を強張らせ、苦悶の声をあげる。白麗の影から伸びた闇の触手が、彼らのことごとくを貫いたのだ。外傷はない、しかし拳士たちは動きを止め、やがて激しく痙攣を始める。

「私の、部下にぃ、やめ、魔ぞ……くふぅっ、ゴリゴリ、いぃっ⁉」

弛緩した唇で紡いだ懇願が、甘く裏返る。膣道のすべての襞が、見えない何かに抉り回されたようだった。

「くぁっ、ふほぉっ⁉　んひゅっ、ひゃぶ、はぁぁぁんっ♥」

直接の性感責めはとうとう顔にまで及んだ。舌と鼻はその場にはないはずの牡汁の味を訴え、熱情恥丘をキュンキュンと震わせる。畳みかけるような身体の異常の中でもっとも強烈なのは、やはり乳房だった。

「やらぁっ、こんなにジンジンすりゅの、知らないぃ……んくっ、あぢゅいぃ、おっぱい、いヒィ！」

『所有物から無粋な鎧を剥ぎ取るのは当然であろう？』

胸を網目のように走る性感神経と乳腺を見えない手で引きずり出されるようだった。淫惨な悲鳴をあげながら、虜囚姫は魔族の目的を悟った。

（私たちの気を弱め、抵抗力を削ぐつもり……ンくぅっ！）

「そんな、真似はぁ……んひぃっ、胸が、中で暴れて……っ！」

『母乳を噴くのは初めてか？　よかろう、感覚の密度を高めてやろう』

性感神経が燃える。乳腺が煮える。乳房を走る気脈が乱され、心と身体を淫らに作り変えられていく。

「ウグ、ハァッ！」「キャヒィィ！」

拳士たちも全身の神経を掌握され、男女を問わず燃え上がる身体に翻弄される。総崩れとなった彼らは、もはや不死身のオークたちの敵にはなりえなかった。

シャドゥ＝ラゥはほくそ笑む。

『存分に気をやってもらおうか。そのほうが料理しやすいのでな』

「うく……っ、んぅっ、こんなぁ……♥　乳房が、煮えて、なにかが、出てくぅ、きちゃうぅ♥」

「あぎぃっ、姫さまぁ！」「いひっ、んほぉっ！」「や、めろぉ、ふぁ！」

胸を掻き抱く白麗の周囲で、異形たちにのしかかられた女武術家の凄惨な悲鳴が響く。

だが今の白麗に悲鳴は聞こえない。鉄串で貫かれたかの如く、芯から熱く燃える乳房を振り乱し、無意識に腰をしゃくらせてしまう。手が勝手にボンデージチャイナを掴んで、盛り上がった乳果実を外部に晒した。

「はひっ、むねぇっ、引っ張られっ、イクっ、イッてしま、ぁぁっ♥」

ぷしゅっ、ぶぴゅうううっ！　射乳体質へと改造された火の王女は、感度を引き上げられた乳突起を内側から熱い奔流で扱き上げられ、未知の絶頂に翻弄された。

「これが、おっぱい……母乳、イクぅ……んぁっ、んぎぃっ♥」

乳ポンプから絞り上げられた白濁液は、放物線を描いて何かにぶつかった。

「ブグゥ……」「グブブ……アマイ、ミルク……」

薙ぎ倒され痙攣する男拳士たちを踏み越え不死身のオークたちが迫る。醜いモンスターは、熱く男根をそそり立たせ、極上の獲物へと突きつけてきた。

（こんな怪物たちに犯される……おかしくされた身体で……！）

床術に明るい火の王女と言えど、身体の制御がままならない状況では余裕を保っていられない。

「あぁ、やめて、やめなさ……」

弱々しい制止も空しく、ボンデージチャイナの武術姫は太い腕に押さえられ、地面に組み敷かれ、そして――。

フィオナが駆る馬車は、やがて目的の沿岸都市に辿り着いた。しかし。

「そんな、誰もいないなんて……」

スラルドはゴーストタウンと化していた。出歩く者はおろか、家や商店に

著者近刊　『くノ一少女は笑顔が苦手』　好評発売中！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/